
恋も幸せも彼女しだい

テイク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋も幸せも彼女しだい

【Nコード】

N1221L

【作者名】

テイク

【あらすじ】

高校に二年になっても変わらない日常に不満を抱きながらも普通に生活していた狩野悠はひょんなことというか気の迷いでクラスで孤立していた美少女佐藤美鈴に話しかけてしまう。

それから素直じゃない彼女に振り回される日々が始まる。それに個性豊かな友人たちも混じってきて……。

なんだかんだ言いながらも根は優しい佐藤美鈴とお人好しな狩野

悠の日常を綴る物語。

第一話 邂逅（前書き）

初の恋愛小説。駄文ですがよろしくお願ひします。

第一話 邂逅

いつからだろう世界がこんなにも現実味を帯びたのは。いつから夢を忘れてしまったんだろう。子供の頃は自分に出来ないことはないと信じて疑わなかった。世界には不思議が溢れていると信じていた。いつからこんな風になってしまったんだろう。世界には不思議はなく自分にはできないことがある。正義の味方なんていない。正義は悪に負ける。自分は物語の主人公のような特別な人間ではなくただのたくさんいる人の中の何の特別でなんでもない一人の人間だと気がついた。日常は平凡で退屈で何一つ変わらない同じ事の繰り返し。いったいいつから世界は、こんなにも現実で溢れてしまったのだろうか。でもそんな日常でもよかったと。そんな日常がいつまでも続けばいいなと思えたのは彼女の佐藤美鈴のおかげだ……………。

春、出会いと別れの季節。何かが始まり何かが終わる季節。僕、かりのゆう狩野悠は一年前私立埜宮高校に入学した。高校に入学しても変わらないありふれた日常、ありふれた生活そんなのを一年間続けた。友達も出来それなりに楽しい一年だったと思う。そして二年に進級して一ヶ月、5月半ばにも変わらない生活。内心うんざりしながらも楽しく生活していたとき。

そんなときだ僕が彼女

たけしのみすず佐藤美鈴に話しかけたのは。

佐藤美鈴、腰まである明るい茶髪の髪。抜群のスタイル。少しキツめの顔。彼女を外見だけで判断すると美少女であった。だが、彼女はクラスで孤立していた。進級後一ヶ月、新しいクラスの連中も打ち解けてきた頃なのに佐藤美鈴は誰とも付き合わず独りでいた。クラスの連中によると無愛想、態度が悪い、口が悪い、性格も悪い、

でも美少女とのことだ。

そう、美少女、いくら性格が悪いとはいえ美少女である彼女は入学当初は多少性格が悪くても美少女だったので目をつけた男子が告白ラッシュであったという。だが、佐藤美鈴はその全てを断り誰とも付き合うことはなかった。しかも振るときにえらく酷い振り方をしたらしい。一年経った今では彼女に近づく男子はいない。触らぬ神に祟りなしということらしい。当然僕は告白していない。振られるのわかってて行く馬鹿はいないし別に好きでもない。

では女子はというと入学後も進級当初もさすがに孤立させるのはまずいと思ったお節介でお人好しな女子がクラスにとけこませようとしたのだが佐藤美鈴本人にやる気がないことが災いし諦められることになりそのおかげで現在もクラスから孤立中である。こんなので一年間過ごしてどう思ったのだろうか少し気になる。

そんな5月の半ばのある日。黙って窓の外を眺める彼女になぜか僕は話しかけていた。その理由は今でもわからない。

「何を見ているんだ？」

「……………別に。暇だから外眺めてるだけ」

内心返答が帰って来たことに驚く。何も言わないか罵倒されるかと思っていたのだ当たり前だろう。

「暇なら誰かと話せばいいじゃないのか？」

「アンタに言われる筋合いはないわ」

「そうか」

「そうよ、そもそも私が好きでここにいるんだから何も言わないで欲しいわ」

「お前のことを思っ
て言っ
てんじやないのか？」

「そうなら邪魔
しないで欲しいわ」

「なら暇なことを愚痴
るなよ」

「わかっ
てるわよ、そんなことは、で何か用でもあつたの？」

「別にないけど？」

「それなら話しかけないで」

それきり会話はなし。さて、クラスを見回すとみんな驚いている。まあ、あの佐藤美鈴が人と話していたんだから当たり前か。僕自身でも他人なら同じ感じになるだろう。当事者なのがどこか恥ずかしい。

さて、これが僕の佐藤美鈴のファーストコンタクトだった。宇宙人のファーストコンタクトよりは簡単だったと思える。

「おい、英雄」

茶髪のいかにも軽そうな男が言った。こいつは友達の三上喜助^{みかみきすけ}。情報通でなにかと便利な奴。ちなみに入学式で佐藤に一目ぼれし入学式直後佐藤のクラスメート全員の前で告白し玉砕するという伝説を作った男。

「なんだそれは」

「あの難攻不落の佐藤美鈴ときちんと会話したお前は今俺たちの希望で英雄なわけだ」

「えらく不名誉な気がする」

「それにしてもなんで悠ははなしかけたんだい？」

黒髪の小柄で優しそうな顔の男が言った。コイツは栗原直哉^{くりはらなおみ}。一年からの友達で結構女子にモテる。本人はあまり恋愛に興味がない

ようだ。

「さあ、なんとなく」

「なんとなくて話しかけるとはますます英雄だな」

「やめる」

そんなことで英雄なんて呼ばれたくない。

「スクープですよ！ 大ニュースですよ！！ バッドエンドですよ！！！！」

メガネをかけた女子が僕の前に来た。

「なんだ木山？」

「あの無愛想極まりない佐藤美鈴が人と会話しているなんて驚きです！！ スクープです！ 大ニュースです！！ バッドエンドですよ！！！！」

「いや、大ニュースなのはわかるがなんだよバッドエンドって？」

「ノリです」

「ノリかよ！！」

木山秋子^{きやまあきこ}。一年のとき同じクラスだった女の子。この学校唯一の新聞部員。人気がないのかしらないが人数不足で既に新聞部は廃部状態だが木山一人で勝手にやっている非公式な部活だ。教師に何も言われていないのは木山の實力だろう。

「そんなわけで記者としては今の心境を聞きたいんですよ」

「別になんともこつちも会話が成立したことに驚きだよ」

「なるほどドキドキが止まらないと」

「いったい誰がそんなことを言った！！」

「ちょっとした冗談ですよ。私のプライドにかけて記事には真実しか載せませんよ」

そう木山の新聞には真実しか載らない。地道な調査で裏づけされた記事しか載せない。そのため定期的な発行は不可能だが学校ではファンも多い。

「情報は鮮度も大事ですけど私は真実を伝えたいんですよ」彼女の言葉だ。

「さ〜て、それじゃあ早速記事を書きますかね〜」

「がんばれよ〜」

「わかってますよ〜」

木山は教室を出て行った。

「さて、英雄」

「英雄言っつな」

「まあ、がんばって佐藤をクラスになじませてやれアレでも美少女だ普通だったら……………ふふふ」

「お前それが本音か!?!」

「当たり前だろう!?!」

拳を握る三上。

「僕を巻き込むな」

「この馬鹿野郎!?! 栗原はわかってってくれるよな!?!」

「遠慮しておくよあとが怖そうだからね」

「くそー!?!」

三上が教室から出て行った……がすぐ帰ってきた。

「ここは追っかけるところだろ……！」

「面倒だ」

「追いかけたくないしね」

「クソー……！」

今度こそ本当に三上は教室を出て行った。その直後昼休み終了の鐘がなり教師に強制的に連行されていた。そして放課後。

「さてと、帰るか」

僕は別に部活をやる気もないので帰宅部だ。

「じゃあな悠」

「ああ、じゃあな三上」

教室を出て高校を出る。前を見ると佐藤が歩いていた。こいつこっち方面だったっけ？ 孤立していたこともありあまり気にしていなかったのでよくわからない。

「……」

とりあえず声をかける気もないのでただ歩く。ふと佐藤が振り返った。

「ねえ、いつまでついてくる気なの？」

本日二回目の会話。何でいきなりこんなこと言われなといけななんだよと思ったが表には出さない。出したら面倒なことになりそ

うな雰囲気だったから。

「仕方ないだろ家こつちなんだから」

「……そう」

「？」

佐藤はそれだけ言って再び歩き出した。

「なんなんだ？」

わけがわからない。

「考えても仕方ないか」

女の考えなどわかるはずもなく深く考えることなく家に向かった。

「ただいま」

返事は返つてこない。その後佐藤とはどこまで一緒だったか覚えていない。いつの間にか消えていた。この近くだということは確か。

「まあいいか」

玄関からリビングへ。テーブルの上に置手紙が置いてあった。

「父さんかな？」

見ると父さんの文字で書いてあった。

『悠へ』

今日から出張に行くので俺の分のご飯は作らなくていい。何か必要なときや困ったことがあったらすぐに電話しなさい。きれいかつてたトイレの電気は変えておきました。いつもいつも迷惑かけるがよろしく頼む。

父より
『

と几帳面な文字で書いてあった。

「なんだ出張か。忙しいな。おっと、先に参らないと」

仏間に行き仏壇に手を合わせる。

「母さん。父さんはまた出張だよ。少しの間僕だけでさびしいと思うけど我慢してくれ」

仏壇に飾られている写真には僕の母さんが写っている。僕の母さんは僕を生んだと同時に死んだらしい。それ以来男手ひとつで僕を育ててくれた父さんには頭が上がらない。子供の頃は仕事でほとんど家にいなかった父さんに反発していた頃もあったが今ではそれを悔いている。

「さてと、夕飯の準備でもするか」

父さんがいない時は一人で料理しなければいけなかったのと父さんが壊滅的に料理が出来なかったのもあって僕は料理が出来る。父さん曰く料理の才能があるらしく母さん譲りの才能らしい。母さんも料理がうまかったという。僕の料理は母さんの味に似ているらしい。

「食ったことないからわかんないんだよな」

そんなのでどうやって似たのかわからない。DNAにでも刻まれていたのだろうか。まあ、そんなことはどうでもいい今は夕飯を作ることに専念しよう。

「さて、なにがあつたかな」

冷蔵庫を開ける。

「お、豚肉だ。そうだな久しぶりに生姜焼きでも作るか。あとは玉葱とピーマンかよし」

そんなわけで生姜焼きを作る。

「まずは下ごしらえっと」

豚肉は食べやすい大きさに切る。ピーマンは細切りにし、玉ねぎは薄切りにしておく。それを醤油、みりん、砂糖、水、おろし生姜、おろしニンニクで作ったタレの中につける。

「さて、炒めますか」

十分にタレがしみこんだところで炒める。

「はい、完成」

うん、上出来上出来。出来たのは二人分。一人分は仏間に持つていく。

「はい、母さん、今日の夕飯だよ。口に合うかわからないけどね」

仏壇に供える。こんなもの供えていいのかわからないが父さんが供えてやるうと言ったので供える。きちんと虫が湧かないようにしておく。あとの一人分はリビングのテーブルの上に運ぶ。

「さた、いただきます」

今日の夕食は豚肉の生姜焼きと昨日作ったサラダの残りのご飯。

「うん、やっぱりご飯にあつな豚の生姜焼き」

我ながら惚れ惚れするほどうまい。って何を言ってるんだ。数十分で夕飯を食べ終わり片付けに入る。

「ふう」

片付け終わってソファーに座っていると。

『ニャア〜』

猫の鳴き声が庭の方から聞こえた。

「この鳴き声はまさか!？」

窓を開ける。

『ニャッ!?!』

鈴のついた赤い首輪をした黒猫が飛びこんできた。

「シュレディンガー!!」
『ニヤ〜』

この黒猫はうちの愛猫シュレディンガー。放浪癖があるため時々いなくなつては数日から数週間後にひょっこり帰ってくる。名前は母さんが猫を飼うなら名前はシュレディンガーと言っていたらしくこの猫にはつけたらいけない名前となっている。

「お前今までどこ行ってたんだよ」

『ニヤ〜』

「わかんないよ」

『ニヤ〜』

「まったく、もう少しで放浪最長記録更新するところだったぞ」

今回の放浪は三週間と六日。もう少しで一ヶ月という大台にのるところだった。

『ニヤ』

関係ないと言つ風に一鳴きしてソファで丸くなった。

「やれやれ。さて、風呂にでも入るかな」

シュレディンガーを一瞥して風呂場へと向かった。

・
・
・
「ぶじ〜」

風呂から上がって階段を上り自分の部屋でベッドに座る。

「それにしてもあの佐藤が僕なんかと会話するなんてね」

本当に今日は驚いたな。シュレディンガーまで帰ってきたし。

「さてと、ん？」

見るとメールが来ていた。

「誰だ？」

三上だった。

「なんだ？」

読んでみるとどうやら佐藤と帰っているところを目撃されたらしいそのことについて聞かせるとのことだった。

「どこで見られたんだ？ てか一緒に帰ってないから。あれ一緒の方向にただ歩いていただけだから」

まあ、それを返信したところで面倒くさくなるのは確実なので無視をする念のため着信拒否にもしておく。

「これでかかってこないだろう」

家の電話番号は教えていないからかかって来る心配はない。

「さて、寝ようかな」

ベッドに寝転がる。いつの間にかシュレディンガーがベッドの上に居座っているがそれを少し脇にずらして眠りの体勢に入る。

「おやすみ」

そう言って僕は眠りについた。

第一話 邂逅（後書き）

感想お待ちしてまゝです。

更新は一週間に一話の予定。

ですが予定は未定です。時間がないです。あでもGWあるからな
とかなるかな。

第二話 袖振り合うも多少の縁、弁当食い合うも多少の縁？

翌日、5月14日金曜日。天気は晴れ。朝5時だ。

「さて、と弁当を作るかな」

僕は既に起きて朝食と弁当の用意をしていた。シユレディングーはまだ僕の布団で寝ている。とりあえず猫用のご飯は用意しているので起きてから食べるだろう。そのあとはまたどこかに行くのかもしれない。まあ、いつもいつか帰ってくるのでいいのだが。心配ではある。

「さて、弁当はこれくらいでいいかな」

弁当箱の中に半分くらいご飯をいれてあとはおかず。定番の鶏の唐揚げ、玉子焼き、豚肉のみず菜巻き、ほうれん草のソテーを入れる。

「こんなものかな」

うん、今日もいい感じだな。時間は6時だ。

「さて、いただきます」

弁当のあまり物だが朝食にはちょうどいい。テレビをつける。ちよつど天気予報があった。

『今日は全国的に晴れですが午後から天気が崩れる可能性もあるので折り畳み傘を持つとよいでしょう』

折り畳み傘か確かあったな。大きな事件もなくニュースを見終わり時間は7時ちよつと前。着替えて鞆を持つ。

「さて、行くかな」

『ニヤ〜』

「行ってくるよシュレディンガーいい子で留守番しいてくれよ」

『ニヤッ』

任せるといっようにシュレディンガーが一鳴きする。僕は家を出た。その直後どこかへ行くシュレディンガー。まったく留守番する気ゼロであった。

「まったく」

シュレディンガーめ。まったく留守番する気ゼロかよ。

「はあ〜」

「なに溜息ついてるのよ」

「え?」

そこにはまったく予想外の人物が立っていた。

「佐藤なんでここにいる」

「別に。ここ通学路だから通るのは当たり前でしょ」

昨日はさっさとどこかに行ったたくせになんどこににいるんだよ。

「あっそう」

それきり会話ゼロ。

「おーい、悠！」

「よう、三上」

「おはよう悠」

「栗原もいたか」

「まあね。それより珍しい人と登校してるね」

「知らん。僕的には一緒に登校してる気はないがな」

「それはお前だけだ、他から見ると一緒に登校している風に見えるんだよ英雄」

「英雄言つな三上」

「知らんお前など死んでしまえ」

「何でだよ！」

何でいきなり唐突に三上に死んでしまえといわれなといけな
んだ。

「うるさい！！ 美少女と一緒に登校というギャルゲでしかありえないようなシュチュエーションを体験しやがってうらやましいんだよこの野郎！！」

「知らねえよ！！！」

「どの道この世界はギャルゲかもしれないしね」

「栗原は何を言ってるんだ」

「何もただひとつの可能性の話を」

「いや、そんな可能性は万に一つもない」

「残念だよ」

栗原は何を望んでるんだよ。とまあ、一番わからないのは佐藤が他の人間と登校しているということなのだが。そして高校に着き昇降口を上がるまで前を歩いてきた佐藤は無言無表情。何か呟くとか

してもいいと思う。そうだ三上たちにシュレインガーのこと話したほうがいいな。あいつらにも心配かけたし。

「そうそう、昨日さシュレインガーが帰ってきたんだ」

「本当か！？ よかったな」

「そうだね。もう少しで最長記録を更新するところだったんじゃない悠？」

「あああ、あと少しで一ヶ月越えるところだった。まあ、また朝どこかに行ってただけだな」

「ははっ、相変わらずだな」

「まあ、またひよっこり帰ってくるだろ気にすんなよ悠」

「そうだな三上」

話しているうちに僕達の三階の2-2の教室に着いた。そのあとは読書などをしてすごした。なにやら佐藤がずっとこっちを見ていた気がするがそんなことあるわけないから気のせいだろう。

しばらくして予鈴がなり五分後担任が入ってきた。どこにでもいそうなひよろつとした幸の薄そうで気の弱い世界史教師(男)だ。

「え〜。HRをはじめます」

『起立ー！ 礼、着席』

「はい、それじゃあ読書を始めてください」

この学校は朝の十分間読書を薦めている。国語力がつくとかつかないとかでらしい。僕は別に読書が嫌いではなくどちらかといえば好きなのでいい。そのおかげか国語の点数は勉強しなくてもそれなりに高得点をキープしている。

十分後。

「やめ。ではHRに入ります。特に連絡はありません。この頃服装違反が目立ってきているので直してください。以上、授業の用意をしておくこと」

『起立、礼』

『ありがとうございます』

今日のHRは別に何もなかったので早く終わった。

「さうて、一時間目はなんだったかな」

英語。いきなり僕の嫌いな教科だ。そもそも何で日本人が英語を学ばなくちゃいけないんだ。僕は一生鎖国すると誓ったんだ。だが、授業はそんなこと知らずに進む。はあく嫌だ嫌だ。何せ英語が嫌だからって僕理系を選んだからな。あと、そっちのほうの性が性にあうからだ。

「はあく。朝から嫌な気分だ」

そんなわけで担当の教師が来て授業が始まった。

・
・
・
四時間の授業が終わり学生にとって一番幸せな時間である昼休みがやって来た。

「お〜い悠昼飯食おうぜ〜」

三上と栗原が机をくつつける。僕はそこに弁当を持っていく。

「さて、悠。お前には特別任務ミッションを授ける」

「なんだ三上 いきなり？」

「佐藤を……誘って来い！！ あいつをクラスに溶け込ませるのがお前の使命だ！！ これはその第一歩なのだ」

三上が熱く言う。絶対こんなこと考えてないだろこいつ。

「……………本音は？」

「美少女と一緒に弁当食いたいんじゃないボケー！！！！」

やっぱりか。

「三上は欲望に忠実なんだよ。でも、いい機会だからね誘ってきたよ」

完全に押し付けられた気がする。

「ほら行け、さっさと行け、すぐに行け！！ 美少女連れて来い！！」

押す三上。

「わかったわかった、行けばいいんだろ行けば」

はあ。諦めて一人教室の端で弁当を広げる佐藤の所に行く。

「な、なあ、佐藤俺たちと弁当食わないか？」

三上たちを指しながら言った。

「……………」

佐藤が三上たちを一瞥して言った。

「いや」

「……………」
「そうか」

僕が戻るうとすると。

「アンタとなら別にいいわよ」

佐藤がそういった。

「……………」

これは喜ぶべきなのだろうか。どうやらなぜだか知らないが僕は佐藤に気に入られたらしい。そんなわけで三上と緊急アイコンタクト会議。

「……………」
「……………」
「……………」

「何ー！？ うらやましいんだよこの野郎！！」

「……………」
「……………」
「……………」

「……………」
「……………」
「……………」

アイコンタクト会議終了。一方的になじられた。仕方ないままさ
ら戻るに戻れないので佐藤の前に机を隔てて座る。

「……………」

「……………」

沈黙。正直言っただけのこととは初めてだ。何をしゃべっていいかわからん。佐藤が何を考えているのかすらわからない。ひとまず佐藤を観察する。黙々と弁当を食べている。可愛い女の子らしい弁当だ。おそらく手作りと思われる。……よしこれだ!! これがこの沈黙からも脱出できるかもしれない。

「その弁当お前の手作りか？」

「違うわよ」

「……………では誰の？」

「近所のおばさん。なんか渡してきたのよね」

「……………へ、へえ」

「で、それがなに？」

「い、いや、うまそうだから」

「そう、あげないわよ」

「いやわかってるよ」

「そう」

「……………」

「……………」

再び沈黙。まさか、近所のおばさんの手作りだとは思わなかった。てか、誰も思わないよ。なんで近所のおばさんが佐藤のために弁当作ってんだよ。わけわからん。……なにか事情があるのかもしれないが僕にはこの空気を何とかして欲しかった。頼む誰でもいい変えてくれ。この流れを。それは唐突に訪れた。

「ねえ」

「な、何？」

佐藤の方から話しかけてきた。

「それアンタが作ったの？」

「へ？」

「それよそれ」

佐藤が指差してるのは僕の弁当。

「あ、ああ。そうだよ」

「おいしそうね」

「……食べてみるか？」

「あなたがどうしてもっているならもらってあげないこともないわ」
「……はい」

玉子焼きを渡してみる。

「へ」

なにやら感心してみている。

パクッ

「……」

「……」

「……おいしいわね」

「……」

「……」

「……」

「……」

また沈黙。この沈黙は昼休みが終わるまで続いた。一体何を思っていたのだろうか。

「さてと、五時間目ってなんだっけ？ ああ、化学ね」

化学は得意教科だ。面白いよねアレ。担当教師が入ってきて授業が始まる。

・
・
・

そして授業も全て終わり至福の放課後だ。

「さて、帰るか」

明日は土曜日ゆっくり休めるな。

「じゃあな、三上、栗原」

「ああ、またな」

「またね」

三上と栗原に言ってから教室を出る。ふと廊下の窓から校庭を見ると学校の塀の上を歩く黒猫が見えた。

「シュレディンガー？」

赤い首輪をしている。間違いないシュレディンガーだ。こんなところに来て何をしてるんだ？ とりあえず追いつ返される前に確保しないと。昇降口に急いで行き靴を履き変えてシュレディンガーを見た場所に走る。

「えっと確かこの辺だったはずだが」

校庭端の誰も来ない場所だ。

「いたいた」

シユレディンガーを発見した。だが他にも客がいるようだった。

「何やってるんだ佐藤？」

「ああ、アンタ。何しにきたの」

パンをあげようとしている佐藤がいた。

「うちの猫を確保しに来たんだ」

「この黒猫アンタん家の？」

「そうだ、名前はシユレディンガー」

「……………アンタ、もしかして動物虐待とかしてないわよね」

「してねえよ！！」

なんだその疑うような目は。いや、まあ、この名前なら疑われても仕方ないか。

「じゃあ何でこんな名前付けてるの」

「いや、母さんが猫ならシユレディンガーがいつて言ってさ」

「変なお母さんね」

「そうらしいな」

「？」

「いや、何でもない。それより猫好きなのか？」

「別に」

その割にはシュレディンガーがなついてるんだよな。アイツ猫が嫌いな奴にはとことん懐かないからな。それに佐藤、シュレディンガーを物凄く抱きたい顔してる。

「そうか好きなのか」

「アンタちゃんと聞いてたの？」

「ちゃんと聞いてたけど」

「ならなんで私が猫好きに見えるのよ」

「いや、そんな顔してたらさ」

「どんな顔よ」

だからそんな顔だつて。

「帰る」

パンを仕舞い立ち上がる佐藤。怒ったか？

「パンやらないのか？」

「やらない」

あらら。あゝあ、シュレディンガーが「ちよくれないんですかちよっ!」って顔してるよ。かわいそうに、まあ、これで家に帰って来る気になったのならそれでいいんだがな。さてと俺も帰るか。シュレディンガーが悲惨な顔になっているが気にせず佐藤のあとに帰ることとする。

「ついて来ないでよ」

「いやだから僕の家もこつちだし」

「……………」

さつきからかったからか物凄く不機嫌オーラを感じる。これは下手に刺激しないほうがいいな。ってシュレディンガーついてきてるし。佐藤の後ろを歩いている。いつの間に。まさかさつきのパンまだ諦めてなかったのかよ。

そのあとも会話などなく。僕は佐藤の不機嫌オーラを受けながら帰宅したのだった。

「無駄に疲れた」

帰ってすぐベッドに倒れこむ。あの不機嫌オーラに耐えた僕をほめてもらいたい。

「つと着替えないと」

制服から私服に着替える。

「さて、夕食の準備でもするかな」

キッチンに行き冷蔵庫をあける。金曜日なのでそれほど入っていない。うちはいつも土曜の安い日に買う。ちょうど明日が安い日だ。

「明日買えるだけ買っておこう。安いし。確か広告があつたはず」

明日買うものを書き出しておいておき。残っている材料で夕食を作り食べた。シュレディンガーはご飯を食べたあとソファで丸くなって寝ている。

「ふっ」

ようやく一週間が終わった。最後の二日はいつもと違い長く感じなかった。

「ああ、そうか」

佐藤に話しかけたからか。いつもと違うことしたからなんだな。

「そうか、こんなことで日常って変わるんだな」
『ニヤ〜』

それを肯定するようにシュレディンガーが鳴いた。

「おきてたのかよ」

『ニヤア〜』

「いや寝言か？」

まったく。

第三話 小さな優しさ

学生にとって至福の土日の休みが終わり5月17日。週はじめの月曜日。嫌でもテンションは下がってしまう。しかも生憎の雨。さつき降りだした。雨はあまり好きでない僕にとっては下がらないほうがおかしい。いやまあ、休みの日に部屋の中ですごしていても何も言われないことに関しては雨の日は好きだ。だが、こういう学校がある日に雨が降るといふのは憂鬱だ。靴下はぬれるし制服は濡れるし。湿気で気持ち悪いし。雨の日は嫌いだ。さすがのシュレインガーも僕と同じ気持ちで外に出ようとせずにテーブルの下でしきりに顔を洗っている。

「さてと行くかな」

雨が出るので早めに家を出ることにする。玄関にでる。そこにはいるはずのない人間が立っていた。

「は!?!」

外に出た途端驚く。

「何でお前がここにいるんだ?」

なんとあの佐藤が玄関の屋根の中にいた。雨に降られたのか少し濡れている。

「急に雨が降ってきたから雨宿りしてるの」

「傘持ってたなかったのかよ」

「……………」

持ってなかったんだな。確かにさっきまではかなり晴れていたからな。

「ほれ」

佐藤に傘を渡す。

「なに？」

「いや、傘ないんだろ」

「アンタに傘借りなくても何とかなるわ」

何とかかなりそうもない天気だ。

「ほら遠慮せずに借りるよ」

「仕方ないわね。そういうなら借りてあげないこともないわ」

そう言つて傘を受け取つた佐藤。

「じゃあ、先行つてくれ僕はもう一本取ってくるから」

「そう、じゃあ行くわ」

遠慮なく傘を広げて佐藤は出て行った。

「さて、どうしようかな」

正直言つて傘なんてもう一本あるわけない。この家には父さんの分と僕の分二本しかない。僕の分は佐藤に貸した父さんの分は父さんが持つていつている。

『ニヤ〜』

シユレディンガーがこのお人好しめというように鳴いた。はいはいお人好しですよ。

「ん〜、走っていけばなんとかなるか？」

何とかかなりそうもない。本当にお人よしだな僕。もう少し待ってみるか。

・
・
・
少しだけ弱くなってきたとはいえまったくやみそうな気配はない。

「ええいままよ!！」

僕は雨の降りしきる中駆け出した。

「ふは〜」

鞆を盾にし全速力で走った。そして当たり前ながら物凄い被害を受けたがまあ、何とか遅刻せずに登校できた。

「おうおう、今日はぬれねずみか悠〜」

「三上か頼むからどこか行っ行ってくれ疲れてるんだ」

「珍しいね悠が傘を忘れるなんて」

栗原よこれには深い事情があるんだ。言わないがな。それにアン

タバカという佐藤に視線がいたい。ええ、バカですよ。悪かったです
ね。

「いろいろあるんだよいろいろな」

「ふくん、そっか」

栗原はそれで納得したのか自分の席に戻っていった。おそらく感
づかれたな。あいつ予想外に鋭いから。

「ほらタオル貸してやるそれで拭け」

「ああ、助かる三上」

「いいってことよ」

タオルを受け取り髪を拭く。

「洗って返せよ」

「わかってる」

これで少しはマシになった。まだ湿っているが時間と共に乾くだ
ろう。

「遅れてすみませんHRをはじめます」

HRでは特に連絡もなく終わった。

「さてと一時間目は現代文か。確か漢字の小テストがあるんだっ
たな」

現代文は毎時間毎時間漢字の小テストがあるから覚えないな。

「悠見せてくれ」

漢字帳を忘れた三上が僕のところに来て来た。

「自業自得だ」

「この薄情者！！ 親友なら俺のためと思って見せてくれよ！！」

「心を鬼にして忘れたことを後悔させ再発を防ぐのも親友のためだ」

「クソ、それなら栗原ー！」

今度は栗原の所に行った。あ、泣き崩れた。断られたみたいだな。

「頼む！！」

戻って来た三上が土下座してきた。この男にプライドはないのか。

「はあく。わかったよ。今回だけだぞ」

「ありがとう悠様」

「様をつけるな。次は貸さないからな」

「わかってるって」

そういつて毎回毎回忘れてるのはどこのどいつだよまったく。

・
・
・
昼休み。なにやら妙な寒気がしている気がする。気のせいだな。放っておけばなおるかな。それにしてもまだ雨は降り続けていた。

「本当に良く振るな」

「さあ悠！！ 佐藤を誘ってこい！！」

「またかよ」

「三上もがんばるね」

「当たり前だ！！ 美少女を前にして諦めれるかー！！！」

暑苦しいやつめ。

「わかったよ。だが、あまり期待するな」

「はいはい、さっさと行け」

そんなわけで

「佐藤一緒に弁当食わないか」

「いや」

「ああ、そう」

「アンタに話があるからアンタとならいいわよ」

「いや、僕は……」

「いいからそこに座りなさい」

「……はい」

有無を言わせぬ迫力に僕は了承してしまった。はあ、仕方なく座る。

「アンタさ」

「ん、なんだ？」

「アンタさ、もしかしてマゾ？」

「はあ！？ 何だよ！！ 何でそうなる！！」

「だってアンター本しかない傘を人に貸すなんてバカか、マゾか、極度のお人好ししかないでしょ。他人なんだから放っておけばいいじゃない」

「他人たって確かにそうだが、女の子を 佐藤を雨に濡らすわけはいかないだろ」

「……………プツ、あはははははは」

あの佐藤が笑っていた。

「笑うなよ！」

「ごめんごめん。ふふっ、本当にバカね」

佐藤が笑ったのをはじめてみた気がした。思わずその笑顔に見蕩れてしまった。やっぱり佐藤も女の子だと実感した。

「悪かったなバカで」

「いいじゃないにバカで、私バカの方が好きよ」

「お前そんなことを恥ずかしげもなく言うなよな！！」

「いいじゃない」

「……………」

コイツに何を言っても無駄か。

「まあ、それはいいとして本題はお礼」

今までのが本題じゃなかったのかよ。

「お礼？」

「そっ、一応かさ貸してくれたからねその……………ありがとう」

……………不覚にも……………不覚にも頬を赤く染めてそう言った佐藤を可愛いと思ってしまった。てかその前のこともそんな感じで言えよ。

昼休みが終わり自分の席に戻ると手紙が置いてあった。明らかに

ラブレターではない。ただのメモの切り抜きだ。ご丁寧に定規で筆跡を消していた。

『放課後体育館裏で待つ。 三上』

バカだ。バカとした言いようがない。定規で筆跡まで消すなら名前書くなよ。てか、名前書くならこんな手の込んだことするなよ。この場合無視をするのだが。相手は三上だ。行かなければ面倒なことになるのは目に見えている。仕方ないいくしかないな。

「はあ〜」

溜息をつくとき幸せが逃げるといふのなら僕の幸せは絶対逃亡中だろ。

「五時間目はなんだっけ」

……英語。本当に幸せは逃げているようだ。しかも今日は小テストだ。まったくもって最悪のタイミングだな。早く帰ってきて欲しいね幸せ。

・
・
・

放課後。掃除とHRは既に終わっている。外では雨がまだに降り続けている。そんな状況で体育館裏に呼び出すのがバカであることを主張している。さて、さっさと行ってさっさと帰ってこよう。なんか気分悪いし。

「栗原、ちょっと手伝ってくれ」

「また三上？」

「ああ、そつだ」
「わかった」

物分りのよい栗原と供に体育館裏へ。

「フッフッフッフ。よく来たな！！！」

三上が飛び出してきた。

「驚いたかその手紙の送り主は俺だ！！！」

いや、わかってるよ。名前書いてあったからな。てか、まだ雨が降ってる中に飛び出すなよ。僕と栗原はまだ屋根があるところにいるからいいが、三上はしぶ濡れた。

「てか、何の用だ？ 雨も降ってるから早く帰りたいんだ」

「用件だ。それくらいわかりきってるだろう。貴様が美少女とラブロメしてるからだよ！！！」

完璧な嫉妬じゃねえか。

「だから、貴様はここで肅清する」

ぞろぞろとしぶ濡れの男子集団が現れた。こんな雨の日にご苦労なことだ。

「やってしまえ！！！」

「悠ここは僕がやるからさき帰っていいよ」

「いいのか？」

「うん、まかせといて」

「わかった。頼んだ」

僕は栗原に任せて帰ることにした。栗原？ 大丈夫だ。あいつなら不良の集団と喧嘩することになっても無傷で生還する奴だからな。

「さて、また走るか」

昇降口に行くのと柱に体を預けて立っている佐藤が立っていた。佐藤は僕を見つけると言った。

「遅い!!」

「何してんだよ」

「アンタを待ってたのよ」

「僕を？」

「そう、アンタ傘持っていないでしょ。帰りも濡れて帰られたらたまらないからね。入れてあげようと思ってね」

「は!?!」

……………それってまさかアレですか。アレなんですか!?!

「ほら、早くしなさい!!」

「は、はい」

「あと、勘違いすんじゃないわよ。アンタが濡れて帰ったら私が悪いみたいだから入れてやるだけなんだから!!」

そんなわけで僕と佐藤は相々傘で帰ることになった。

「ちょっともう少しそっち行ってよ。濡れる」

「こっか？」

「そっよ」

「……………」
「……………」

……………うわ。何この状況。やばい、めっちゃ意識する。佐藤も黙ってれば美少女なのだ意識しない方がおかしい。それに何か佐藤いいにおいするし。何これ！！何でこうなったんだ！？僕の混乱なんてつゆ知らぬ佐藤はいつもと同じだ。少しは意識したりしないのか？でも、どことなく佐藤の顔が赤い気がする。何か気分悪くてよくわからないな。

「……………今日は悪かったわね」

今まで黙っていた佐藤が言った。やけに素直だな。

「あ？ああ。別に、僕がやりたくてやったことだからな。気にしなくていい」

「そう……………優しいのね」

「普通だろ」

「そっか」

そろそろ家に着くな。正直に言えばこの状況が終わることは少しだけ残念だ。少しだけだがな。そして家に着いた。

「ふう、正直助かった。サンキュー佐藤」

「別にもともとアンタの傘だし」

「その傘借りて行っていいぞ」

「当たり前でしょ」

佐藤はそう言って帰っていった。

「ふう、ハクション！！　うう、風邪ひいたか？」

今日は暖かくして早く寝よう。

『ニヤ〜？』

シュレディンガーが僕を気遣うように鳴いた。

「お前は優しい奴だな」

『ニヤ』

それほどでもと言っている気がした。

「さて、とりあえず夕食作って風呂入って寝よう。風邪ひいたら駄目だろうしな」

とりあえず冷蔵庫を開ける。土日に買い物に行ったので食材は豊富だ。

「今日は中華でもつくるかな」

作ったのはかに玉。家庭で作れる簡単レシピだ。久しぶりの中華だったがつましく出来た。

「いただきます」

『ニヤ〜』

夕食を食べ風呂に入る。風呂から上がり。

「ふう、シュレディンガー悪いけど僕はもう寝るよ」

『ニヤ』

「じゃあ、おやすみ」

そう言って自分の部屋に行き布団に入った。すると静かにシユレ
デインガーがもぐりこんで来た。それは今の僕にとってはうれしか
った。そのまま僕は眠りについた。

第四話 風邪

翌日、5月18日、火曜日。昨日の天気が嘘のように晴れている。そんなすがすがしい日に僕は案の定風邪をひいていた。原因は明白。昨日雨にうたれたままよく乾かさずに学校の授業を受けたことだ。佐藤を濡らさないためとはいえ完璧な自業自得だ。熱が上がり頭が朦朧とする。一応体温計で図ってみたら39度強。学校は休んだほうがいいな。皆勤賞を狙っていたのだが仕方がない。それにあの佐藤の笑顔を見て相々傘が出来たんだ。お釣りが来るくらいだ。

「仕方ない素直に寝てよう」

学校にはさつき電話した。寝ようとしたときチャイムがなった。

ピンポーン

まだ六時だ。誰か来るにしても早すぎる。

「いったい誰だ？」

玄関を開けると佐藤が立っていた。

「やっぱり風邪ひいたわね」

僕の姿を見て佐藤は言った。ん？ やっぱり。僕は昨日そんなに具合悪そうだったのか？ てかこれも予想済みなのかよ。

「すまん」

「何で謝んのよ。元はといえば私のせいでもあるんだから」

「いや、こつちの自業自得だろ」

「まあ、いいの、ほら傘返しに来たのよ。それと朝ごはん食べてないと思っただからつくりに来てあげたわ」

「いいってそんなことただの風邪だし。それにお前にうつすかもしれないし」

「反論はなし。原因の一端は私にあるんだからこれくらいさせなさい」

正直言つて佐藤のこの申し出はうれしかった。以外に律儀な奴だ。

「食材自由に使うわよ」

キッチンでエプロンを着けながら言う佐藤。普段の僕なら幾分か反応するが朦朧とする頭では十分な反応が返せない。てか、それ聞く前から使つてんじゃん。料理を進めていく佐藤。てかこの光景を三上が見たら卒倒しそうだ。

三十分後、料理が出来たようだ。僕はその間少し眠っていた。だが、気分は一向に良くなるはず逆に悪くなっていくようだ。さつきよりも頭が朦朧としてきた。食欲もなくなったし。でも、せつかく佐藤が作ってくれたのだ。食べないと失礼だろう。

「はい、食べやすいお粥にしといたから」

「ああ、ありがとう」

「……………」

「何してるんだ？」

佐藤がスプーンを持って隣に座った。

「食べさせてあげる」

「いや、自分で食べるって」

正直なところ微妙だが。食べないことはないだろう。

「駄目、アンタ今めっちゃきついでしょ」

「う」

「図星みたいね。だから、食べさせてあげるわ」

「何で」

「原因の一端が私にもあるからよ。あと借りは返す主義なの」
「そうか」

それを肯定と受け取ったのか佐藤がスプーンでお粥を掬う。

「ふゝ、ふゝ。はい、あ〜ん」

「……………」

さて、これはどういうイベントなのだろうか。ものすごいことが今起こっているのではないかと。と普段の僕なら思っただろう。しかし、生憎この時僕は病人だった。

「あ、あ〜ん」

パク。

「……………よくわからん」

風邪のせいかわ味がまったくわからなかった。

「そう、まあいいわ。はい、もう一口」

「ああ」

こうして佐藤は全部食べさせてくれた。あとで思い出したとき物凄く後悔するのだが病気でテンションがおかしかったのだろう。まったく気にならなかった。気になったのは。

「なあ、佐藤、その手の絆創膏なんだ？」

佐藤の手にはいくつもの絆創膏が貼られていた。

「なんでもないわ」

「そうか？」

朦朧とした頭では深く考えることが出来なかった。

「じゃあ、もう寝なさい。ただの風邪なら寝てれば治るだろうし」

「ああ、そうさせてもらおう」

安直だが確実だ。

「私は学校行くわ」

「ああ、助かったよ」

「帰りに様子見に来て上げるからきちんとして水分とって寝てなさいよ」

「わかったよ」

「じゃあ、またね」

「ああ」

佐藤が出て行った。

「さて、寝よう」

二階に行き布団にもぐる。中にシュレディンガーがいて心地よい暖かさだ。

「おやすみ」

僕の意識はすぐにやみに沈んでいった。

登校して自分の席に座る。まだHRまで時間がある。

「大丈夫よね」

あゝ。私なに考えてんだろ。あんなバカのこと考えるなんて。

「それにしても最悪」

自分の手を見る。絆創膏だらけ。なれないことするもんじゃないわね。気づかれないようにするのが大変だったじゃない。あのバカ。

「はあ〜退屈」

「おい。佐藤」

「アンタだれ」

何かよくわからないちやらかした奴が話しかけてきた。そういえばアイツとよく一緒にいる奴ね。うしろのおとなしそうな奴も。

「俺は三上喜助」

「僕は栗原直哉だよ」

「で、何か用」

「そうツンツンすんなよ。悠が休みつてことを教えに来たんだよ。感謝しろよ」

「知ってるわよそんなこと。だから感謝しない」

「なんで知ってたんだよ!!」

「昨日のアイツを見てたら嫌でも想像出来るわよ」

「へへよく見てるね」

栗原つて奴が何か意味深な顔をする。

「なにその顔」

「いや、悠は辛くても余り顔に出さないからね。よく見ないとわからないんだよ」

「何がいいたいの」

「佐藤さんよく悠のこと見てるんだなって思ってたね。悠のことが気になるの?」

「なにそれそんなわけないでしょ」

何言ってるのかしらコイツ。そんなわけないじゃない。ただ、ちよつと気になるといっかなんというか。

「そっか」

何その納得したような顔。何か全部見透かされてるみたいでムカツク。

「で、用はそれだけ? 用が済んだのならさっさと消えてくれる」

「なんて無愛想な女だ」

「はいはい、三上行くよ」

「チッ」

二人は自分の席に戻っていった。

「フンッ」

しばらくして冴えない担任が入ってきてHRが始まった。アイツ大丈夫かしら。

「ケホッ」

あゝ暇だ。あれから寝続けて十二時、お昼だ。熱も下がり、具合もだいぶ良くなってきてきちんと考えられるようになってきた。

「もう、昼か。とりあえずなんか簡単なものでも作って食べておこう」

ベッドから起き上がりキッチンへ。シュレディンガーは僕が寝ている間にどこかに行ってしまった。薄情な奴め。

「さて、何を作ろうか　ん？」

キッチンへ入るとラップをかけられた皿があった。見るとメモがある。

『お粥作りすぎたから置いておくわ。昼にでも食べなさい』

確かに中身はお粥だった。

「なら食べさせてもらうか」

温めなおしお粥を食べる。

「……………うん、まあまあかな」

お世辞でもうまいとは言えないがそれでもうまいと感ずることが出来た。味はまったくおいしくないのにうまいと感ずられた。それはなぜだろうか。

「ああ、そつか。そつえば人にご飯作ってもらったのつて何年振りだつけ」

そつか、だからか。少しだけ嬉しくなつた。

昼休み。私はいつものように教室の端で一人コンビニ弁当を食べていると。

「あれ、今日はお一人なんですか？」

メガネをかけた女子が私に話しかけてきた。

「誰？」

「私ですか？ 私は木山秋子ですよ」

ああ、確か新聞部をやつてる子か。

「何か用」

「いえいえ。用というほどではありませんがこのところ一緒にお

昼ご飯を食べている狩野悠さんがいないこの心境を聞きたくて来たんですよ」

「別にどうもない」

「なるほど狩野君がいなくて寂しいと」

「何でそうなるのよ!」

「冗談ですよ」

「冗談に聞こえないわよ」

「まあまあつとさてと聞きたいことも聞けたのでおいとましますね」

木山さんが離れようとしたとき。

「おつと言い忘れてました。狩野君が狙いならさっさと告るですよ。狩野君を狙っている女子は意外に多いですからね」

小声でそう言った。

「な、何バカなことやってんの! そんなわけないじゃない!」

「まあ、あなたがそう言うならいいんですけどね。それじゃ」

木山さんが去っていった。

「バツカみたい」

何で私があんな奴に告白しなきゃいけないのよ。

「わけわかんない」

弁当を片付けて窓の外を見る。

「……………」

今日はいつもよりつまらないな。

昼のあと再び寝るといふ極楽を行い起きたときには既に夕方。熱も完全に下がり気分もいい。

「ふう、とりあえず完治だな」

ピンポン。

「ん、誰だ？」

ドアを開ける。

「よう、悠来てやったぜ」

「違うでしょ三上。お見舞いだよ」

「三上に栗原か。なんだってお見舞いか」

「そうだよ。その様子だと大丈夫みたいだね」

「ああ」

「じゃあ、見舞いはいらなかったな」

「でも、三上が行こうっていったじゃないか」

「ちよ栗原それは言うなよ！！ あゝほらこれ見舞いだ」

コンビニのプリンとかゼリーとかがごろごろ入った袋を渡してきた。

「ありがとうよ」

「ああ、ありがたく食べ」

「じゃあ、あまり長居するのも良くないから帰るよ。明日はこれる」？

「ああ、明日は行くよ」

「じゃあ、また明日」

「ああ」

「さあ、三上帰るよ」

「ああ。じゃな」

「じゃあな」

三上と栗原が帰っていった。リビングに戻ると。

コンコン

窓がノックされた。カーテンを開けると。

「なんでそんなところから入って来るんだよ」

佐藤が窓の前にいた。

「そんなの私の勝手でしょ！」

「……………」

どうせ三上と栗原がいるから入ってこれなかったんだろ。

「それよりあげてもらえないかしら」

「あ、ああ」

「ありがとう」

靴を抜いでリビングに上がってきた。玄関に靴を置く。

「で、熱は下がったみたいね」

「ああ、ただの風邪だったからな」

「そう、はいこれ」

佐藤がビニール袋を突き出してきた。

「なんだ？」

「いいから受け取りなさい」

言われたとおり受け取る。

「じゃー！ー！」

「あ、おい！ー！」

佐藤はそそくさと帰っていった。

「……………」

なんだっただ？ 袋の中を見るとこれまた「コンビ」のプリンとゼリー。

「お見舞い……………なのか？」

それならそうといってくれればいいのに。

「まったく」

まあ、ありがたいな。

「さてと食べるかな」

さっそくお見舞いの品を食べることにした。

「うん、うまいな」

誰かにこんなものをもらったのは久々だな。

プルルルルル。

「誰だ？」

電話を取る。

「もしもし」

「おお悠か」

「父さん。なに？」

「いやな、まだ帰れそうにないんだ」

「そんなに忙しいの？」

「ああ、かなりな、まったく南雲財閥は人使いが荒い」

「あはは」

「てなわけでもう少し寂しい思いをさせるが我慢してくれ」

「大丈夫だよ。僕ももう17だよ」

「そうだったな」

「そうだよ」

「それなら心配はないな。ああ、大丈夫だな。なんとか夏休みまでには帰れるはずだ」

「うん、わかったよ」

ガチャ

電話は切れた。

「ふう、忙しそうだな父さん」

『ニヤ〜?』

「お前じゃないよ」

『ニヤ』

さてとあいつらにお返しも考えないとな。

「まあ、クッキーでも作るかな」

とりあえずたくさんクッキーを作ることしよう。

・
・
・

「こんなもんかな」

ふう。けっこう作ったな。なんとなく感謝の気持ちを表そうとが
んばった結果。

「食べきれないほど作っちゃった」

ピンポン

「またか」

玄関のドアを開けると。

「はいはいお見舞いですよ〜」

「もう、結構遅い時間だな。部活でもやってたのか」

「ええ。少しやっただですよ」

「はいお見舞いです」

「ありがとうございます」

「いえいえお返しが楽しみなだけですから」

「それが目的かよ!!」

「冗談です」

「冗談に聞こえないってまあいいやちょっと待っていてくれ」

「はい？ まあいいですけど」

キッチンに戻りクッキーを包む。よし。

「ほら」

「おっと、お、手作りクッキーですか」

「ああ」

「ありがたく頂くですよ。はむ」

「もう食べるのかよ!!」

「はむはむはむ、ごくっ。はわ、おいしいです!、最高です!!、

ミステリーです!!」

「なんだよミステリーって」

「ノリです」

「ノリかよ!!」

「もう一袋くださいです」

「意外に遠慮がないな。ほら」

もう一袋渡してやる。

「ありがとうございます。じゃあ、また明日」

「ああ、また明日」

木山が帰っていった。ちなみに木山がくれたのは羊羹。

「さって一日休んだからな。明日からがんばるか」

決意し眠りについた。今回眠ってばっかだな。

第四話 風邪（後書き）

こんなのでいいのかわかりません。

佐藤が思い通りに動かせない。このままじゃ変なところで性格変わってるかも。……………マジでどうしよう。

ので感想よろしくお願いします。ですがあまりきついこと書かれるとメンタル最弱の作者が死にます。

第五話 復活

5月19日、水曜日。昨日の風邪も完璧に治り完全復活だ。それを祝福するかのように空は晴天だ。すがすがしい。この季節は本当にいい季節だ。本当にいい季節だ。この時期から夏にかけては僕の好きな時期だ。とりあえず弁当を作り学校に行く準備をする。病み上がりなので少し軽めの弁当だ。それとお返しのクッキー潰れないように鞆にいれる。さてシュレディンガーにえさをやるとしようかな。

「シュレディンガー！」

呼んでみたがこない。もう一度呼ぶがやって来る気配はない。

「シュレディンガー？」

どうやらシュレディンガーはまたどこかに放浪に出てしまったらしい。まったくいい性格してるよ。この放浪癖はなんとかならないものかと思うが、まあ、無理だろうな。治るようならとつくに治してるし。まあ、それがシュレディンガーのシュレディンガーたる所以なのだが。

「さてと今度はどの位で帰ってくるかな」

今度は一ヶ月以上帰ってこない気がする。シュレディンガーの放浪癖は放浪するたびに酷くなっていつてるからな。まあ、いつもどおりひょっこり帰ってくるだろう。心配せずに待つとしよう。

「いつてきます」

家を出る。

「おはよう」

「ああ、おはよう」

いつもどおりの表情の佐藤がそこにいた。

「もういいの？」

「ああ。心配かけたな」

「別に心配なんかしてないわよ」

「そうか。おっと先に渡しておくほら」

クッキーの包みを差し出す。

「なにこれ？」

「クッキー。僕の手作りだ。お見舞いの礼」

「そ、もらっておくわ」

佐藤は受け取ってくれた。

「なあ、佐藤」

「何」

「いや、さ、何でお前そんなに人と付き合つのが嫌なんだ？」

「別に。どうしてそんなこと聞くの」

「なんとなくなんだがさ。お前が怖がってるように見えたからな」

「……………」

「いや、なんとなくだつて。なんとなく。もう少し人と付き合つてもいいんじゃないか？ 三上とか栗原とか僕とかなら何があつてもお前から離れてはいかなと思うぞ。特に三上は」

「……………」

佐藤に届いたのだろうか。そんな風に思っているぞ。

「おつす悠」

「おはよう悠」

三上たちが来た。

「ああ、おはよう三上栗原。ほれ」

三上と栗原にもクツキーを投げる。

「なんだ？」

「クツキーだよ」

「手作りか？」

「ああ」

「ヤフー、お前のクツキー無駄にうまいからな」

「無駄は余計だ無駄は」

「でもありがたくもらうよ」

「ああ、昼にでも食ってくれ」

「そうするよ」

そうだシュレディンガーがまた居なくなった事を二人に言っとないとかな。

「そうそうシュレディンガーの奴またどっか行ったみたいだ」

「またかよ」

「今回は結構長く居たんじゃない？」

「一週間くらいかな」

「まあ、今度は1ヶ月くらいすれば帰って来るだろ。な、栗原」
「そうだね。最長記録遂に更新だね」

「こいつらもシュレディンガーの習性はわかっている。」

「おはよですよ」

「珍しいなこんなところで木山に会うなんて。」

「おはよう木山」

「おはよっす木山さん!!」

「おはよう木山さん」

「珍しいな木山とこんなところで会うなんて」

「いつも木山は人より早く学校に行くから会わない。」

「いろいろあるんですよ。いろいろと。それにしても」

木山が僕達を見回す。

「面白い面子ですね」

「おもしろい?」

「ええ、これはまったく面白い面子です」

「お人好しにツンデレにバカに天然とこれだけ違う属性が揃ってるのは珍しいですよ」

それは誰が誰なんだよ。

「誰がツンデレだ!!」

「それに三上が反応するのか!？」

なんでだよ。お前はバカだろ。

「何で私がバカなのよ!!」

「それに何で佐藤が反応するんだよ!!」

お前はおそらくツンデレだろ。僕にはわからないけど。

「僕は天然だね」

「なんで……いや、合ってるか」

栗原はボケなかった。

「さて、じゃあ、行きましょう。ここで突っ立っていても何も変わりませんし」

「ああ」

歩き出す。本当に珍しい光景になっている。

「ああ、そうです。昨日のテレビ見ました？」

木山が僕に話しかけてきた。

「いや、何かあったのか」

「ええ、面白いのがあってましたよ。なんと地球一不思議」

「あと六個は!？」

「なぜ、我々は人なのかを三時間延々と議論するテレビでした」

「まったく面白くない!!」

「いえいえ、途中でだんだん議論者が減っていくんですよ。そして最後には誰もいなくなって終わりです」

「斬新!!」

「一体消えた人たちはどこに行ったんでしょうね」

「それが一番の謎だよ」

それを説明してくれよ。てか、ただ自宅に帰っただけなんじゃ。

「ああ、それなら僕は録画したよ」

なぜ録画した栗原。

「面白かったよね。あの爆発」

「爆発!?!」

一体そのテレビで何があった。

「俺も見ただぜ」

三上まで見たのかよ。

「すごかったよなああのサッカー」

「お前のは絶対番組が違う!?!」

ひとつの番組で内容が一致してないぞ。本当になにがあった。

「まあ、そろそろ学校ですので話はこれくらいに」

「せめて番組名を言えー!!」

結局番組名はわからないまま教室に行ってしまった。気になる。
そのまま一時間の授業に突入。

はあ。まったく集中できなかった。なんだよ昨日のテレビ。昨日寝てたよ。完璧に病み上がりだったのもあってな。

「さて、昼休みだ。行って来い悠」
「またか」

半ば習慣化しつつあるこの佐藤への誘いだが。

「いやよ」

予想通りというかいつも通りというかでやっぱり断られ。

「まあ、アンタならいいわよ」

僕だけ許可されるといついっつもどおりの展開へと。

「ちよつといいです?」

行かなかった。木山が登場した。

「何?」
「私も一緒にしてもよろしいです?」
「別に」
「どうもです」

本当に珍しい光景だ。あの佐藤が他の人間（僕以外）とご飯を食べる光景が見れるなんて。どういうことだ。てか、佐藤それなら三上たちも許可してやれよ、三上が泣いてるぞ。

「では、いただきますよ」

木山の合図で食べ始めた。

「それで何でアンタ来たの」

それが人にもものを聞く態度かよ佐藤。

「ん〜別に何も取材対象があなただからとかそんなのでもないです」

「そうなのかよ!!」

「冗談です」

「冗談かよ!!」

まったく冗談に聞こえないぞ。

「まあ、たまにはあなたたち二人と食べてみたいと思ったままです。

それに私としては佐藤さんと仲良くなりたいですからね」

「勝手にすればいいじゃない」

「はい、勝手にします」

佐藤は変わったような気がする。少しだけ丸くなったそう思う。

それが僕の功績とはそんないそうなことは思わないけど。それはよかつたなと素直に思う。これで佐藤にも友達が増えてくれればいいのだが。って僕なにを考えてるんだよ。

「これで佐藤さんの友達二号ですね」

「僕は一号かよ」

「目指せ友達百人」

「小学生かよ!!」

実際友達百人いるやつっているのだろうかいたらいたで怖いな。

「そうですね。まあ、五人くらいで妥協しましょう」

「妥協しちゃった!」

まあ、それくらいが妥当と言えば妥当なんだろうが。佐藤の意思無視してんじゃないか。いいのかこれで。

「じゃあ、さつさと終わらせちゃいましょう。そのバカ二人来るですよ」

三上がはちきれそうな笑顔でやって来た。栗原はいつもどおり来た。

「やったぜ!!! ついに呼ばれた」

「あゝはいはい、それならさらに朗報です。現在佐藤さんの友達募集中です」

「俺がなります!」

「はい三号。そっちの栗原もどうです?」

「そうだね」

「はい、四号」

いいのかよこれで。佐藤は黙々とコンビ二弁当食ってるし。

「じゃあ、みんなで食べよう、佐藤さんもそれでいいです?」

「勝手にすれば」

もう諦めたのか。それとも何か思うところでもあるのか。それとも、僕の言葉が届いたのか。佐藤は許可した。はじめて佐藤がこん

なに大勢で弁当を食べるのを見た。

少しだけど、少しだけ、佐藤が楽しそうに見えた。いつも仏頂面だが少しだけ楽しそうに見えたんだ。

・
・
・

午後の授業も終わり放課後。

「そこのお二人さくん」

木山がやって来た。

「なんだ？」

「新聞部に入りませんか？」

「新聞部っていま廃部中だろ」

「ええ、これから復活させますので。それであなたたちもどうかと
思っていますね」

「僕は別にいいけど」

佐藤はどうかかわからない。

「佐藤さんはどうです？」

「……………別に、別に入ってもいい」

「よかったです」

「俺も入れてくれ」

三上が土下座して行った。

「それなら僕もいいかい？」

「いいですよ、これなら部活申請できます。生徒会長に言えるですよ」

「そうかよかったな」

「とりあえず正式な部になってから活動開始なので先にかえってもいいですよ」

「これから生徒会に行くのか？」

「そうです」

「なら僕も行くのか？」

「おお、それは助かるですよ」

「私帰る」

佐藤は帰っていった。まだ、まだ、時間が必要か。

「さあさあ、善は急げ、急がば回れ！！」

そんなわけで木山と供に生徒会室に。そういえば生徒会室に来るのは初めてだ。

コンコン

四階の一番端の教室に生徒会室はひっそりとあった。扉をノックする木山。

「入れ」

「失礼するですよー！！」

中に入る。そこには黒髪の気の強そうな女生徒会長がいた。他の役員は帰ったのかいない。

「木山かなんのようにだ？」

「新聞部を設立するですよ」

「ほう、ということは部員がそろったのか」

「ええ、おかげさまで」

「まさか、一日でそろえるとはな、まあいい承認してやる。ただし会議していろいろ決めないといけないからな最低でも一週間は待つてもらう」

「了解ですよ」

「さて、その後ろの狩野悠が部員というわけか」

な！？ 何で僕の名を。

「ほかにもいるですよ」

「おそらく、佐藤美鈴と三上喜助と栗原直哉だろう」

なんでそんなことがわかる。

「ふつ、私を誰だと思っている。私は生徒会長のなかみやふうり中宮風里だぞ。この高校の生徒くらい全員把握している」

なんて人だよこの先輩は。

「どの生徒が何をしているのか考えているのか。その生徒の情報もすべて持っている」

プライベートの欠片もねえな。

「安心しろ誰にも話すことはないし。悪用する気もない。生徒たちの為にしか使わない。私は人の役に立つために生まれてきたのだから」

そこまで言い切れる人初めて見たぞ。だが、こういう先輩だからこそ生徒会長なのだろうと思った。

「それじゃあ失礼しましたですよ」

木山と供に生徒会室をでる。

「相変わらずすごい人ですよ」
「そうだな」

「ここまでくれば異常だが。」

「でも、苦労もあるそうです」

「そうだな。ああいう人だからこそその苦労とかがありそうだな」

「まあ、でも、これで新聞部が出来るのでよかったです」

「ああ、そうだな」

「じゃあ、かえるですよ」

珍しく木山と二人で帰ることになった。

「なあ、ずっと気になってたんだが」

「はい？」

「昨日あったテレビってなんだ？」

ずっと気になってて授業に集中できなかつたんだよな。

「ああ、それはですね。世界にひとつだけの謎です」

「おい！！」

「まあまあ、昨日の新聞のテレビ欄をみるです。三時間スペシャルであつたのでわかるですよ」

「わかった見てみる」

「はいです。じゃあ、私はこっちですのでさいなら〜」
「ああ」

十字路を右に曲がる木山。僕はそのまままっすぐだ。

帰宅。

「ただいま〜」

「あ〜、おつかえり〜」

帰ってくるはずのない声が聞こえた。女の声だ。

「……………なんでお前がここにいる」

「あはは逃げてきた」

リビングには黒髪ポニーテールの女がいた。若々しい健康美に溢れているってそうじゃない。

「逃げてきたってお前」

「だってあの学校毎日毎日聖書読ませるんだよありえない」
「知らん」

僕の家でこんなにくつろいでいる女は幼馴染の黒江莉子くろえりし。中学までは一緒だったのだが、莉子の性格を直そうとした莉子の両親により全寮制の女子高へ。なんか宗教系の学校とか言っていた。そして現在その学校は休みでもなんでもないとということだ。つまりコイツは逃亡者ということだ。

「さて、文子さんに電話しよう」

「母さんにだけは電話するのやめて!」

土下座してくる莉子。

「お前にプライドはないのか」

「プライドなんかあったらこんなことしないよ」

「おい」

「お願い、匿って」

「そうは言つが……………」

ブルルルル

電話だ。

「絶対母さんだ」

そそくさと莉子が二階へと逃げていく。

「もしもし」

『ああ、悠君?』

「はい。そうですけど何かあったんですか?」

『うちの莉子がそっちに行つてない? あの子つたらまた高校から逃げたのよ』

「あはは、また莉子も無茶しますね」

莉子が無言で頭を下げまくっている。はあ、仕方ない。ここで幼馴染を見捨てたら後味悪いし。

『それで頼れるのはあなたしかいないと思つてね。だから莉子来てない?』

「いえ、来てませんけど」

『そう?』

「そうですね。あの莉子が僕のところにそう簡単に来ますかね?」

『それもそうね。ああ、でも来たら教えてね、怒ってないから』

「はい、教えます」

『まったくあの子は無理矢理あの学校に入れたのが間違いだったのかしら』

「さあ、それは本人しだいです」

『そうね、じゃあね悠君。今度遊びに来てね』

「はい、今度」

ガチャッ

「ありがとう悠!」

「いいから引っ付くな暑苦しい」

莉子を引き剥がしてソファアに座る。

「で?」

「で?」

「どうするんだよ?」

「どつって、ここにしばらくいるに決まってるじゃん」

「出てけ」

「え〜!」

何で幼馴染と同棲せなあなのや。

「関西弁になってるよ」

「うるさい」

「もう、いいじゃん。ここに居ても居るだけだし」

「じゃあ、掃除、洗濯、料理、全部お前がやるんだな」
「……………」

莉子が顔を背ける。

「顔を背けるな。こっちを見る」

「……………私が家事できないこと知ってるでしょ」

そうコイツは昔から家事的スキルが何もない皆無に等しいてか皆無。なので一人で留守番するときなどいつも僕のとこに来ていた。

「はあ、わかったよ。好きだけいろ」

「やた、ありがとう」

「ただし……………」

「ただし？」

「ただし、自分のことは自分でやれよ」

「え〜!!」

これで莉子も帰るだろう。

「わかった」

「え？」

「わかった、がんばる」

う、涙目で言われても……………あ。

「わかったよ。もう、わかった。僕の負けだ。やってやるよ」

「ありがとう」

「こら抱きつくな!」

はあ、どくなることやら。

シュレディンガーが出て行った日。家にもっと厄介な猫が舞い込んできた。

第六話 幼馴染

5月20日、木曜日。天気は晴れ。昨日、幼馴染が学校から逃げ出してうちに逃げ込んでいた。名前は黒江莉子。腰まである黒髪をよくポニーテールにしている。容姿端麗でモデル並のプロポーシヨンを持つ。好きな色は黒。運動神経もよい。だが、炊事、洗濯、掃除、一般的な家事スキル、三上曰く女の子のスキルが皆無だ。性格もおしとやかとは言えない。といつても男勝りなわけではなく大雑把、無神経、あっけんからんとした性格。「……あと寂しいと死ぬ」

「ておい、かつてにモノローグに入るなよ」

「いいじゃん。私は寂しいと死ぬうさぎなの」

「お前はうさぎはうさぎでも血染めの黒ウサギだろ」

「ビーラビット?」

「言っな」

「わかった省エネモード解くよ」

「やめる!」

『目障りだ!』

「どっからウサギのかぶりものを!? つゝかどっから鎌もってきた!」

ドタドタドタ。

言い忘れていた。それに見ての通り馬鹿。昔はそれほどもなかったのだが、高校生になりさらにパワーアップした気がする。

とまあ、詳細な幼馴染の紹介もここまでにしよう。

朝、5時いつものように起きて弁当を作る。今日は二人分、僕と

莉子の分だ。アイツはさつきも行ったとおり家事スキルがないのだから作ってやらないと飢え死にする。両親に見つかるわけにも行かないのでうかつに外にも出れない。のため寂しいと死ぬウサギと
いうのは寂しくなる。一人になる。莉子は一人だと生きれないから
だ。

「これで良いかな」

弁当箱も二つ。探したら出てきたからよかったが出てこなかったらもうどうしようもなかったな。

「あいつはまだ寝てるのか」

こちとら起きて弁当つくってるといっのに起こしてこよう。

二階の莉子が使っている部屋に行く。

コンコン

「入るぞ」

部屋に入る。母さんの寝巻きで寝ている莉子。というよりここは元は母さんの部屋だったようだ。家具もそのまんま残っている。

「……………スピ……………く……………」

可愛い寝方だなこれはまた。

「起きろ」

ゆする。

「んん〜……す〜」

起きる気配がない。

「起きろ！…！」

もっと強くゆする。

「ん〜」

ガバツ！

「うわ！…！」

抱きつかれそのままベッドに倒される。

「おい！…！」

最後まで言うことも出来なかった。莉子の唇と僕の唇が重なっていた。莉子のやわらかい唇と甘いにおいを感じる。なんとか離れようとがくが馬鹿力で動けない。

「〜〜！…！」

見ると莉子は起きていて僕を見ていた。コイツ確信犯か！！

「離せ！…！」

何とか逃れた。

「むう、せっかく幼馴染がおはよつのキスしてあげたのに」

「そんなのはいらない!!」

「もう、照れちゃって」

「照れてない」

別に久しぶりにやったらなんかすごい良いにおいがしたとかそんなのではない。久しぶりって小学生の頃だからな。あと別に僕は莉子とはなにもない。

「はあ、弁当作ってやったから昼に食べ」

「わ、いい愛妻弁当だ」

「違うだろうが」

「ん、ま、いいじゃん」

「よくないだろ」

もういいや、コイツに言っても意味がないことはわかってる。

「で、もう朝食食べるか？」

「うん、悠と一緒に食べる」

「そうか。なら、着替えて髪を整えて来い。せっかくの髪がもったいないぞ」

「うん」

はあ。

・
・
・

「じっはんじっはん」

「早く席に着け」

「はい」

「いただきます」

「いっただっきま〜す」

食べ始める。朝食はいつもどおり弁当に入らなかった余り。

「う〜んおいし〜」

「そうか、それはよかったな」

「うん、悠はいいお嫁さんになれるね」

「誰が嫁だよ」

「悠が私の」

「なわけないだろうが」

「いいじゃん、それとこんな可愛い幼馴染と一緒に一晩過ごしたのに何もしないっておかしくない」

「おかしくない。あと自分で可愛いとかいうな」

何も無いのに手を出してたまるかよ。確かに可愛いのは認めてやる。

「む〜、小さい頃は一緒に寝たじゃん」

「小学生の頃まではな」

「一緒にお風呂はいつたじゃん」

「幼稚園まではな」

「む〜」

お前は何がしたいんだよ。

「何って悠の恋人、そして奥さん」

「寝言は寝て言え」

お前がなりそうなのは奥さんとかじゃなくてヒモだよ。マジでな
りそうで怖いな。コイツの未来の夫がなばね。

「寝言じゃないもん」

「そうかい」

「む〜」

さてと、あまりからかうと痛い目にあうからな。

「いいもん」

「なにが？」

「いいもん、夜這いして既成事実作って結婚まで行くもん」

「やめる」

目が本気だぞ。コイツ。注意しないと。この年でそんなことにな
ってたまるか。

「僕はもう、学校行く」

「え〜、まだ時間あるじゃん」

「ここにいると危ない。着替えてくるから入ってくるなよ」

「うん」

めっちゃんいい笑顔で言った。あやしいな。

ズボンをはいている途中。

「やっほ〜」

「堂々としすぎだー!ー!」

慌ててズボンをはく。

「お前な!!!」

「なんだ、パンツ穿く派か」

「いや、当たり前だろ」

「え？、私は」

「見せるな!!!」

危ない危ない、この小説削除させる気かよ。

「もう、わかった二人っきりの時にね」

「どんなときでも見せるな」

はあ、何でこいつと居るとこんなに疲れるんだよ。

「もう、いい学校行く」

「いってらっしや〜い」

莉子に見送られて学校へ。

「行った行った」

ふふふ、ここからは私の時間。自由な時間。あんな寮じゃできないことをするぞ〜。

「ちて、とまらずは」

脱衣所へ。

「ふっふっふ」

洗い物を見る。……………発見。

「さっさと」

お楽しみお楽しみ。

「っとカメラさんはどっか行っついて。邪魔だから」

さっさと。

「ふん ふんふん」

服に手をかけ……………。

「って何撮ってんの！」

ガシャガシャー！

ブツンッ！！

「アイツ何もしてないといいいけど」

「アイツ？」

「ああ、佐藤か」

「アイツって誰？」

「誰でもない」

「そう、ならそんなこと言わないで」
「ああ、悪かった」

だが、家に幼馴染がいるなんて誰にも言えない。

「おや、おやおやおや」

またも木山と鉢合わせえた。

「何でここに居るんだよ」

「スクープのにおいがしたんですよ」

鋭い。

「おゝい、悠」

「おはよう悠」

「三上と栗原、狩野君の家に女が居るです」

「なにー！！！！」

木山、余計なことをてかなんで知ってるんだよ。

「誰だ！！！！ 誰なんだ悠！！！！」

「顔が近い、やめる三上」

「白状しやがれー！！」

「わかったするから離れる」

「よし」

仕方ないこの際今言ってしまったほうがあとでバレた時より被害は少ないだろう。

「莉子が…幼馴染が帰ってきたんだよ」

「なに！！！！ 黒江が帰ってきたのか!?!」

「ああ」

正確には逃げ帰ってきただが。

「黒江さんはすごいな」

栗原が理解したように言った。まあ、考えればおかしいことに気がつくか。気がつかないほうがおかしい。

「だが、なんでお前の家にいるんだ?」

三上が別の方向でおかしいことに気がついた。

「莉子は全寮制の学校に通っているんだがそこが嫌で逃げ出してきたんだ」

「……………」

三上の中で何かがはじけた。

「うらやましますぎだー！！！」

ああ、うるさい。こうなるから言いたくなかったんだ。

「ほら三上やめなよ。悠が困ってるよ。それに悠に恩を売っておいて方がいいんじゃない?」

「……………それもそうだな」

相変わらず栗原は三上の扱いがうまいな。だが、助かった。あと

で何かおごってやるう。

「あの噂の黒江さんですか」

木山が言った。一体どんな噂が流れてるんだらうか気になる。

「いろいろ聞きたいですね、本当かどうか」

「ほとんど本当と思うぞ」

「じゃあ熊を素手で倒したとか」

……………。

「ああ、小学生の時動物園で熊の檻に入って行って茉莉子が殴ったら当たり所が良かったらしくて倒した」

あの時は一緒に連れ込まれて死ぬかと思った。

「次は不良からからまれてる女子を助けたとか」

「むしゃくしゃして殴る相手を探しているときにちょうどよく不良が居たからだ」

あの時は下手をしたら僕が殴られてた気がするよ。

「告白してきた男子を全員ふったとか」

「本当だよ。ちなみにその三上もふられた」

そして振るたびに僕のことを彼氏呼ばわりして中学のときはいつも男子に喧嘩を売られていた。そのおかげで無駄な戦闘能力がついた。まったく本当に無駄だ。

「ほ〜、それはそれは噂は本当だったのですね〜」

言いながら木山が耳元でささやく。

「それでももうひとつ聞きたいんですが」

「なんだ？」

「黒江さんは狩野君のことが好きというのは本当です？」

「……………それを僕に聞くのか？」

そんなわけないだろ。莉子がからかつてるだけだ。

「愚問でしたね」

「そうだ」

「黒江さんも苦労しそうですね」

「？」

木山は何を言ってるんだ？

「まあ、これは今すぐにはどうにもならないのでほっておくとして本人に取材にいきたいんですが？」

「それは構わないが余計なものついてきそうだな」

「それもそうです。じゃあ、夜中に侵入するですよ」

「侵入するなよ」

もう木山は聞いてなかった。

「大丈夫か？」

大丈夫ではない気がする。

「ふは〜」

はあ〜、楽しめた〜。何をやったかって？ そんなの秘密に決まってるじゃん

「さてとこれからどうしようかな？」

悠の部屋に侵入……は駄目か。バレたら追い出されるかもしれない。間違っても悠を怒らせたくないし怒られたくない。……いや、怒られてのしられるのはいいかも。

「でもな〜。それで嫌われたら元も子もないしん〜」

割とやることがない。うかつに外に出て見つかって連れ戻されるのもやだしな〜。お父さんに見つかるのも嫌だというか最悪だ。

「ん〜ん、またやるっかな〜」

でもな〜。

「ん〜あそつだ、テレビでも見よ」

結局そこに落ち着く。だってやることないんだもん。ゲームだって私好みのないし。家に行けばあるけど………いや、やめたそんなリスクを犯して捕まって連れ戻されたらかなわない。

「はあ〜、寂しいよ〜」

結局私は寂しいと死ぬうさぎなのだ。

さてとそんなこんなでお昼。みんな佐藤のところが集まって食べている。クラス中の視線が集まっているのだが気にしてないこいつらがすごい。

「それにしても黒江か。一年ぶりだな。この前のときとか会わせてもらえなかったし」

三上が言う。

「それは三上が余計なことしたからでしょ」

栗原が言う。

「なにしたっけ？」

「裸踊り。で蹴られたじゃん股間」

「……………そうだった。うん、そうだったあの時は天国が見えたね」

バカだ。バカな会話だ。

「それにしてもなんで今帰ってくるかな」

それは莉子にしかわからないが。

「あ、そういえば佐藤」

「なに」

「お前朝からしゃべってないけど調子でも悪いのか？」

「別に」

「そうか？」

の割にはいつもより口数が少ない。

「……………ねえ、その幼馴染ってどんな人」

佐藤が聞いてきた。

「朝も言ったけどまあ、とにかくめちゃくちゃな奴だな。会って見たらわかると思うぞ。三上たちは今日の放課後に会いに行くらしいが佐藤も来るか？」

「別に行つてあげてもいいわ」

「そうか」

行くつてことでいいんだよな。まあ、あの莉子と佐藤の組み合わせは一度見てみたいからな。どこか似た雰囲気があるし。まあ、ぜんぜん似てないんだけどなぜかな。

「さあ、いただきます」

悠の作ってくれた昼ごはんを食べます。うん、冷えてもいいし。

「うん、本当に悠はいいお嫁さんになるな」

もう少し女の子の気持ちがあれば恋人くらい簡単に作れるのに。

まあ、作られちゃ困るんだけど。

「でも、なんか今日は好敵手ライバルに会えそうな気がするな」

女の勘かな。昔からこういうのははずしたためしがないんだよな
〜。

「ふふん、まあ、どんな相手 came たって悠は渡さないんだから」

う〜ん、それにしてもこの漬物おいし〜。

ああ、悠早く帰ってこないかな〜。

第六話 幼馴染（後書き）

特別更新

やばい……書きやすい！！ なんだこれ書きやすすぎる。幼馴染が書きやすい物凄い書きやすい。これがニュータイプか（違う）

対して佐藤……書きにくい！！ 物凄い書きにくい。
もう、幼馴染をメインヒロインにしたくなってきた。

とまあ冗談はさておき。

書き終わったので更新。次の更新は色々な都合で二週間後になりそうです。

第七話 真夜中の零時（前書き）

二週間後とか言っときながら更新できちゃたよ

第七話 真夜中の零時

時は過ぎて放課後。

「さあ、いざ黒江の下へ！！！」

スーパーハイテンションな三上を先頭に僕の家へ向かう、三上、栗原、僕、佐藤。木山は今夜の準備とか言っただけで先に帰っていった。

「さてと、何があっても何も言つなよ」

「おう！！」

ドアを開ける。

「ただいま」

「お帰りなさいませご主人様」

ボタン

「ふう、なんか異形が居た気がした」

「こらっ！！なに閉めてんじゃこりゃー！！！！」

メイド服を着た莉子が出てきた。なんでそんな格好してんだ。どこからそんなの持ってきた。

「秘密。いい女は秘密が多いのさ」

ああさいですか。

ブシャー！！

三上が鼻血を噴き出しながら倒れた。

「我が生涯にいつぺんの悔いなし」

莉子のメイド姿でそこまでするのかよ。

「キモ」

佐藤が言う。だが、肝心の三上は興奮しすぎて聞こえていない。

「お、やつほ、三上、私にふられた時の心の傷は治ったの？」

「ああ。もう、バッチリだ。だから、俺と結婚してくれ」

コイツ諦めという言葉を知らないのか。案の定。

「いや、バカ、死ね、気持ち悪い、この世のゴミ、屑、生まれてきたことを私に謝れ」

酷い。相変わらず酷い。だが、まあまだマシなほうだな。

「グハツ！！ 生まれてきてすみません」

本当に謝ったよこいつ。

「だが、罵られるのって気持ちいい！！」

変態だ、完全な変態だ。

「なんだそんな変態を見るような目は」

「三上、僕は変態を見てるんだよ」

栗原が言う。

「なんだと!! 俺は仮に変態だとしても変態という名のジェントルメンだ!!!!」

どの道変態には変わらない。

「つとそんなところで騒ぐのもなんだし入れ」

「おじゃましま〜す」

「おじゃまします」

三上を置いて家に入る。

「ちょ待ってくれよ!!!!」

慌てて三上も入ってくる。

「じゃあ、僕は着替えてくるからそれまで自由に話でもしててくれ」
「は〜い」

返事をしたのは莉子だけ。さすがにこいつらがいるときには覗きにこないだろう。

着替えてるとどこからか視線を感じた。

ドアを開けてみる。

「えへへ」

莉子がそこにいた。

「お前な」

「いいじゃん減るもんじゃないし」

「僕が嫌だ」

「隙あり!?!」

「うわ!?!」

莉子が僕のズボンに手をかけた。それを防ごうとして僕は倒れた。

ドゴンッ!?!

「悠?」

倒れた悠はピクリとも動かない。

「悠?」

揺すつても動かない。血の気が引く。おそらく私は今顔面蒼白だ。

「ゆ、悠!?!」

わ、私がふざけたから。ど、どどっすねば!?!

「じ、め、じめん、な、ちこ」

今更謝つても遅いかもしれない。

「いや、だよ」

大粒の涙がポロポロと流れる。

「もう、あんなこといやだよ」

零れる涙を誰かが拭った。

気絶してた。目を開けると莉子が泣いていた。なんで泣いてんだよ。お前の泣き顔なんて見たくない。そつと莉子の涙を拭った。

「何泣いてんだよ？」

「悠？ 悠！！」

「うわっ！？ 抱きつくな！！」

「悠、悠、悠！ 良かった良かったよ〜！！」

僕に抱きついたまま莉子は泣いた。事情を聞くと頭打って僕が死んだと思っただけらしい。

「ただ気絶しただけだバカだな」

「バカじゃないもん」

「それで気は晴れたか？」

「もう少しだけこうさせて」

「少しだけな。じゃないと三上達が気がつく」

「うん」

ふっ、やっぱりこいつあの事気にしてるんだな。

・
・
五分後。

「もういいか？ いい加減あいつらが来そうなんだが」

まあ、来てないところを見ると佐藤と話しているか鋭い栗原が止めてくれるからだな。

「うん、ごめん」

「そう思うなら今度から気をつけてくれ」

「うん」

莉子がゆっくりと僕の上から離れる。僕は立ち上がった。

「さて、戻るか」

「うん、さあ戻る〜！〜」

いつも通りの莉子だった。

リビングに戻る。

「遅くなった」

「遅いぞ！ だから勝手に菓子だして食べてた」

「少しは遠慮しろよ三上」

「俺の辞書に遠慮と言つ言葉はない。ついでに図々しいと言葉もない」

欠落書だな。

「まあまあ、二人とも久し振りだね黒江さん。また綺麗になったんじゃないの？」

「栗原も相変わらずね」

「照れるな」

「別に誉めてない。で、そっちの女の子は誰？」

「私？ 佐藤美鈴よ」

佐藤が名乗った。

「へへ。私は黒江莉子。よろしく」

「よろしく」

「ねえ、あんた悠の彼女？」

ぶっ！ 思わず飲んでいたお茶を吹き出しかけた。

「違うわ。そういうあんたはなんなの」

「私？ 私は悠の幼馴染でお嫁さん」

「違う！！」

まったく、こいつまったく懲りてないな。

「バカね」

「何！！ バカって言った方がバカだ！！」

「あんたも言ってるわよ」

「しまった！！」

なんだこの戦い。莉子が言い合いで負けてる。やっぱりこいつら似てるな。

「まあ、佐藤に莉子そこら辺にしとけ」

「あんたは黙つときなさい」

「悠は黙つてて!!」

二人から同時に言われた。

「は、はい」

「大変だね」

栗原が言う。

「ああ」

二人の言い合いはヒートアップしていく。

「それにしてもあんたあんな男のどこがいいの」

「優しい所とかよく気がきく所」

「はあ？ あんたバカ？ そんなのただのお節介でしょ」

「悠をバカにするな!!」

聞いているだけで悲しくなってくる。

「ほらほらやめなよ。悠が泣いてるよ」

栗原が二人を止めてくれた。

「ああ!! ごめん悠!!」

「これぐらいでなくななんて軟弱ね」

はあ、まったくこいつらを会わせたのは間違いだったか？

・
・
・

「じゃあ、帰るぜ」

「悠また」

「じゃあね」

三人は時間になったのでそれぞれ帰っていった。木山は最後まで来なかったまさか本当に真夜中に来るんじゃないだろうな。

「やっと二人つきりになれたね」

莉子が言った。

「それがどうした」

「邪魔者も居なくなったところでしつぽりと」

「さて、夕飯の用意をしよう」

莉子の戯言を無視して夕飯の支度に入る。

「ちよつと無視しないでよ!!」

「あまり騒ぐとお前の分作らないぞ」

「それだけは勘弁して」

土下座する莉子。

「お前にプライドはないのか」

「悠以外にはしないよ。悠だけ、悠には私の全部を見てほしいから」

「他の奴に頼め」

「もう！！　なんでここまで言っつてわかんないかなー！！」

「ああ、わかんないよ。それよりリビングでテレビでも見てる。話しながらだと気が散る」

「むっ」

「むくれるな。お前の好きなオムレツにしてやるから」

「本当！？　やったー！！」

はしゃいでリビングに行く莉子。

「はあ」

さて、なら予告どおりオムレツでも作ってやるかな。

・
・
・

「出来たぞー」

「わっ、待ってましたー！！」

リビングに持っていきテーブルに置く。

「いったただっきまっす」

「いただきます」

莉子がオムレツを食べる。

「んっおいしっ」

莉子がおいしそうに食べる。

「まったく」

コイツはごろごろと表情が良く変わるな。

・
・
・

「さてとじゃあ、風呂はいるか。言っておくが覗くなよ」

「はい」

「返事だけはいいいんだよな」

莉子がこないように鍵をため風呂に入る。

「ふう」

体を洗う。

「悠入るよ あれ？」

がちやがちやとドアをあけようとする音がする。

「入ってくるな」

「なにを、この前は我慢してたけどちょっと限界!」

「つてやめい!」

ガシャーン

鍵が壊れ莉子（裸）が乱入。もう、いろいろ見えちゃってます。言えないようなところとか。

「ちよっ!! お前入ってくるな!!!!!!」

「いいじゃん!! 別に見られても減るもんじゃないし」

「減るわ!! お前に見られると心の中の大切なものが減るわ!!」
「大丈夫だよ!! その分私が大切なものあげるから!!」
「いらん!! だから出てけ!!」
「いや!!」

その後、何とかして莉子を追い出すことに成功した僕はいろいろなものも失ったと思う。もう、文子さんに電話しようかな。

「はあ」

風呂から上がると裸のままの莉子がソファ―に座っていた。

「おいしい!! お前はなんて格好なんだ!!」
「あ、上がったんだ、じゃ入る」

そのまま風呂に行った。

「覗いてもいいからね」
「覗くか!!」

まったく、あいつは僕をからかって楽しんでるな。たく。

その後、宿題やらなんやらをやり僕は眠りについた。

「ん?」

不意に目が覚めた時間は真夜中の零時。なんだ、体の上になにか乗っているような。目をあけてその何かを見る。

「つておいしいい!!! なにやってんだ莉子!!!」

「あ、起きた?」

「起きるわ!!! 何をする気だ!!!」

「何をつてねえ?」

「やめろ!!!」

くそ、何か使えるものはないか? 周りを見渡す。僕の上にいる莉子、目覚まし時計、様子を観察する木山、クローゼット、机。

.....え? もう一度確認してみよう。僕の上にいる莉子、目覚まし時計、様子を観察する木山、クローゼット、机。

「つて木山!!!」

「あら、見つかったんです」

「あなた誰?」

とりあえず莉子の下から逃げ出し電気をつける。

「私は木山秋子ですよ。どうも黒江莉子さん。今日はあなたを取材に来たんですよ」

「どうもどうも、でも、こんな時間に?」

「そっちの方が面白かったんで」

こちとらいろいろな危機だったよ。木山を見つけなかったらどうなっていたことやら。

「はあ、とりあえず助かった」

「噂どおりの人だということがわかりました」
「えへへ、それほどでも」

確実にほめられることじゃないと思う。

「それでそれでお二人の関係は？」

「夫婦！！」

「違うわ！！ ただの幼馴染だ、ただの！！」

「ほうほう、新婚さんですか」

「お前の耳はどうなってるんだ！！！！」

「冗談です」

「冗談に聞こえない」

木山の冗談は冗談に聞こえない。

「まあ、それはいいとしてまったくもってもう少し自覚を持ってほしいですね」

「何がだ？」

「そういつとこころです」

「そうそう、悠にはもう少し自覚を持ってほしいわ」

「??？」

いきなり何の話だ？

「はあく駄目ですね」

「まったくよ」

「何の話なんだよ？」

「狩野君には期待してないです」

「悠には期待してない」

「だからなんだよ」

わけがわからん。

「てか、木山はこんな時間にきて明日大丈夫なのか？」

「一日二日の徹夜で堪えるほとやわな鍛え方はしてないですよ」

「だが、健康には悪いだろ。女の子なんだから美容もあるだろうし。そう遅くならないうちに帰りなよ」

「まったくわかりましたですよ、噂は確かめられたので、帰りますです」

「送っていいごうか？」

「お構いなくです」

そのまま木山は窓から出て行った。

「……………さてお前はもう二度とこの部屋に来るな」

「え〜！」

「余計なことをしすぎだ。からかうのもいい加減にしろ」

「別にからかってないのに」

からかつてるようにしか見えないんだよ。

「む〜」

「早く出てけ寝れない」

「添い寝を」

「駄目だ」

「む〜」

しびしび莉子は出て行った。

「はあ〜」

このまま莉子と居るとこれ以上のことが起こりそうだよ。文子さんに言うのは簡単だがまあ、それでアイツに嫌な思いさせるとなるとな。

「仕方ないか」

割り切ろう。それでも駄目なときは昼でも作り忘れておこう。そうすれば懲りるだろう。それでも駄目なら連絡しよう。

「さてと、寝るか」

明日も早い。僕は莉子が入ってこないように鍵をかけて眠りについた。

第七話 真夜中の零時（後書き）

正真正銘次の更新は二週間後になります。

第八話 父

世界には雨振る時期がある。この日本では梅雨、雨が良く降る時期だ。しとしととあまり雨足の強くない雨が長く降り続く時期である。それはまるでこの世界が涙を流しているようだ。そんな時期には悲劇が転がっている。世界の悲しみに引かれて悲しみがやってくる。世界はそんなもののために雨を流すのだろうか……。

6月4日、金曜日。天気は雨。梅雨に入り雨が降り続けている。この季節を嫌いな奴も多いと思うが僕は結構好きだ。確かに洗濯物が乾かなくてたいへんだがそれを抜きにしたら合法的(?)に家中で本を読めるので結構好きだ。こらそこインドアとか言うな。引きこもりとか言うな。いいだろう趣味は人それぞれだ。気にしない気にしない。

そして莉子が来て二週間以上が経つたのだった。莉子の両親にもばれることなく父さんにもばれることなくやって来た。まあ、莉子が一步も外に出てないのもあるのだがな。

「さて、起きるか」

今日もいつものように起きる。

キンコーン

「誰だこんな朝早くに?」

玄関を開けると。

「父さん!!」

「ただいま悠」

「帰るなら帰るって電話くればよかったのに」

「遅かったからな」

「まあ、いいや、入ってよ」

「ああ」

そこでふと莉子のことを思い出す。まあ、今なら起きることはないだろうから大丈夫だろう。

「あれ、悠？」

タイムングよく莉子登場。

「……………」

「あれ、莉子ちゃん帰ってたんだ」

「あ、悠のお父さん!!」

「やあ、久しぶりだね」

「ど、どうも、お久しぶりです」

莉子は笑顔だが顔が引きつっている。うちの父さんと莉子の両親は仲いいからな。

「終わったな」

これで莉子の居候も終わるだろう。

「それにしても莉子ちゃんも学校があるよね。なんでここにいるん

だい？」

「そ……それは」

莉子が目で僕に助けをくれと言ってくるが僕はあえて無視した。そこは自分で説明してもらわないと。

「えっと」

莉子がいつまでも口ごもっていると。

「まあ、いいよ、何か事情があるんだろうし」

と父さんが言った。

「あの、ありがとうございます」

「お礼なら悠にいいなよ」

「はい、ありがとう悠」

「いいよ別に」

「さてと悠、学校だろ？」

「ああ、まだ時間はあるよ。弁当も作ったし。朝食も出来てるから、ちよっと待っていてくれれば父さんのも作るけど」

「そうか、頼む」

「ああ」

急いでキッチンに行き父さんの分の朝食を作る。

この日は久しぶりに父さんも交えての朝食となった。

「お、またうまくなったな」

作った朝食を食べた父さんが言った。

「まあね、いつもやってればね」

「それはすまないと思っっている」

「いいよ、父さんも忙しいんだし」

「そう言ってくれると助かる」

「そうですね、悠は優しいですし」

「余計なことを言うなよ」

三人で食事が、まるで母さんがいるみたいだな。それが莉子なのが納得いかないが。そのことをいう気はない。莉子が調子に乗るか
らな。

「しかし、こうしてご飯を食べてるとまるで母さんと三人で食べる
みたいだね」

父さんが言ってしまった。

「そ、そうですね?」

「うん、莉子ちゃんがなんか母さんみたいだよ」

「そんな、えへ、えへへへ」

「調子に乗るなよ」

「乗ってないもん」

「それならその顔のにやけをどうにかしてから言っただな」

莉子が慌てて顔を触る。

「あははは」

それを見て笑う父さん。まったく一人増えただけでこれだけにぎ

やかになるのか。家族……か。

「さて、じゃあ、僕は行くよ」

「ああ、行ってらっしゃい」

「行ってらっしゃい」

父さんと莉子の見送りを受けて学校へ。今日も雨が降っている。

傘を差して道路に出ると電柱のところに佐藤が居た。

「なんにやってるんだ？」

「べ、別に待ってた訳じゃないんだからね!!」

「あ、いや」

「ちよつと落し物を探してただけよ」

「そ、そう」

なんだ？

「さつさと行くわよ」

「ああ」

一言も話さず歩き出す。雨音が響く。

「なあ、佐藤？」

「なに」

「家族ってさいいよな」

「いきなりなに言ってるの？」

「いやさ、今日父さんが帰ってきたんだ」

「あの出張ばかりの？」

「ああ、まあ、それでさいろいろ実感したんだよ。家族って不思議

だなんて」

「……………」

佐藤は黙って聞いたのか聞いていないのかわからない。そしていつもの場所で。

「おーい、悠ー!!」

「おはよう悠、佐藤さん」

三上と栗原が合流。今日は木山は居ないようだ。

「よう、三上、栗原。そうそう、今日の朝な父さんが帰ってきたんだ」

「お、帰ってきたのか。もう少しかかるって言ってなかったか？」

よくおぼえてたな三上。

「ああ、早く終わったみたいだな。そんなに聞く暇なかったから聞いてないけど」

「シユレディンガーがどっか行った後にはお父さんが帰ってきたんだ。つくづくタイミングがいいよね」

確かにシユレディンガーと父さんが一緒に居るところはほとんど見たことがない。

「偶然だろ」

「まあ、そうだろうね。今頃彼はどこにいるんだろうね」

「さあ、それはわからない」

さあ、いろいろあるだろう。

「ほら、そのバカトリオさっさと行くわよ」
「はいはい」

そんなわけで教室へ。

「木山秋子入るか？」

「ああ、それならそこに居ますよ」
「そうか」

中宮会長が入ってきた。

「ようやくですね」

木山が行く。

「ああ、遅くなって悪かったな。ほら」

中宮会長が書類を渡す。

「これで新聞部は正式な部活だ。きちんと活動してくれよ」

「はいですよ！ 当たり前ですよ！！ カルパッチョですよ！！！！」
「ふっ、まあ、がんばれ。それじゃあな」

中宮会長は教室を出て行った。

「よかつたな木山」

「はいですよ。まったく待ったかいがあったですよ。そうそう、今日お父上が帰ってきたようですが。久しぶりの再会はどうでした？」
「僕は何でお前がそんなことを知っているのかが不思議だ」

「私にわからないことはないんですよ」

なんだよ。どこかに盗聴器なんかしかけてないよな。

「そんなことはしないですよ」

「心を読むな」

「いえいえ、わかりやすいだけです」

僕ってそんなにわかりやすいかな。

「座れ、HRは始めるぞ」

担任が入ってきてHRが始まった。

そしてHRも終わり一時間目の前。

「何か嫌な予感がする」

雨が心なしが強くなってる気がするし。

「何もなければいいけど」

なんだろうがこの胸騒ぎは。

・
・
・

昼休みになっても胸騒ぎは消えることはなかった。

「アンタどうかしたの？」

「え？」

「アンタずっとおかしな顔してるわよ」

佐藤が言った。

「そうか？」

「そうよ。なにがあったのよさっさと話なさい」

「いや、何か胸騒ぎがするんだ」

「胸騒ぎ？」

「ああ」

「悠がこういうときは大抵あたるんだよね」

栗原が言う。

「こんな感じだったのは確か四年前だよ」

「ああ」

あのときのあの事件か。

「そのときは……まあ、その話はまた今度ってことで」

「だが、何かあるんだ？」

「あるとしたら黒江さんかな」

「莉子か」

莉子に何かあるって言うのか。だとしたらなんだ。なにがある。

……いや、考えうる可能性としたら見つかることだが。

「だが、それはないだろう」

「確かにあの、お父さんが言うとは思えないし」

「だが、人間ってのはわからないぜ」

「なに言ってるんだ三上」

「何をやるのかわからないのが人間だ」

何格好よさそうな台詞言ってたよ。

「なんだろつな」

この胸騒ぎは。何も起こらないでくれよ。

雨はさらに強くなり窓に打ちつけ雷がなる。

・
・
・
放課後。

「僕は悪いけど帰る」

木山が放課後は新聞部の活動だといっていたがなんか胸騒ぎを無視できない。

「わかったです。今日はお休みでいいです。そのかわりこんど埋め合わせはしてくださいよ」

「悪いこの埋め合わせは必ずやる」

廊下を駆け出す。

昇降口にでると校門のところに立ち尽くす人影があった。

「莉子!!」

その人影は莉子だった。傘も差さずいつから立っていたのかずぶ

濡れた。

傘も鞆も放り投げ莉子の元に走る。

「莉子！！」

「あ、悠」

いつもの元気がない。確実に何かあった。

「何があった」

「なにもないよ」

バカ野郎そんな顔で言っても、そんな泣きはらした顔で言ってもまったく説得力がねえよ。

「嘘だ、なにがあった」

「なにもないよ。ただ散歩してたら学校についたから待ってただけ」

「嘘だ」

「嘘じゃないよ」

「嘘だ！！！！」

声を上げる。莉子の体がピクツと震える。

「嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だ！！、嘘だ！！！！ 僕はお前とどれだけ一緒にいたかと思ってるんだ！ どれだけお前を見てきたかと思っているんだ！！ どれだけどれだけお前を助けたいかと思っていたかと思ってる！！！！」

莉子を引き寄せる。氷のように冷たい、どれだけここにいたと言うんだ。顔にはまったく生気が感じられない。莉子をそっと抱きと

める。

「僕はお前の味方だ。どんなときもどんな状況でもお前の味方だ。何があってもだ。だから話せ」

「で、でも、め、めいわ」

「いいから話せ。幼馴染の話が迷惑なわけないだろうが！」

有無を言わせぬ口調で言う。

「うん」

ポツリポツリと莉子は話し始めた。ついに莉子の両親に莉子が家に入ることがばれてしまったようだ。なんと莉子の父親が家へ乗り込んできたらしい。どれだけ探しても見つからないのなら家がくまっまっていると思っていられない。そして今日ついに見つかった。つた。

「それで、ね……うぐ」

泣きながら莉子は言った。

父親は今すぐもどれと言ったそうだ。そして莉子のことを罵った。それだけならよかったけど僕のこと罵ったらしい。それにキレた莉子が父親に殴りかかった。それに激怒した莉子の父親はお前など生まれてこなければよかったと言ったらしい。

「それで、それで」

「もういい、わかった。僕のために怒ってくれたんだな。ありがとう。もう、我慢しないでいい。我慢せず思いっきり泣け」

「うう、うわああああああああん」

僕の胸で莉子は泣きつかれて眠るまで泣き続けた。痛々しいほどだった。その間も雨は降り続けている。

・
・
・

僕は莉子を背負って帰っていた。眠っている莉子をそのままにはしておけなかったから。もちろん傘は差している。もう、濡れているので意味はないが莉子をこれ以上濡らしたくはなかった。

「さて、これからどうしようか」

もう既に莉子が戻って解決するとは思えない。父親が出てきたのだ。僕の父さんも反対したはず。なのにこんなことになった。つまりはもう、戻れない。

「僕がなんとかしないとな」

これ以上莉子が悲しんでいるのを見たくはない。莉子だけでなく誰かが悲しんでいる姿を僕は絶対に見たくない。

雨はさらに強くなり、雷が鳴り響いている。まるで世界が泣いているようだ。大声を上げて。大粒の雨を流なみたしていた。まるで莉子と同じだ。

「そうだな。やるしかない。どんな手を使っても」

それが莉子に出来る僕の精一杯のことだ。

「ああ、まったく手のかかることだ」

「ただ、それでもやる。僕にとってはまったく損にしかない。ただ、泣いてる女の子をほっとけるほど僕は悪党でもない。」

「ああ、やってやる。やってやるよ莉子」

決意を胸に僕は家の前に立った。

第九話 望み

家の前で立ち尽くす。中からは嫌な気配が漂ってくる。おそろく
莉子の父親だ。どうやらここにまだいるようだ。なら、好都合。だ
が、莉子をこのまま連れて行くのは駄目だ。なら、文子さんに電話
する。

「もしもし」

『あら、悠君電話してくれると思っていたわ』

「状況はわかってますね」

『ええ』

「なら、今から莉子を連れて行きます。ずぶ濡れなんで着替えを用
意してあげてください」

『ええわかったわ』

電話を切り莉子の実家へ向かう。ここからそんなに遠くはない。
家を二、三軒行ったところにある。

チャイムを鳴らす。

「待ってたわ」

「すみません」

「とりあえずあがって」

「はい」

文子さんに言われるまま家に入る。

「ほら、悠君もこれで頭拭いて」

タオルを渡された。

「すみません」

「それで莉子のために行くんでしょ」

「はい」

「巻き込んだじゃってごめんなさいね」

「いえ」

これから自分で巻き込まれに行くのだそんなことを言われるのは筋ではない。

「じゃあ、行きます。莉子が起きたらよろしく言っておいてもらえませんか」

「ええ、でも、起きたらまた、泣いちゃうかもね」

「どうぞでしょう」

さっき結構泣いたからわからない。

「じゃあ」

立ち上がり行こうとした瞬間、制服をつかまれた。莉子が制服を掴んでいた。

「莉子」

そっと莉子の手をはずす。

「……………行って来ます」

「行ってらっしゃい」

文子さんに見送られて莉子の家を出る。

「さて、どうしよう」

あんなこと言ったのだが何も策はない。

「やばいな。どうしよう」

勢いだけでここまで来たのだ。本当にどうしよう。

「ええい、ここで悩んでいても変わらない」

覚悟を決めて家の敷居をまたぐ。

「ただいま」

「ああ、お帰り悠」

父さんが出てきて小声で言う。

「莉子ちゃんは？」

「家に送ったよ」

「そうか、今莉子ちゃんのお父さんが来て悠を待ってる」

「わかってる」

「父さんもがんばったんだけどね駄目だったよ。すまん」

「うん、じゃあ、行って来る」

「ああ、がんばれ。本当にすまないな」

「いいよ」

僕はリビングへと入った。そこには莉子のお父さんがソファに座っていた。

「お久しぶりです」

「ああ」

互いに言葉を交わす。この人に会うのはこれで三回目だ。この人の仕事が忙しいのも理由のひとつだが、僕がこの人のことが苦手というのもある。それに会った三回ともいいことがあったときではない。どの時も最悪の場面だった。

「アレが世話になったそうだな」

威圧感のある声が言う。娘をアレ呼ばわりか、変わらないな。僕の中の何かが切れかけた。

「いえ」

「まったくアレには困ったものだ。昔から親の言うことを聞かない」

「それで生まれてこなければよかったと言っただんですか？」

「何が言いたい？」

威圧的に僕を睨んでくる。

「そんなことで莉子を泣かせたのかと聞いている」

睨み返す。

「駄だ。親の言うことが聞けない子供など子供失格だ」

「……………」

ブツンッ

何かが切れる音がした。

「なんだその目は」

その問いは僕には届いていなかった。ただ許せなかった。何も知らないコイツが莉子を泣かせたことが許せなかった。

「……なよ」

「何？」

「ふざけるなよ……！」

「なんだその言い草は……！」

「ふざけるな……！ お前にアイツの、莉子の何がわかる……！」

何も知らないくせに……！ 莉子のことを見ようともしないで。

「親だからって勝手な理屈をアイツに押し付けてんじゃねえよ……！」

夜な夜なアイツが一人で昔から泣いていたことを僕は知っている。

「言うことを聞かない子供は失格だあ？ それなら子供の話の聞かない親は親失格だ……！」

それでもアイツは笑ってるんだよ……！

「もっと莉子のことを見てやれよ……！ 子供は親の操り人形はないんだよ……！」

毎日、誰にも相談せずに一人で溜め込んでる。それなのに。

「アンタはアイツの父親だろう……！」

莉子のお父さんが何かを言おうとしたところで。

「あなたの負けよ」

「文子」

「文子さん」

文子さんが入ってきた。

「口をだすな文子」

「そう、でもね、悠君が言ったことは全部正しい」

「……………」

「私たちはあの子のこと何もみてなかった、何も聞いていなかった。本当に親失格ね。だからね、決めたあの子の好きにさせようって」

「……………」

文子さんの言葉をただだまって莉子のお父さんは聞いている。

「だから、聞いてみましょう」

物陰から莉子がリビングへ入ってきた。さっきまでのあの沈んだ表情ではなく何かを決意した顔だった。文子さんが何かしたな。

「お父さん」

「……………」

莉子のお父さんは何も言わない。

「ごめんなさい。私はお父さんの言うような理想的な女の子には…
…理想的な子供にはなれません。私は私にしかありません。だから

……「ごめんなさい」

深々と頭を下げる莉子。

「……………」

莉子のお父さんが立ち上がる。少しだけ莉子が震える。

「……………そうか」

そしてリビングの出入り口に向かった。そして言った。

「……………なら好きにしろ」

そう言ってリビングを出て家を出て行った。

「素直じゃないんだから。じゃあね、悠君。ありがとう」

文子さんも夫を追うように外へ出て行った。

「よくやったな悠。じゃあ、あちらさんと少し話をしてくるから莉子ちゃんをよろしく」

父さんも文子さんたちを追って外に出て行った。

「はふ〜」

へなへなと莉子が床に座り込む。

「大丈夫か？」

「怖かった。また、殴られるかと思った」

「それなら来るなよ」

「だって、悠にだけ任せられないよ。これは私の問題なんだし……
……それに悠が私のために怒ってくれたから……その、私もがんばらなくちゃって思って」

最後の方は顔を真っ赤にしながら言った莉子。ってコイツ、もしかしてアレを聞いてたのか？ うわ、恥ずかしい。たぶん僕の顔も真っ赤になっているだろう。

二人して顔を真っ赤にしていると莉子が言った。

「その………ありがとう悠」

そう言った莉子の顔は今まで見たことがないような一番いい笑顔だった。思わず見蕩れてしまうほどの……。

今回のオチというか後日談。

莉子はあるあともう一度きちんと両親と話し合いをしたらしい。その結果高校に戻ったようだ。きちんと納得してのことのようだ。それ以来電話というか連絡はないので無事にやっていたいるのだろう。おかげで家の中が静かになった。

父さんもまた仕事で家を出た。相変わらず忙しそうだ。シュレディンガーも帰ってこない。また、いつものような静かな日常に戻ったのだった。

「さて、行ってきます」

いつものように登校する。教室で自分の席に着くと。

「なあ、知ってるか？」

三上が言ってきた。

「何が？」

「今日転校生が来るってはなしだ」

「ふ〜ん」

「なんだよふ〜んって。興味なにかよ。木山の情報だから確かだぞ」

「興味ないな」

「女子だぞ！！ 女子なんだぞ！！！」

「はいはい、わかったわかった」

まったく、高校生になってまで転校生ごときで騒ぐわけないだろう。話し続ける三上を無視して外を見ていると担任が入ってきてH Rが始まった。

「今日は転校生がうちのクラスに来てます。だから自己紹介をしてもらいましょう」

僕はその時窓の外を見ていた。

「じゃあ、入れ」

ガラガラガラ

教室のドアがある音がして転校生が入ってきた。

「な!？」

その姿を見て驚く。黒板に名前が書かれソイツは言った。

「黒江莉子です。よろしくお願いします」

莉子が僕のクラスに転校してきたのだった。

これから騒がしい毎日になりそうだ。

夏の前に、梅雨になり世界が涙を流すのはきっと夏に精一杯笑うためなんだろうとそう思った。

第九話 望み（後書き）

こんなのでいいのか不安です。ほとんど勢いで書きました。

評価、感想よろしくお願いします。

第十話 試験勉強

6月16日水曜日、天気は晴れ。梅雨にはいい天気だった。なのに校内には明るい雰囲気はない。逆に暗い。それは今日が定期考査一週間前だからだ。うちの高校は二学期制のため中間考査だ。

「あゝ、ついに一週間前だ〜!!」

莉子が叫んでいる。

「まだ、一ヶ月前と思ってたのに。もう、一週間前、驚きだよ」

「それはお前がサボってたからだろう。てか、一ヶ月前はお前この学校の生徒じゃないだろう」

「うゝ、それを言われるとちょっときついかも」

「アンタが無計画なだけでしょ」

佐藤が言った。

「なによゝ、いいじゃないその日その日を楽しんでるって言って！

「!」

「それが無計画って言ってんでしょ」

「うゝ」

「諦める莉子じゃ佐藤に勝てない」

「うゝ」

転校してきてからいつもこれだ。止める身にもなってくれ。

「うらやましいやつめこの野郎!」

「なら、変わってくれ三上」

「それは遠慮しよう」

この意気地なしめ。

「そんなことよりどうするの勉強会？」

栗原が言う。

「俺は勉強しない!!」

「三上から言い出したことですよ」

「勉強するにしても僕は教えられないぞ」

正直自分のことで手一杯だ。

「特に英語。それこそ教えてほしいくらいだ」

英語は特に苦手だ。今の時代英語は必須なのはわかっているのだがどうも苦手だ。

「勉強会ですか？」

木山がやってきて言った。

「ああ、三上と栗原がやるんだと」

「そうなんですか。まあ、遊びさえしなければいいと思うです」

「なあ、木山も来ないか!!」

三上が木山に聞く。物凄い期待した顔だな。

「断るです」

「チツクシヨー！！！！」

三上が物凄い勢いで落ち込んだ。しかし木山、断る時の顔がすごい悪いな。内心かなり楽しんでるんだらうな。

「こうなれば！！」

三上が立ち直った。早い。そして佐藤の所に行った。

「頼む！！！！ 勉強会に来てくれ！！！！ ついでに勉強教えてくれ！！！！」

土下座、それはもう、重みも何もない土下座。ただの土下座。まったく誠意が感じられない土下座。もう、プライドないなこいつ。

「はあ？ アンタそんなにヤバイわけ？」

「苦手教科がちよつとな」

佐藤に言う。まあ、三上の苦手教科は全部なんだけどな。英語がやばいんだよ。

「ああ、だから頼む！！」

深々と頭を下げる三上。

「はあ、わかったわよ。赤点取られても困るし」

何を困るんだ？ 佐藤が困ること何てあるか？ いや、ないな。なんでた？

「ありがとう!!.....白!!」

頭を上げた三上が言った。当然その前には佐藤がいるわけだが。
あゝあバカ三上。

「頭あげんなバカー!!!」

「おぶあゝ!!!」

佐藤の蹴りが三上の鳩尾にめり込む。

「信じらんない!!!　そこで死ぬ!!!」

佐藤はそのまま教室を出て行った。三上は幸せそうな顔で気絶していた。

「こりゃ、佐藤は来ないかもな」

「そうだね、でも三上は幸せそうだよ」

「だな」

バカ面で笑いながら笑いながら気絶していた。

.....
そんなこんなで放課後。勉強会ということで僕の家にも栗原と三上
が来ている。

「あゝあ、結局男だけか」

三上が言う。

「お前の自業自得だろ。諦める」
「もう少しだったのにー!!!」

はあくまったく。

ピンポーン

その時チャイムが鳴った。

「誰だ？」

「佐藤か!!!」

「そんなわけないだろう。とりあえず見てくる」

下に下りて玄関のドアを開ける。

「遅い!!!」

「佐藤!!!」

そこには私服姿の佐藤が立っていた。

「どうしたんだ、てっきりこないと思ったが」

「一度約束したことは守るわよ。私をなんだとってんの？」
「いや」

まさか来るとは思わなかった。意外と律儀な奴だ。

「勉強やるんでしょ。さっさと行くわよ」

佐藤はそのまま僕の部屋に。

「よく来てくれた！！」

三上が佐藤を見た途端言う。

「はいはい、いいからさっさと勉強するんでしょ。さっさとやりましょ」

「そうだな」

勉強会をはじめた。

・
・
・

「そういえばさ、こういうのに黒江さんが来ないのは珍しいね。一番に来そうなのに」

栗原が言った。

「ああ、確かにそうなんだがな」

アイツは祭りとかそういうのが好きだからな。

「アイツ両親に止められたんだよ」

「そうなんだ」

「そう、一週間前はどこにも行かずに親監視の下徹底的に勉強させられるんだと」

「それは可哀想だね」

「まあ、自業自得だな。これで僕も勉強に集中できるし」

まあ、少し可哀想だがな。

一方その頃。

「うわ〜ん」

「こら、騒がずやりなさい」

「うっ」

あゝ、今頃悠たちは勉強会かゝ。うっ、何で私はこんなところで見張られながら勉強してんだろ。

「手が止まってるわよ」

「は〜い」

あゝ、向こうに行きたい。あゝ行きたい行きたい行きたい。

嘆いている黒江莉子であった。

「なあ、佐藤ここはどうなるんだ？」

「こんなのもわかんないの？」

「悪いか。英語は苦手なんだよ」

「まったく、こっよ」

「へ〜、サンキュー」

「わかったなら早く次の問題でも解きなさい」

「はいよ」

いまさらだが佐藤は頭がよかった。テストは必ず上位にいた。ちなみに僕は中の上か、上の下。三上は言わずもがな、下から数えた

ほうが早い。栗原は頭はいい。というか我らの学年のトップ。

「そうでもないけどね」

栗原、勝手に人の心を読むな。

「ごめんごめん」

だから読むなよ。

「佐藤、ここ教えてくれ」

三上が佐藤に聞く。

「ここはこうなってこうなるのよ」

「ああ、わかりやすい」

三上にも理解できるのか。

「佐藤は教えるのうまいな」

「別に普通よ。もっとうまい人も居ると思うし」

「それでも三上に理解させるのはすごいぞ」

本当に三上には苦勞させられるんだ。

「そんなことよりさっさとやるわよ！！」
『はい』

どことなく佐藤は照れていたと思った。

「じゃあ、今日はこれくらいにしよう」

栗原が言う。時間は七時を回っていた。

「そうだな」

「あゝ勉強した」

「で、三上明日はどうするんだ？」

明日もやるのだろうか。

「モチのロンでやるぜ！！」

ああ、そう。まあ、僕達はいいんだが。

「佐藤は明日来なくてもいいぞ。自分の勉強したいだろ」

「べ、別に構わないわよ。私が教えたたのに赤点なんてとられた困るからね」

「そうか」

佐藤が来てくれるのはうれしいな。

「じゃあ、僕は帰るよ」

「ああ、俺も」

「ああ、じゃあな」

玄関で三上と栗原を見送る。

「それじゃあ、私も帰る」

「ああ、送っていいんか？」

最近物騒だし。この前高校生二人が行方不明になったて事件があったりしたし。

「いいわよそんなの」

「いいから遠慮するな。今日の礼だ」

「なら、勝手にしなさい」

「ああ、勝手にするよ」

佐藤と供に外に出る。夕日が綺麗だ。歩き始める。

「なあ」

「何？」

「お前優しいよな」

「な、何よいきなり!!」

「いやな、お前見てるとき、意外に優しいと思って」

「そ、そんなわけないでしょ!!」

ドゴッ!!

「ぐはっ!!」

殴られた。意外に痛い。ってかかなりいたい。

「あ、アンタが余計なこと言うからよ!!」

「それでも、殴るかよ、ってて」

それにしてもこういうキャラってなぜか筋力強いよな。

「何か余計なことと思ってない」
「い、いえ!!」

怖っ!! マジで怖い。

だが、夕日のせいかわからないが佐藤の顔が赤かった気がした。

・
・
・
「つともうこのあたりでいいわよ」

「いいの? 家まで送ってもいいんだぞ」

「いいわよ。それよりさっさと帰って勉強して少しでもいい点数をとれるようにがんばりなさい」

「わかってるよ」

「いい、これで中途半端な点数を取ったらただじゃおかないんだから」

「肝にめいじるよ」

「じゃあ、また明日」

「ああ、また明日な」

佐藤を見送り家に戻る。そこにはしおれたウサギがいた。

「おい、何でここにいるんだよ莉子」

「逃げてきました」

堂々と莉子が言った。

「そうか」

スタスタスタスタ

靴を脱ぎ電話へと歩く。

ガチャ

受話器をとる。

ブチイ

「おい、電話線を抜くな」

「やだ、だってうちに電話するきでしょ！」

「当たり前だろ」

「お願い泊めてー!!」

またも土下座をする莉子。

「お前本当にプライドないよな」

「悠にはプライドなんていらねえもん」

そんなにこやかに宣言することじゃない。

「はあ」

「溜息ついたら幸せが逃げるよ」

「誰のせいだよ誰の」

「誰の？」

「お前だよお前!!」

「エへへ、照れるな」

頬を赤く染めて照れる莉子。

「褒めてねえよ!！」

照れるなよ。

「さえ、じゃあ、帰れ」

「嫌だ」

「お前も勉強しなくちゃいけないだろう」

「やるもん、悠とやるもん」

「僕を巻き込まないでくれ」

自分のことで手一杯だっていつてるだろう。

「教えるもん」

「はあ？ お前が僕に？」

「うん」

「何を教えるんだよ」

言っちゃ悪いが莉子に教えてもらえることはないと思う。

「英語」

確かに僕は英語は苦手だがそれでも莉子に負けてるとは思えないんだが。

「あ、その目は疑ってるな」

「お前を見て疑うなと言うのが無理だ」

「じゃあ、これ見る？」

莉子が何かを取り出した。

「なんだ？」

「前の高校で私が受けた全国模試の結果」

なるほどな。確かにこれならわかりやすい。

「え〜っと」

五教科で受けてある。相変わらず国語、数学、理科、社会、悲惨だな。そして英語。

「な!？」

「フフン、どうだ!」

英語だけ物凄い上位にいた。

「本当に？」

「それを偽装できるならね」

「……………」

まさか本当に莉子が英語だけ点数がいいとはね。驚きだ。知らなかった。中学の時はまったくそんなことはなかったのにないがあったのだろうか。

「熱でもあったのか？」

「そんなわけないじゃん!」

そうだな。コイツは生まれてから一回も病気になったことがないからな。

「それで、どうする?」

莉子が意地悪く笑っている。コイツ僕が断れないの知って言うるだろ。

「……………」

「ど、う、す、る」

仕方ない英語だけだな。英語だけにしよう。それが終わったらお帰り願おう。

「わかった英語だけ教えてくれ」

「やた。じゃあ、夕食つきで」

「はいはい」

ちやつかりしてる。

その後、また莉子が風呂に乱入してくるというトラブルがあった。そのときはいきなりで防げず侵入されてしまい、何とかするのに余計な体力を使ってしまった。そのあと莉子が異様に機嫌が良かったのが気色悪かった。

夕食を食べて勉強をした。

莉子は用事が終わったあと文子さんに電話して連れ帰ってもらった。

第十話 試験勉強（後書き）

佐藤のキャラが定まらないでしょう。

まあ、いつか

気にしないでどうぞ。

佐藤は設定はツンデレだとお知らせしておきます。

第十一話 雨振る日は出会い多し

6月23日、水曜日、天気は雨、もう嫌なほどの土砂降り。今更だが制服は夏服だ。男子は半袖のカッターシャツ。女子は白のブラウスとチエツクのスカートとなっている。まあ、それは置いておいてテストも終わり全てが返却された頃。佐藤のおかげでそれなりの点数だった。それはプライベートなので公開しないが。今回は勉強会に参加した全員点数が少したが上がっていた。あの三上ですら。栗原は変わらずトップだし。莉子は……………気にしたら負けだ。

「さーてと、これでテストも全部帰ってきたしあとは夏休みを待つだけか」

「そうね」

昼休み、いつものメンバーで昼食を食べながら言う。佐藤は今日もコンビニ弁当。

「「ようやく、ようやく終わった!!!」」

三上と莉子が言う。本当、こいつらは勉強が嫌いだからな。好きな奴がいるのかどうかわからないが。僕はあまり好きではないけど。それなりの成績は必要だと思い勉強している。

「あはは、二人とも今回は結構よかったんじゃないの?」

「おう、今回は結構よかったぜ、下から二十番以内になった」

「そう、それはよかったね」

栗原お前まつたくよかったと思ってないだろう。三上、それは結構よかったと言えないと思うぞ。十番以内と二十番いないってあ

まり変わらない気がする。三上が聞いたら凶器を持って追っかけてきそうだが。

「私は駄目だったよ」

「莉子、お前勉強してたんじゃないのか？」

文子さんが見張りながらしてたと聞いたぞ。一時逃げてきてたりしたが。まさか、コイツ逃げたのか？

「えっと」

目が泳いでいる莉子。

「こつちを見る」

「みてるよ」

見てない。あさつての方向を見ている。

「で、実際は？」

「……………逃げました。逃げて公園で寝てました」
「……………」

コイツそんなことしてたのかよ。

「でも、いつもよりはよかったよ。うん、やっぱり」

莉子、そういうのはいまさら遅いぞ。ふと窓の外を見る。

「あいつは…!？」

「ん？ どうかした悠？」

「ちょっと用事が出来た」

それだけ言って教室を飛び出した。

「何アイツ」

いきなり飛び出して行った。意味不明ね。

「ん〜、もしかしてアレかな？」

栗原が何か言う。こいつ何か知ってんのかしら。

「ん？ 佐藤さんには教えてあげたいけどまあ、教えてあげない」

どっちなのよ。コイツまったく読めないわ。なんなのよ。

「何やってんだよアイツは!!」

一階まで駆け下りて雨の降りしきる外に出る。そのまま校舎の裏へ。

そこには雨に濡れながら何かを探す金髪の女が居た。

「ん〜？ ありませんわね〜？」

またか。またコイツは何かなくして探してるのか。僕が来たこと

にも気がついてないし。

チャリ

「ん？」

何かを踏んだみたいだ。

「なんだ？」

それは写真などを入れる金属製の小さい容器、つまりロケットだ。探してるのはこれか。ますますこの前と同じだな。

「ん？ もつとあつちの方ですか？」

「これか？」

「ああ、それですわ、あり 狩野悠！……！」

「なにやってんだよ九条カリン」

九条カリン、所謂お金持ちのお嬢様。ヨーロッパあたりのお姫様らしく日本人ながら金髪碧眼の美少女（三上談）。性格は高飛車で普通なら僕の苦手なタイプだが悪い奴ではない。

「それはこつちのセリフですわ……！」

「またお前がこんなバカなことやってるから見に来たんだよ」

「余計なお世話ですわよ……！」

「そうかよ。ならさっさと戻るんだな。その格好だと色々問題だろ」

「それはあなたですわ……！」

「僕は雨の時は変えの制服をもつてくるようにしてるんだ」

もう、風邪は引きたくないからな。

「手際の良いことで」
「お褒めにあずかり光栄だな」
「ムカつきますわ」
「どつとでも言ってる。それより中はいるぞ。探し物は見つかったんだろ」
「ええ、おかげさまでね」
「じゃあ、行くぞ」
「私に命令しないでくださる!!」

無視して校舎内に入る。

「とりあえずお礼言っておきます。アリガトウゴザイマシタ」
「まったく誠意が感じられないな」
「余計なお世話だったので」
「相変わらず可愛くねえな」
「うるさいですわ!! 私からお礼を言ってあげたのですから逆に感謝してほしいくらいですわ!!」
「何でだよ!!」
「一般庶民と私では格が違わたくしうんですわ!!」
「ああ、そうかよ」
「そうですわよ!!」

まったく可愛くないな。本当、まったく。

「なら、さっさとあっち行けよ」
「言われなくてもいきますわよ!!」

九条はそのまま階段を上っていった。

「はあ〜」

何でいつもこうなるかな〜。

「あ〜しくった。完全に怒らせたな」

怒らせるつもりはなかったのだが。

「はあ〜、言いたいこと言えないでなんでこう関係ないこと言うかな」

そう、言ってしまうと恥ずかしいのだが僕は九条が好きだ。きっかけというか始まりというかはささやかなことでそれは一年前にさかのぼる。

あの時も今日と同じように雨が降っていた。そしてさっきと同じことになっていたのだ。そこに通りかかった僕は手伝おうかと言ったのだが散々罵倒された上に拒否されたのだ。それでムカついたから勝手に手伝って見つけたはいいいのだが二人ともずぶ濡れそのまま九条を返すわけにもいかないからといって拒否する九条を家に連れて行って風呂に入れた。

今思えばすごいことしたなと思う。若かったんだろ〜うな。一年前だけどそのころからまったく変わらないけど。

そのときに色々話したというか一方的に愚痴を聞いていただけがまあ、九条にも色々事情があるようだったのだ。それで晴れて帰るとき少しだけ笑ったんだ。それが綺麗だった。それに一目惚れしてしまった。あ〜改めて言うとは恥ずかしい。まあ、それ以来あつてはなにかと言い争いになったりするんだよな。

「はあ、うまくいかないな」

とりあえず着替えるために保健室へ。

「なにアレ」

とりあえず遅いから様子を見にきたらあんな状況。意味わかんない。

「ほうほうほう。まったく、だね」

「栗原アンタなんでここにいんのよ」

「いや。僕も悠の様子を見に来たんだよ」

「アイツお人好し過ぎない」

「そうだね。でも、これは違うかも」

「なにが？」

「さあ」

本当にコイツはなにを考えているのかわかんない。

「もう、いいわ」

アイツが戻ってくる前に教室に戻った。

「ぶっ」

教室に戻った。

「なんなんだ？」

戻ってから佐藤に睨まれてる気がする。なんなんだ？ 僕は何もやってないし。何かあるか？ 駄目だからん。ここは聞いてみるか？ いや、駄目だな話してくれるかわかんないし。

「はあ」

世の中うまくいかないな。

第十二話 真っ白な雪

7月3日土曜日、晴れ。今日、僕は病院に来ている。といっても僕が何か怪我や病気になっただけでもない。今日はお見舞いに来たのだ。目的の病室につく。

「お〜い、お見舞いに来たぞ〜生きてるか〜？」

「あ、悠君、お見舞いに来てくれたの？」

病室の中にいたのは白髪の少女。腰まである髪は真っ白で瞳も色素が薄い。肌も雪のように真っ白で透き通っているようだ。まるで真っ白な病室に溶けて消えてしまいそうに感じる。彼女の名前は白崎小雪^{らみぎこゆき}。生まれた頃から体が弱くずっと病院で過ごしている。

「ああ、ほら毎度毎度来てるけどなに買ってきたらいいかわからないから適当に買ってきた」

「わ〜ありがとう」

そう言っ僕が差し出した雑誌を受け取る。なるべく同じものを買ってきてるつもりだがどうかわからない。

僕と小雪の関係は簡単、はとこだ。両親は仕事で忙しいらしくそれに同年代が僕だけだったこともあり父さんに話し相手になるようにと連れられて会ったのが三年前。そのときから変わらずにこの個室に小雪はいる。

「それで合ってるか？」

「うん、ありがとう」

「どういたしまして。それでどうだ調子は？」

「うん、この頃はお医者さんも安定してるって」
「そうか」

……………それでも小雪の病気は治らない。僕には小雪の話し相手になつてやるしか出来ない。

「ねえ、学校楽しい？」

「そうだな。まあ、普通かな？」

「普通？」

「あゝ、わかんないよな」

「大丈夫、わかるよ」

「そうか？」

「うん」

学校なんて小雪は行ったことないだろう。それで普通といつても何も言わずわかったと言った。小雪は優しい子だ。

「新しい友達できた？」

「ああ、結構出来たぞ」

「どんな人？」

「佐藤美鈴って言つてな無愛想な女だよ」

佐藤に聞かれたら殺されそうだがな。でも、二年になつてもあまり何も変わっていないな。よくよく考えれば。いろいろ忙しかったけど。

「へゝ佐藤さんか。会つてみたいな」

「いつか連れてくるよ」

「本当！」

「ああ」

小雪には僕以外の友達を作っただけで欲しいからな。この三年間は医者
の許可が下りなかったけど安定してるなら大丈夫だろう。

「他にはなにかあった？」

「ん〜そうだな、ああ、新聞部が出来たな」

「新聞部ってあの木山さんが一人でやってたっていう？」

ああ、木山のことは話してたな。

「そうだな」

「悠君が何かやったの？」

「なんでそう思うんだ？」

「悠君だから」

小雪の中の僕は一体どんな風になってるんだろうな。まあ、あ
りなただけだ。

「まあ、当たり前だ」

「やっぱ〜」

「僕ってそんなにわかりやすいか？」

「違うよ〜、もう何年あつてると思ってるの？」

「三年」

「三年だよ。悠君のことならなんでもわかるよ〜」

何でもね。僕も言っていないこととかいっぱいあるぞ。九条のこ
ととか。いろいろ深いところのこととか。

「ま、そうだな」

わしわしと小雪の頭をなでる。

「む、子供扱いして」

「言われたくないなら薬ちやんと飲むんだな」

「あう、だって苦いんだもん」

「そう言ってる間はまだまだ子供だな」

「うう、でも、胸は あう！」

ポス！

「そんなことは言っな」

軽く手刀を小雪の頭に当てる。

「うう、本当なのに」

何で病院でそんなこと気かなくちゃいけないんだよ。嫌だよ僕は聞きたくないよ。

「そんなことよりおばさんたち来てるのか？」

「お母さんたち忙しいみたいだから」

「そうか」

「でも、悠君が来てくれるから寂しくないよ」

小雪の両親は忙しいらしく中々来れていない。そのための僕なのだが本当は両親にももっと来てほしいと思っているだろう。寂しくないといってもこんな病院の個室だ寂しいに違いない。

「そっか」

そう言っでまた頭を撫でてやる。喉まででかかった言葉を飲み込んでただこう言った。

「ねえ、もっとお話聞きたいな」

「そうだなじゃ」

僕は話した。楽しい話を。せめて僕が来ている間だけでも小雪が寂しさが忘れられるように。

第十二話 真っ白な雪（後書き）

病弱キャラ登場！。

あんまり弱々しくないけど

さてここで読者の皆様に一つ質問です。

今、数人ヒロインがいますが、メインはわかっているとおり佐藤さんですが他のヒロインのルートも書いた方がいいでしょうか？

感想欄にどうすればよいか書いてください。

よろしく願います。

第十三話 呼び出しは会長命令

7月19日、土曜日。本来なら休みの日。いつもなら家でのんびりしているはずなのになぜか僕は高校にいた。校門にはオーブンスクール of 文字。そう今日、僕はオーブンスクールの手伝いに来ているのだった。なぜ、こうなったかというそれは一日前金曜日の18日の放課後までさかのぼる。わかりやすいように回想してみよう。

金曜日の放課後。新聞部の活動で文化部の部室のあつまる部室棟、その新聞部の割り当てられた部室に僕たちは集まっていた。ちなみに三上が涼宮 ルヒのなんちゃらという小説に出てくるらしい文芸部三上はS何とか団とか言っていたのとまったく同じように改造してしまい（木山、栗原談）この部室狭いながらいろんな物がある。

今はみんなそれぞれの席に座っている。席は部室中央に置かれた長机に入り口側から見て右側にそれぞれ僕と莉子。その向かい側に佐藤と三上。木山は部室の奥、パソコンの置かれた机、栗原は窓際におかれたイスに座っている。

「さうて、今日も楽しい部活をはじめましょう」

木山が宣言する。

「よし、悠お茶煎れてくれ」

「またかよ。自分で煎れるよ」

「嫌だね。本当ならロリで巨乳のメイドに煎れてもらいたいのを我慢してお前に頼んでんだ!!」

この野郎。いつか殺すぞ。てか、小説と現実をごっちゃにするなよ。この部室を作るときに三上の半ば強制的に借りさせられた小説とまったく同じことを要求するな。

「はいはい。さっさと活動するですよ」

木山そうは言ってもまともに活動してるの僕とお前と佐藤だけだぞ。他の奴らは遊んでるか他のことしてるだけだぞ。特に三上とか茉莉子とか。茉莉子にいたっては寝てるし。その時。

バーン!!

扉が物凄い勢いで開け放たれた。そして入ってきた人物は

『中宮会長!!!』

寝ている茉莉子以外が叫んだ。そう、我らが生徒会長中宮風里が入ってきたのだった。

「何をしに来たんです？」

「今から言う。お前たち明日は暇か？」

「まあ、別に暇ですね」

茉莉子以外はそう答えた。

「ふむ、なら丁度いいな。会長命令だ、明日のオープンスクール手伝ってもらっぞ」

こうして新聞部は用事のあつた莉子以外オープンスクールを手伝うことになったのだった。

回想終了。そんなわけで今僕達新聞部は校門前に集合したのだった。

「よし、全員揃ったな」

中宮会長が言った。まあ、用事の莉子以外ですけどね。

「それにしても私たちが呼ばれてのはなぜです？」

もつともな疑問を木山が述べる。確かに、昨日は何も説明されなかった。ただ、有無を言わせぬ口調と気迫で恋といわれただけだった。

「ああ、昨日は忙しくてな。まあ、今も忙しいのだが。まずは説明しないといけないな。もつともな疑問だがその答えは単純、人手が足りないからだ」

「は？」

「へ？」

「!？」

驚きの声上がる。確かにそれは予想していたが生徒会のメンバーがいるということから抜けていたのだ。

「え？ 生徒会のメンバーだけでは足りないほどのことをやるんですか？」

「いや、まあ、オープンスクールは毎年大掛かりだがな」

中宮会長の答えは否定。つまり足りないようなほどのことはしないということ。じゃあ、何で足りないんだ？

「じゃあ一体？」

「簡単なことが考えればすぐわかる。生徒会のメンバーでは足りない。そう、生徒会には今私しかないからだ」

「な！」

「は！？」

「え！？」

栗原と木山が以外。つまり、僕と三上と佐藤は驚きの声を上げた。どうやら栗原と木山は知っていたようだ。少しは教えておいてくれないのに。だが、二人の性格を考えれば、僕達の驚く顔を見るために言わなかったのかもしれない。というか絶対にそうだ。なんとって今二人は笑っているから。

第一気づきようがない。生徒会がきちんとまわっていたからだ。中宮会長が一人でやっていると感じづけるわけがない。

「でも、四月の時にはいませんでしたっけ」

うちの学校は四月に生徒会長、その他が任命される。それで四月の時には会長以外のメンバーも確実にいたのである。この三ヶ月の間に何があったのだろうか。

「うーん、普通を要求していたのだがな、皆一週間でやめていってしまった」

「つまり……」

「うむ、それから一人で仕事をしていたな」

化物かこの人は。おそらくこの人が要求した普通はこの人にとっての普通なんだろうな。きつと普通の一般人にとっては物凄い要求だったのだろう。

「まあ、そんなわけだ今日は期待しているぞ」

と言って方を叩いてくる中宮会長。笑顔で方を叩く会長は美人でいつもならドキツとするのだが今はそれが悪魔の笑みに見えてしまった。あまり期待しないでください。

「さて、では役割を言っぞ」

中宮会長が告げた役割はまさに天の采配といえるほどの的を射たものだった。中宮会長のの人を見る目は本当に確かだったようだ。

第十四話 学校説明（前書き）

物凄いな今更な気がする。

第十四話 学校説明

「今から説明を始めます」

中宮会長に言われた僕の役割はやって来た中学生の前に出での学校説明だ。正直に言つて天の采配とか言つただけ僕にこの役割が向いているとは思えないのだが。

「じゃあ、説明を始めます」

まあ、このまま考えても何かが変わるとは思えないので説明を始めめる。

苳宮高校（じゆうみやこう）、それが僕たちの通っている高校の名前。この彩皇町の中央部から少し外れた場所に作られた学業区画にある広大な敷地面積を誇る高校。生徒数は3000人を越す所謂超マンモス校で施設も充実している。

校訓は自由で何事も生徒の自主性を尊重した校風。校則はゆるいが締めるところは締められているのであまり期待しないように。

一クラス25人という少人数によるクラス編成をしているため、授業に集中でき個別指導の時間を多く取ることができる。一人一人が目標とする大学への合格に向けて授業時間の確保や補習、進路ガイダンスを行うなどの進学支援体制も整えている。自信とやる気を促して大学入試を成功に導く教育体制をとっている。と少し受け売りみたいになつたな。

さつきも言つたとおり施設は充実している。校舎（棟）は六つあ

り、一つは中央に職員室と特別教室などを含む職員特別教室校舎。それを囲むように一年、二年、三年の三つの四階建ての学年校舎がある。学年棟というのが生徒の呼び方。学年校舎には理科室や調理室などもある。屋上は赤、青、緑とそれぞれの学年色で塗られている。ちなみに二年生は青。

他に文化部、運動部の部室が集まった部室校舎。部活棟とも呼ばれる。四階建てで一、二階は運動部の部室で三、四階は文化部の部室が集まっている。一階の部室には外から直接入ることも出来る。校舎と言うよりは集合住宅と言った感じだ。

最後に生徒会校舎。または生徒会棟生徒会や各種委員会専用の教室などが集まった校舎。四階建てで生徒会室は四階丸々一フロア使っていてとても広い。委員会は風紀委員、保健委員、体育委員、図書委員、放送委員会、環境美化委員会、文化祭実行委員会、体育祭実行委員会、選挙管理委員会の九つ。

体育館と講堂は三つある。また水泳部用にプールが二つ、スノースポーツ部用の施設が二箇所ある。図書館はそらの市立図書館よりも大きく膨大な蔵書を誇る。ちなみにこれは噂なのだがある生徒が図書館に入って行方不明になり三日後に見つけ出されたという。つまり迷うと危ない。そのため生徒手帳には図書館の地図がついている。学生大食堂では三千人が入っても大丈夫なほど大きい。メニューも充実しておりない物はない。グラウンドも四つある。

寮もあり他県の中学生も受験することが出来る。

部活動も充実している。一覧をスクリーンに映し出す。

運動系

野球部
テニス部
バレーボール部
バスケットボール部
サッカー部
ラグビー部
アメリカンフットボール部
バドミントン部
タッチフットボール部
卓球部
ソフトボール部
ラクロス部
アイスホッケー部
ゴルフ部
ビリヤード同好会
ボウリング同好会
ゲートボール同好会
相撲部
柔道部
剣道部
居合部
空手部
弓道部
合気道部
なぎなた部
棒術同好会
少林寺拳法同好会
日本拳法同好会
太極拳同好会

八極拳同好会
少林拳同好会
フェンシング部
アーチェリー部
レスリング部
ボクシング部
テコンドー同好会
ムエタイ同好会
カポエイラ同好会
水泳部
スキー同好会
スノーボード同好会
ソリ部
登山同好会
カヌー同好会
ヨット部
サーフィン同好会
ダイビング部
ローラースケート部
スケートボード部
自転車部
陸上部
スケート部
体操部
応援団・チアリーダー
航空部
ダンス部
ダンス部

文化系

吹奏楽部
軽音楽部
合唱部
美術部
演劇部
落語同好会
写真部
映画研究会
放送部
書道茶道華道部
装道部
漫画同好会
テーブルゲーム部
ビデオゲーム・テレビゲーム・コンピュータゲーム部
パソコン部
クイズ同好会
奇術部
速記
芸能同好会
文芸部
民俗学部
科学部
商業部
新聞部
ボランティア部
ロボット工作部
アマチュア無線同好会
航空研究会
料理部

などかなりある。他の高校と違い同好会と部はあまり違いがない。名前を決めるときにあいそうだから同好会とつけた部活もある。そのため部活動の勧誘は激しいので気をつけるように。

進路実績や部活の実績は配ったパンフレットに書いてあるのでここでは説明しない。

体育祭は毎年9月末に開催される。種目はアンケートなどで決められるので毎年教義が変わったりする。地域参加型の種目もあるの
で地域の人も気軽に参加することも可能。応援団やチアリーディングなどにも力を入れている。

文化祭は10月末。期間は五日間と本格的で楽しむこと間違いなし。文化祭中は屋台などが建ち並ぶので学校中が華やかな雰囲気
に包まれる。有志によるステージ発表もある。地域の方も飛び入り
でステージに参加可能なので毎年面白い人たちがやってきたりする。

他にも様々な行事があるのでそれは来てからのお楽しみです。

「これで学校紹介を終わります。ここで解散としますのでは好きに見てまわってください。途中に案内の人がいると思うのでわからないことはその人に聞いてください」

これで僕の役割は終わり。疲れたし緊張した。

「うん、やっぱり君にこの役割を与えてよかったようだ」

中宮会長がやってきて言った。

「そうですね？ 説明しきれなかったところもあったと思うんですけど」

「そうでもない。よく説明できていたよ」

「ありがとうございます」

「いや、こちらが礼を言うことだ。ありがとう」

中宮会長がそう言って微笑む。綺麗だと思った。

「さて、私は次の仕事があるからな」

「あ。ああ、はい、がんばってください」

「ああ。じゃあ、君はどこか困っているところがあったら手伝ってきてくれ」

「はい、わかりました」

中宮会長は講堂を出て行くこととして立ち止まった。

「おっと、ご褒美を忘れていた」

「ご褒美？」

「ああ、これだ」

チュッ

中宮会長の唇が僕の頬に触れた。

「な!？」

「ふふっ、じゃあな」

中宮会長はそのまま去っていった。

僕はというと顔を真っ赤にして五分くらいフリーズしていた。

第十四話 学校説明（後書き）

はい、ということでも物凄い今更ながら高校の設定が出てきました。

それにしても悠君たちはこんなに大きな高校に通ってたんですね。
驚きだ（おい）。

オープンスクールだからって一話かけて説明。

しかし、作者はまったく建築物に詳しくないのでこれでいいのかわかりません。

まあ、おかしいところは気にしない方向でお願いします。

第十五話 九条妹

中宮会長の予想外の“ご褒美”によるフリーズが解けた僕はとりあえず食堂へ行くことにした。時間も丁度いいからだ。気づけば結構長く説明していたことがわかる。丁度中学生も食堂だろうがそれくらいで満員になるほど食堂は狭くない。逆に余る。

「さてと、みんなも食堂にいるかな？」

今の時間ならその確立は高いだろう。中学生の驚いている顔が目につく。それほどまでにうちの高校の食堂はでかいし広い。

「あら？」

「げ」

「なんですの会って早々。失礼じゃなくて？」

ここにはいないはずの九条が居た。何でだ。予想外過ぎてあんなこと言っちゃったよ。どうするてもうどうしようもねえよ。

「知らん」

「……まったく失礼な男ですわね。それであなたは何をやってますの？」

「お前こそなんだよ。今学校に来る用事とかないだろ」

「妹の付き添いですわ」

「……………」

コイツに妹とかいたのか。意外だ。九条のキャラなら妹の付き添いと来ないと思うんだけど。逆に一人で行きなさいって突き放しそうなタイプだし。

「何ですのその目は？」

「いや、意外だと思つてな」

「はあく、アナタ私をわたくしをなんだと思つてるんですの？」

「九条」

「……………」

ジト目で睨まれた。その顔もいいな……………ゲフンゲフン。いやいや、僕は当たり前前のことを言っただけだつん。そうだつん。

「冗談だよ」

「……………まあ、いいですわ。私わたくしだつて妹が来てくれといわれたら行きますわよ」

「優しいんだな」

「あら、こんなの当たり前のことじゃなくて」
「そうだな」

僕にはわからないけど妹や弟を持つってそういうことなのだろうか。ちなみに作者には双子の弟がいるらしいのだがまったくそんな気にはならないそう。現実とフィクションの壁は厚いということだ。

「アナタ何バカな顔してますの？」

「は！？ いや、ちょっと考え事してた。それで、その妹はどこ行つたんだ？」

「トイレですわよ」

「ああ」

「あ、来ましたわ」

向こうの方から九条（姉）をひとまわりかふたまわり小さくした感じだが九条（姉）のように性格はきつそうではない女の子が歩い

てきた。どこかおっとりしているというか人見知りというか気の弱
そうな印象を受ける。九条（姉）とは正反対の印象の九条（妹）だ。
違いといえば九条（姉）が髪を二つ結びというかツインテールとい
うかにしているのに対し九条（妹）は結んでいないというくらいだ。

「お姉ちゃ〜ん〜!」

「そんなに走ると転びますわよ〜!」

「大丈夫 きゃっ!」

転げた。かなり痛そうだ。

「まったく何やってますの」

九条（姉）が九条（妹）のもとに駆け寄って行く。とりあえず僕
も行く。

「ふええ〜痛いです〜」

「ほらほら、しっかりしなさい。大丈夫ですわよ」

物凄く意外な光景だ。どこか人を見下した感じの九条（姉）が妹
には優しい。

「膝をすりむいてますわねえ〜ととりあえず保健室に」

「大丈夫だよ〜」

「駄目ですわよ」

妹には取り合わず九条（姉）は妹を連れて行くこととする。が九条
（妹）は抵抗する。

「きちんと処置しといた方がいいぞ」

そのまま膠着状態になりそうだったから言った。小さな怪我でもきちんと処置するにこしたことはない。

「!?!」

今になって僕が存在に気がついたらしい九条（妹）は驚きの速さで九条（姉）の後ろに隠れてしまった。

「……………」

「……………」

思わぬところで膠着状態になった。僕の心境としてはいきなり隠れられて結構悲しいのだが。とりあえず説明を九条（姉）に求める。

「この子は昔から人見知りなんですの。同世代の女の子なら良いんですけど男子、特に年上の男を見るとすぐこれですわ」

「そうか」

ひとまず納得する。いきなり隠れたのは悲しかったがそういうことなら納得できるし対処のしようがある。

「ほら、ひとみ。この男は嫌な奴ですけどヘタレで無害ですから安心して挨拶なさい」

「おい」

かなり馬鹿にされたぞ。初めてだよ人に紹介されるときに馬鹿にされたの。だが、そんな紹介で安心したのかおずおずと顔を出して九条（妹）は名乗った。

「九条ひとみ、です」

「よろしくひとみちゃん。僕は狩野悠。よろしく」

「あなたがお姉ちゃんがよく話してた人ですか」

おい、九条、ひとみちゃんに何を話したんだよ。当の九条は知らん顔だ。

「まあ、そんなことより保健室に行きますわよ」

「いいよ」

そしてまた振り出しに戻る会話。

「ひとみちゃん。とりあえず保健室に行って消毒位はした方がいいよ」

二人だけにすると話が進まないの僕はひとみちゃんを保健室に行くように説得する事にする。そっちの方が何かと良さそうだし。

「む」

「ほら、あなただけですわよ」

「む、わかった」

「じゃあ、行きますわよ。一応礼は言っておきますわありがと」
「ごいました」

「別に構わない」

「そう、では」

九条姉妹は保健室に向かった。

「姉妹ね」

僕はそれを見送った。

第十六話 食堂バトル後師弟

九条姉妹が保健室に行くのを見送って僕は再び食堂へと向かって
いた。

「さてと、さっさと食堂に行こう」

・
・
・

大食堂に着いた。中は今だ食事中の中学生がいなかった。いや、
正確には中学生はいた。だが何かに注目しているようで一ヶ所に固
まっていた。

「何だ？」

人垣を避けながら何とか前へ。中学生達が注目していたのは中宮
会長とセミロングの茶髪にピンクのリボンをつけた癖っ毛の小柄な
女の子だった。さらに女の子はピンクのグローブをつけていた。あ
のゲームの格闘家がつけてる指のたやつね。そして白の半袖ブラ
ウスにスカート姿。何なんだ？

「なんだよこの状況」

「それは私も聞きたいわ」

腕を組んだ佐藤が言った。確か中学生の案内だったか仕事は。

「見てたんじゃないのか？」

「いきなりだからわからないのよ」

「そうか」

なら見ているしかないな。それにしても中学生は昼食食べなくていいのか？ とか思っているうちに事態は進行していく。

「もう一度言っぞ。このボクと勝負しろ!!」

小柄な女の子が言う。えらくボーイッシュな子だな。中学生ではないようだが。てか勝負って……。

「それは良いが何で私と戦うんだ？」

中宮会長が小柄な子に聞く。もったな疑問だ。

「アンタが強いからだ!!」

どういう理由だよ。てか、いいのかこれこのままにしてて。

「駄目でしょ」

佐藤が言う。ですよ〜、

「まあ、中宮会長だし大丈夫じゃないか？」

「だといけど」

佐藤は大丈夫とは思っていないようだ。いかぶしげに中宮会長を見ている。

「そうか……………なら、いいぞ。かかって来い!!」

中宮会長が言い放ち決戦の火蓋は切って落とされた。佐藤のやつ

ぱりって顔が何か悔しい。

「行くぞ。 桢宮高校一年生沢村真希行くぞ!!」

沢村と名乗った女の子は拳を握りしめ駆け出す。てか、コイツうちの生徒か。なにやってんだよ。てか一年生にこんな奴いたか？制服も違うし転校生なのか？

「ああっとそうだった忘れていた。まだ仕事が残ってたな。ふむ」

なぜか周りを見渡す中宮会長。そして僕と目が合った。嫌な予感がする。

「よし」

案の定というか予想通りというか、いきなり腕を掴まれて向かってくる沢村って子の前に出された。

「なんだそいつ!!」

沢村が言う。うん、当然の疑問だ。僕でもそう思うよ。当事者じゃなければ。

「こいつは私が選んだ男だ。ああ、言ったが気が変わった。コイツに勝たない限り私は勝負はしない」

僕の意味は完全に無視されて話は進む。かかってこいつっていったのは中宮会長自身なのに。

「なら、一撃で沈めてやる!!」

「では、頼んだぞ。勝手だとは思うがまあ、あとでなにかお返しはする。だから頼んだ」

ポンツと僕の方を叩いて中宮会長は去っていった。はあく仕方ない何とかしよう。このままじゃオープンスクールにも支障がでる。

「死ねやー!!」

「おっと!!」

沢村が拳を構えはなってくる。

パシッ!

その拳を片手で受け止める。

「!?!」

「まったく、危ないだろ」

「フンツ!!」

すかさず沢村はあいている左手でもう一撃を放とうとする。

パシッ!!

それも受け止めた。

「なるゝ!!」

今度は右足で蹴りを放つ沢村。かなり無茶な体勢だ。さすがといふべきなのか沢村は体は柔らかかったらしくその蹴りは僕の顔に向かっていた。無茶な体勢ではなっただはさすが中々威力がありそう

な感じ。てか、スカートなのに大丈夫か。……………スパッツを穿いていた。いや、別に残念とか思っていない。

「もらった〜!!」

勝利を確信したのであるう沢村が言う。何せ僕は今両手はふさがっているのだから。

ガッ!!

「な!?!」

だけど僕はそれを沢村の腕を掴んだまま右腕を動かして防いだ。予想通り痛い予想していた分心構えは出来ていた。顔に喰らうよりはマシだし。

「この!! 離せよ!!」

「お前話したらまた殴りかかってくるだろ!!」

「当たり前だ!!」

「なら駄目だ」

「この!!」

沢村は僕の手から逃れようと色々してるがそんなことでは離す分けない。予想外なことさえなければ。

「この!!」

ゴーン!!

「ガッ!!」

この予想外な頭突きさえなければ。沢村の額が僕の額にクリーンヒット。あまりに予想外だったのでモロに喰らってしまい沢村を離してしまった。

「痛！」

「いった〜!!」

だが、まあ、沢村本人もダメージを喰らったようで額を押さえ涙目でもだえている。少し可哀想だなとか思ったり少し保護欲をかきたてられたりしかけた。実際はしてないよ断じて言うけど。

「よ、よくもやったな〜!!」

復活した沢村が言う。自業自得と思う。僕に責任の一端はあるのだけれど頭突きをして来たのはあっちだ。

「それ完全に逆恨みだよな!? 僕も痛かったんだけど!？」

「うるさ〜い!!」

「こいつまったく人の話を聞く気ねえ!!」

問答無用で殴りかかってくる沢村。女の子を殴るわけにはいかないな。さてどうするか。となったら受け止め受け流すしかない。

「てりゃ! そりゃ! てっ! やっ!!」

拳を連続で放って来るが僕はそれを時には避け、時には受け止め、時には受け流してしのいでいた。しばらく続けていると。

「はあ、はあ、てりゃ! はあ、はっ!」

沢村は息があがってきた。さすがにこれだけ連続で殴りかかってきたらこうなる。対して僕は受け止めたり受け流してるだけなのでほとんど消耗してない。

「はあはあこの！」

「もう、やめろよ」

「嫌だ!!」

そう言っつて拳を放とうとするがそこで沢村は足をもつれさせてよろめき転げた。僕は咄嗟に受け止めた。

「まだ、やるか？」

「うう」

僕の腕の中でスタミナ切れでぐったり沢村。とりあえずどこかに運ぶことにしよう。沢村を抱きかかえる。俗に言うお姫様抱っこだ。沢村は何か言いたげだが何も言わなかった。

「佐藤、後頼んだ」

「はいはい、わかったからあんたはその子を何とかしてあげなさい」
「ああ」

あとを中学生を佐藤に任せてとりあえず保健室に沢村を連れて行く。時間が経っていたせいか九条姉妹はいなかった。さっきの食堂にいた気がする。

「よつと」

ベッドに沢村を寝かせる。ここに来るまでに寝てしまった。

「ふむ、何とかなったようだな」
「うわっ！！」

隣に中宮会長がいた。気配も何も感じなかった。いきなり現れたのだ。

「とりあえず君は沢村真希についていてくれ。目覚めた時に誰もいなかったら不安だろうしな」

「……………わかりました」

「じゃあ、頼んだぞ」

中宮会長は保健室を出て行った。

「はあ、なぜこんなことに」

呟いても沢村に起きる気配はない。

「もう食べられないよムニヤムニヤ」

「殴りたくなってきた」

まったく。気持ちよさそうに眠りやがって。

・
・
・
「はっ！！」

沢村が勢いよく跳ね起きた。

「起きたか」

寝過ぎだろコイツ。もう夕方だぞ。既にオープンスクールは終わっている。あいつらには悪いことをしたとしか言えないな。原因はコイツと中宮会長なのだが。

「あれ？ ボクは？」

「お前疲れて寝てたんだよ」

「え！？ じゃ、じゃあ勝負は？」

「お前の負けだろうな」

「そんな〜」

うなだれる沢村。可哀想なんだが巻き込まれた僕としては素直に同情はできない。

「まあ、あの調子なら中宮会長には勝てないと思うけど」

これで諦めてくれるといいんだけど。まあ、それで諦めたら楽なんだが諦めないだろうな。

「うう……」

あれ、何か泣きそうな感じ。ってちょっとまって！ どうする、この前莉子が泣いてたときはわかる状況だったからよかったが女の子と関わるのがあまりなかった僕にとって女の子しかも年下が泣きそうになったときの対処法など知らない。

「うわああ！！」

「うわー！！」

急に叫びだした沢村。

「うっしー!!」

頬を二回叩いた沢村。つてか泣きかけてたわけじゃないのね。あ、そう……。

「よし、決めた!!」

「何をだよ」

「弟子にしてくれ!!」

「は!?!」

ちよつと待てわけがわからない。沢村はなんと言った。弟子にしてくれ、何でだ。

「ボクは悟ったんだ。もつと強い奴に勝つには師匠が必要だと!!」

「なんでそれで僕になる」

「意外に強そうだし。それに男だし」

「なんでそうなるんだよ」

本当に意味がわからない。

「それになんでそう強い奴と戦いたいんだよ」

「……………」

沢村の雰囲気少し暗くなる。

「ボクには兄がいたんだ。ボクの家は武術家の家系で兄もボクもそれを習ってたんだけど。兄は本当に強かったんだ。四歳で免許皆伝ボクの自慢の兄だったんだよ。だけど……………」

「……………」

「だけど、あの女が全部壊して行ったんだ。五年前、兄とある女が戦ったんだ。ボクもそのときはいなかったからわからないけど、それで兄は負けたんだ。父も母もそのときに殺された。兄はそのあとに自殺した。ボクはその時の女が許せないんだ。ボクは顔を見てないけどそいつはすごい強いんだ。だから……………」

それは復讐だった。強い女という条件だけでその相手を探すのはどんなに大変だろう。どれだけの覚悟なのだろう。僕にはわからないしこれから一生わかることはないだろう。だけどひとつだけいえるのは何があっても復讐はしてはいけないということ。

「だから…………頼む師匠になってくれ！！　ボクはアンタ以上に強そうな男は知らない！　師匠になってくれるのならどんなことでもする！！」

額を床につけて土下座してくる沢村。

「顔を上げる」

「じゃあ！」

「条件次第ではなってる」

「条件は？」

おそらく沢村はどんな条件でも了承するだろう。それに復讐をやめろといってもやめる気はないだろう。なら、そんな気を起こせないくらい楽しく過ごさせて僕がコイツを納得させればいいと思う。正直言つて僕にそんな大役が勤まるとは思えないけど、僕にしか出来ないのならやってあげよう。たぶん、他の奴らでもそう言うと思うから。

「自分を大切にしてそんな態度はもうとらないこと」

「そんなとは？」

「何でもするって言うところ。お前可愛いんだからさそんなこと、僕以外、特に三上って言う僕の知り合いに言ったら何されるかわかったもんじゃないぞ」

「か！ かかかかか、可愛い！？ ボ、ボクが！？」

真っ赤になって言う沢村。どうしたんだ？ それにしゃべれてないし。

「大丈夫か？」

「だ、ただ大丈夫だ、うん……………」

それでも顔は真っ赤だけどまあ、本人が大丈夫って言うてるから大丈夫なんだろう。さて、条件はもう一つあるからなそれも言うておかないと。

「それともうひとつ」

「なんだ？」

「復讐をやめろとは言わないけどそれが自分の幸せか考える。そして自分の幸せを生きる。その二つでいい」

「え、でも……………」

沢村はもつときついのが来ると思ってたようで拍子抜けしている。だけど、それでいいんだと思う。

「さてと、じゃあ、帰るかな。お前も遅くならないうちに帰れよ」

「……………は、はい師匠！！」

少しむずがゆくなりながらも僕はとりあえず帰路についた。

・ ・ ・
さて、あまり弊害がないと思って師匠になったわけだが、弊害があった。

「師匠！！ ご飯かっってきましたよ！！」

「余計なことしないでいい」

「でも！！」

昼休みには勝手に購買でパンを買ってきたり。

「師匠！！ 書類ですか持ちますよ！！」

「あ、おい」

中宮会長に押し付けられた仕事を勝手に手伝ったり。

聞く分にはいい子かと思えるのだが、実際にやられるとつっつとしい。三上に相談したところ。

「死ねカス」

と物凄いドスの利いた声言われた。あのときの迫力は忘れられないな。

「師匠！！」

まあ、善意で慕ってくれてるので無碍にも出来ないし。……………まあ、いいか。そのうちなんとかなるだろう。ならなくてもするぞ。

第十六話 食堂バトル後師弟（後書き）

何か師弟誕生。勢いでやっちゃたよ。一体この小説はどこに向かうのだろうか。それは作者のみ知る。

まあ、真希ちゃんは結構書きやすいキャラなのでたびたび登場させる予定です。

第十七話 夏休み無人島へ

夏、よく晴れる季節、太陽が笑う季節、世界が笑う季節。6月に泣いて泣きつくした世界の笑いの季節。カラッと晴れたこの夏にはたくさんのお楽しみがある。それはまさに夏だからこそだろう。歩んできた道を振り返ることもこれからのことを考えるのにもちょうど良い季節だ。この休みのうちに将来を決めることも出来るのだから。夏は何かを変えるのにはちょうどいい季節だ……。

7月28日、水曜日。俗に言う夏休みに僕達は突入していた。6月14日から始まった試験も佐藤のおかげかいつもよりいい点数で乗り切ったその後夏休みまでの期間をいつものようにゆったりとすごした。そして校長先生のありがたくも長く睡眠促進効果もあるという物凄くありがたい話を聞いたのは一週間前のこと。今、僕達は栗原が所有している無人島に向かっていった。無人島に行くまでの敬意は今から三日前にさかのぼる。

一週間みっちりあった補習も終わったその日の放課後、栗原が言った。

「ねえ、みんな、28日から四日くらい予定何かある？」
「僕はないな」

別になにかあるわけでもないし。しかし、何で栗原はいきなりこんな事聞いてきたんだ？

「私もないよ」

莉子が言う。莉子はあってもなくしそうだけどな。

「俺もだな」

「私も別にないです」

「私も」

三上と木山と佐藤が言った。みんな予定はないようだな。

「それでそれがどうしたんだ？」

「うん、その日からね僕の持つてる無人島に建てた別荘に行くんだけどみんなもどうかかなと思ってね？」

「行くぜ（よ）！！」

三上と莉子が同時に言った。

「悠も行くでしょ？」

その明らかに行くしか言わせないみたいな顔をしていうな莉子。

「……………はあ、行くよ。たぶん断っても行くことになりそうだからな」

主に莉子とか莉子とか莉子とかに。莉子だけとかツツコムな。ソイツしかいないんだから。

「木山さんと佐藤さんは？」

続けて栗原が聞く。

「ん〜そうですね。確かその頃には何も予定もありませんし。私も行くですよ」「

「佐藤さんは？」

「そうね、行ってあげるわ」

「そう、それはよかった」

というわけで28日に栗原が所有する無人島の別荘に向かうことになったのだ。

・
・
・

回想終了。

まあ、そんなわけで今現在栗原所有の船で無人島に向かっているというわけだ。ちなみに沢村はいない。赤点ばっかで鬼も逃げ出す補修中だ。

「それにしてもあの栗原ってなんなわけ」

佐藤が聞いてくる。

「ああ、佐藤は知らなかったな。栗原は結構金持ちなんだよ。栗原財閥って知ってるか？」

「あの、南雲財閥の次に大きな財閥でしょ？」

「そうだ。で、栗原はその後継者だ」

「マジ？」

「ああ」

「ただの同姓同名だと思ってたわ」

まあ、僕も聞いたときはビックリしたよ。まったくそんな感じしないからな。

「それでもそれが栗原だからな」

「ふん、そう」

それだけ言っつて佐藤は船室に戻った。

「自分から聞いといってお礼もなしか」

まあ、いいんだけど。

「さてとあいつら大丈夫かな」

あいつらとは三上と莉子のことだ。

「うっ、気持ち悪い」

「駄目だ、俺吐きそう」

と二人は船酔いで完全にダウンしていた。

「うっあ」

「うう」

二人ともうなっている。少し可哀想だが、静かだからそのままにしている。

「あの二人がダウンするとこんなにも静かなんだな」

「それには同感です」

「木山か。木山は大丈夫そうだな」

「はいですよ。これくらいでダウンするようなやわな鍛え方はして
ませんです」

「ああ、そう」

しかし、いつも騒がしいのはあの二人のせいということが明確にな
ったな。

「それにもまだ着かないんでしょうか？」

「栗原はなにか言ってたのか？」

「何もです」

「そうか。だが、もうすぐと思うぞ」

そろそろ昼近くになってきたし。

「見えてきたよー！」

ちょうどいいタイミングで栗原が言った。確かに前方には島が見
える。

「さあ、ついたよ」

島へと上陸する。小さくもなく大きくもない中間の島で、ほぼ円
形だ。

「さてと、栗原、三上達を下ろすの手伝ってくれ」
「わかった」

三上を栗原に任せ、僕は莉子を運ぶ。

ドボン！

後ろで何か海に落ちた音がした。三上だった。

「あちゃ、落としちゃったよ」

笑顔で言う栗原。わざとだ。絶対わざとだ。とりあえず莉子を海岸に下ろす。その瞬間。

「ふっかーっ！！」

一瞬で復活した。

「うおおおおおおお！！」

三上が海から上がってきた。

「ふっかーっ！！」

三上も同じようだ。

「「やっぱり人間は陸地だな（よね）！！」」

そう宣言する莉子or三上。

「これが今までダウンして奴らのテンションかよ」

「フツ船では遅れを取ったけどこれから盛り返すぞー！！」
「俺の本当の実力を見せてやるぜ」

聞いちゃいない。

「これは面白いことになってきたですよ」

「こっちに被害がなければな」

「私にはないのでノープログラムです」

「パソコンが動かない!？」

「おつと間違えたです」

「いや、故意だろ」

「あなたが好きです!!」

「それこそ間違いだよ!! そっちの恋じゃねえよ故意だよ!!」

おお、何か楽しい。不思議と楽しいな。あの某物語のカタツムリのツインテールと主人公が話しているときと同じ楽しさだ。いや、体験したことはないのだが。そんな感じがする。

「それはそうと狩野君私には気になることがあるのですよ」

「なんだ？」

「ギャルゲとかでメインとされるヒロインは優遇されますが、一体メインヒロインとはどういったものなのでしょうか？」

「知らないよ」

何の話だよ。

「第一メインとついていながら世間にはまったくメイン扱いされないヒロインも多いですし。ヒロインとか」

「それはまた別の話のような」

「それに比べメインではないヒロインって結構いい思いしますですからお得です」

「そういつもんかね？」

「そうですね。第一メインと名のつくヒロインって結構酷い目にあつてますよ。そこに主人公が引かれたりするわけですが」

「ああ、そう」

それを言っただろうする気だよ。

「まあ、そういうのを抜きにしても最終的にはメインヒロインは幸せになるですよ。もう、

運命とかなんとかを超越してですね」

「……………」

一瞬だが木山の顔に闇が浮かんだ気がした。すぐに消えたので気のせいなのだろう。

「まあ、それよりも」

ニヤリと木山が笑みを浮かべる。嫌な予感がする。

「狩野君は誰がメインヒロインなんです？」

「なんでそんな話になるんだよ！」

予想通りいいものじゃなかった。

「なにを言いますか。こつちが本題です」

「長い前振りだな、おい！！」

本当に長い前振りだった。

「さあつさあ、さつさとゲロしちまいなですよ！！　ちなみに私
の見立てでは今のところ最有力候補は佐藤さんといったところですかね。キャラ的にはツンデレですがそこがまたいじらしいとい
うかなんと言つかです。それに二年の最初には孤立してましたり。ま

あ、今は狩野君の助力もありマシになりましたが、そのときの縁もあつてとがありますよね」

「知らん」

「あれあれ〜？ 違うんですか〜？」

「違う」

そんなことあるわけない。絶対にない。

「第二候補というかこっちのほうが本命ですかね。九条カリン。典型のお嬢様タイプ。高飛車な性格。ハーフで美少女ですね」

「な、何のことだ」

「あれあれ〜」

ヤバイ、こればれるか？

「まあでも、九条さんの性格は狩野君の苦手なタイプですから私的に第二候補です」

「そうなのか」

「はい、まあ、彼女も色々あるみたいですけど。そのあたりの事情をあなたは知らないはずなので違いますね」

言えない実は知っているなんて言えない。木山に言った瞬間どうなるか。たぶん来世まで色々からかわれる。ばれないようにしよう。

「ん〜、第三候補については黒江さんが妥当ですね。典型的な幼馴染キヤラです。六月にはいろいろあつたみたいですね。それに今回のもあわせて過去二回に及ぶ事件もあります。それに昔は姫様と騎士ナイトの関係だったとも聞いていますし」

「勝手に話を進めるな」

それが実は莉子が騎士^{ナイト}だったとは口が裂けても言えないな。というより何でそのことを知っているんだよ。莉子が話すとは思えないし口止めもしたし。一体誰から聞いたんだ。

「その次はまあ、私といったところですね。佐藤さんとかと会う前から知り合いましたし。新聞部のときもいろいろ手伝ってもらいましたから」

「何を言ってるんだよ」

それに自分のことだろう。いいのかそれは。自分で言っちゃたら世話ないだろう。そんなことを気にせず木山の話は続いていく。少しは僕の話聞けよ。

「あとは真希ちゃんですかね。真希ちゃんはまだ後輩ですし、あまりないと思いますが師匠と弟子の関係ですから何かあるかわかりません」

何も無い何も無い。会ったらいけないだろ。後輩だぞ。確かに可愛い子だけだね。意外に胸とか大きいしってなに考えてるんだ僕は。

「大穴で生徒会長というのもありですね。ふうん、会ったのは少ないですがそれなりに濃い出会いだったと思いますし」

「おい」

「他には小雪ちゃんもいますよね」

だからどうして木山はそんなことまで知ってるんだよ。おかしいだろ。僕は話したこともないぞ。

「まあ、まだ見ぬヒロインもいそうなのでがんばれです。私の予感ではこの島には野生児のロリっ子がいそうです。金髪碧眼で海難事

故でこの島で過ごしていたという設定の

「おい」

「いや〜楽しみですね〜。じゃあ、私はさっさと別荘に行くです」

話も聞かず木山は別荘に言ってしまった。

「言うだけ言って行きやがったよ」

本当になんだったんだろう。てか、そんなロリっ子とかいても困るだけだろう。

「ほら、そんなところに突っ立ってないでいくわよ」

佐藤が言った。

「ああ、そうだな」

「はい」

佐藤が荷物を差し出してくる。

「なんだ？」

「持ってくれる」

「自分で持ってくれる」

「いいから持ちなさい。こついつときに男の手を借りなくてなんなのよ」

「……………」

おいおい、はじめて会ったときと性格変わりすぎじゃないか？

「早くしなさいよ」

「はいはい、わかりましたよ。お姫様」

「じゃあ、運んどきなさいよ」

それだけ言つて佐藤は栗原別荘に向かった。

「はあ。まあ、佐藤からしたらいいことなのかな？ 納得は出来
ないが」

仕方なく荷物を持って別荘へと向かった。

第十七話 夏休み無人島へ（後書き）

夏休み編突入

第十八話 海ってやっぱりいいよね

さて、そんなわけで栗原別荘。島の高台に立てられている。二階建てなのもあり普通の別荘よりはかなり大きな印象を受ける。まあ、僕は普通の別荘というのを知らないのだが。平均的な一軒家と比べても数倍の大きさだろう。そっちの方がわかりやすい。

外観は清涼感のある白と薄い色で統一されており一階にはウッドデッキが張り出し、二階にはバルコニーがある。ウッドデッキは二ス以外塗られておらず木そのままの色が出ている。そこには円形のテーブルとそれに付属する椅子が数脚置かれている。オープンカフェのような感じになっている。栗原のセンスだな。

「じゃあ、入ろうか」

別荘を見蕩れていたみんなに栗原が言う。

内装もすごかった。

玄関から入るとまずは高い吹き抜けの天井が迎える。その天井につけられた天窓から光が降り注ぎ部屋の中は温かい明るさに包まれていた。

オープンヒナダン階段で温かみのある階段を上げれば二階、さらに上げればロフトへと行くことが出来る。二階にはいくつか来客用の部屋があるようだ。また、ふとした所にアンティークや調度品が置かれている。これも栗原自身が集めた物らしい。

一階はリビングダイニングでありそこからはウッドデッキにも出

ることができ壁のほとんどが窓でありどこからでも海を臨むことが出来る。木製システムカウンターがあり料理も楽しそうだ。

「すごいな本当」

「うん、そう言ってもらえると嬉しいよ」

「ねえ、ねえ悠すごいよ!!」

「あまりはしゃいで何か壊すなよ」

莉子がはしゃぎまわっているので言う。

「いや〜、いいところです。ほかに友達誘うべきでしたね」

「そうだね」

「今から電話しましょう」

「おいおい、今からじゃ無理だろ」

「一人なら可能です」

誰だよ。それ。木山は電話をしに外へ出て行った。

「二階だけでなく地下もあるからね。ちなみに地下はサウナだった
りするよ」

「へ〜」

まあ、サウナか試してみるのもいいかもしれないな。

「じゃあ、みんなそれぞれ部屋の前に札置いといたから部屋はそれに従ってね」

「ああ」

指定された二階の客室に行く。ベットとクローゼットと最低限のものしかなかったがここからでも海が見えた。ひとまず荷物を置い

て一階へ。当然佐藤の荷物も部屋においてだ。

「おっし！！　じゃあ、荷物を整理して水着に着替えてから浜に集合だー！！」

三上と莉子が高らかに宣言した。全員が部屋に荷物整理しに戻る。

それから30分後。

僕と三上と栗原はそれぞれ水着に着替えてパラソルやらの準備をしていた。

「おゝ、ご苦労ご苦労」

莉子がやって来た。

「んふふ、どう悠。似合う？」

莉子が着ていたのは黒くおちついた花柄パンツタイプホルタービキニにビーチサンダル。惜しげもなくさらされた生足に思わず唾を飲み込む。健康美に溢れている。

「似合ってるんじゃないか」

勤めて平静に言った。

「えへへ、褒められた〜！」

どうやら莉子にはばれてないようだ。

「似合ってるよ黒江さん」

「ありがと栗原」

「すげえ似合ってるぜ！！」

「まあ、一応ありがとう三上」

次に来たのは水色のタンクトップ・スカートの水着の木山だ。莉子ほど体に起伏はないがというよりこの面子で一番ないが中々可愛い感じだ。良家のお嬢様って感じがどことなくする。

「やっほ〜ですよ〜」

「似合ってるな」

「ありがとです。でもなにもないですよ」

「別に何も期待してないよ」

「そうですか」

「うん、木山さんらしいと思うよ」

栗原がいい。

「そっだな」

三上がいう。

最後に佐藤がやって来た。黒と白とピンクのボーダーホルターパレオ水着だ。腰にパレオを巻いているのでその生足を見ることは出来ないが歩きたびに少しだけ見える足がまた。やっぱり見蕩れずにはいられない。

「何よ。どこかおかしい？」

「い、いや。似合ってると思うよ」
「そう」

やっぱり反応が薄い。いや、少し顔が赤い気がする。太陽のせいかな。

「そついえば木山誰に電話したんだ？」

「来てからのお楽しみです。先にはじめていても結構です」

木山の言葉を聞いて三上が宣言する。

「よし、ならバーベキューを始めるぞー！！！！」

確かに昼には丁度いい時間だがいきなりかよ。一応準備はしてるけど。

「さあ、バーベキューの開始だ！！」

三上が火をつけバーベキュー開始。無人島でおこなったことの一
番目はバーベキューとなった。

なぜか焼くのは僕。莉子と三上に強制指名された。

「ほら、焼けたぞ」

「わーい！！！！」

「よっしゃー！！！！」

莉子と三上が最速で食べる。肉だけ。

「くらー！ お前ら肉ばっかくうな！！！！」

「だが断れる!!」

三上と莉子が同時に言った。

「まあ、まあ今日くらいはいいじゃないか」

「栗原そういうなら少しは手伝え」

「まあ、僕主人^{ホスト}だし」

「それこそやれよ」

「任せた」

「おい！」

栗原も僕を助けてはくれなかった。僕を助けてくれそうなのは残り二人。

「なあ、木山手伝つてくれないか」

「おっと、やはりきたですね。来ると思ってたですよ」

「なら」

「だが、断るです!!」

「佐藤」

「いや」

「ですよね」

誰も助けてはくれなかった。誰か僕を助けてくれ。

「ならば、私が助けてやろう」

「!？」

「ああ、ようやく来たですね」

木山の眩きとこの声は。

「まさか!！」

海から我が校の生徒会長中宮風里が黒ビキニ姿で現れた。このメンバーの中で一番目の毒だ。特に胸が。やばすぎる。

「おお!! 我が校の女子の中で彼女にしたい女子ランキングナンバー1の中宮会長!!!」

三上が興奮しながら言った。無駄に声大きい。

「ほのふいとふあれ(この人誰)?」

「口にも入れたまましゃべるな莉子」

急いで飲み込んだ莉子。

「ねえ、悠あの人誰？」

「うちの生徒会長だよ」

「ふくん、そうなんだ」

さほど興味がないようにそれだけ聞いた莉子は再び食べ始めた。佐藤も興味はなさそうだ。

「へへ、木山さんが呼んだのって生徒会長だったんだ」

「そうですよ栗原君」

そうこう話していると中宮会長が近づいてきた。

「ここはお前の島か栗原直哉」

「そうだよ」

「まったくわかりづらい所に別荘を作ったものだ。探すのに苦労し

たぞ

探すも何もここまで泳いで来ている時点でもう普通の人間とは何かが連れている。

「それはゴメンね」

栗原お前中宮会長を舐めてないか？

「まあ、いい狩野悠私も手伝ってやる」

焼くのをということだろう。

「お願いします」

「ああ」

中宮会長と供にいろいろ焼いていく。中には中宮会長が獲ってきた(素手で)魚もあった。しかし、中宮会長のおかげで少しは楽になったのだが、僕はまだ一口も食べれていなかった。

「中宮会長は食べなくていいんですか？」

供に焼き続けている中宮会長に聞く。

「ああ、心配するな食べているぞ」

「へ？」

「なに、焼いている途中で食べている。狩野は食べないのか？」

なんでそりゃ。あなた食べる暇なかったじゃないですか。そんなことしてなかったじゃないですか。なのに食べている。あたかもそ

れが当然のように驚かないでくださいよ。

「い、いや、いいです」

つくづくうちの高校の生徒会長の規格外さがよくわかった。

・
・
・

「はあ。終わった」

「海で遊ぼうー！！！！」

三上と莉子が海へと走っていった。莉子は海には入らなかったが。

「では私も行くかな」

中宮会長も海へ向かう。

「さうで、私は森の中に本当に野生児がいないかどうか確かめてくるです」

「あ、木山さん僕も行くよ」

栗原と木山は森へと入っていった。

「はあ」

僕はパラソルの影に座り込む。

「結局なにも食べれなかったな」

どうすっかな。

「はい」

どうするか考えていると佐藤が皿を渡してくる。上には肉やらがのっていた。

「アンタ食べてないんでしょ。残ってたのどつとてあげたから食べなさいよ」

これは非常に嬉しかった。

「サンキュー」

受け取り食べる。うん、うまいな。

「だけどなんでどつとておいてくれたのんだ？」

アニメとかなら普通に佐藤が僕のが好きとかだがそんなことはあるはずがない。

「べ、別に。アンタに倒れられたら晩御飯が作れないからよ。まとも料理できるのアンタしかいないんだから。勘違いしないでよね
!?!」

佐藤は走って海へ行った。

「僕は料理係かよ」

どつりで、てか栗原も出来るだろ、木山だつて。僕に押し付けたな。

「いや、海は楽しいね」

莉子が隣に座る。おそらくはしゃぎすぎたから疲れたので休憩しに来たのだろう。

「その割には泳いでないみたいだな」

「……………」

莉子が急に黙る。

「どうした？ 泳がないのか？」

「……………」

莉子は何も言わない。

実を言えば莉子はかなづちだ。昔から莉子は泳げない。いつも水泳の授業はサボっていた。

「せつかくの海だる泳いでくればどうだ？」

「……………わる」

「ん？」

「悠のいじわるー!!」

ちよつとからかいすぎたかな。

「知ってるでしょ。私が泳げないこと！」

「そうなのか知らなかった」

さっきは食べられなかったからな。少し仕返した。

「む〜」

子供のよつに頬を膨らませる莉子。その様子に少し可愛いかな〜とか思うわけもなく。その頬を引っ張りたくなつた。やらないけどな。

「そうむくれるなよ」

「む〜〜あ!〜!」

何かに気づいた莉子。

「そつだ!〜! 悠」

「さて、海行こう」

莉子が言い終わる前に立ち上がり海へ向かう。

「ちよつと待つてよ!〜!」

「待たない」

「泳ぎ方教えてよ〜!」

ほらな、やっぱりそうきた。しかもこれが本音じゃないな。どうぞあわよくばとか考えているんだろ。過去の経験からそんなことはわかりきっている。ので、拒否。莉子がこれない海の中へと避難することにする。

「お〜し〜え〜ろ〜!〜!」

「中宮会長に教えてもらえばいいだろ」

あの人なら一日でそれも完璧に泳げるようにしてくれるだろ。

まあ、こう言ったところで莉子が退くとは思えない。どうせ食いで下がつてくる。

「私は悠に教えてほしいの!」

ほらな。

「……………」

「悠?」

「……………がんばれ!」

それだけ言って僕は海へ入っていく。当然莉子は足が届くところまでしかこれません。よかったよこのあたりの海割と深くて。

「悠!」

こんな無人島の別荘にまで来て莉子の世話などする気はない。莉子が叫んでいるが無視を決め込み泳ぐことにする。海が綺麗だ。

その後、恒例の西瓜割りやビーチバレー大会（のちに中宮会長と莉子の一騎打ち）を行った。そのどれも三上が悲惨な目に遭ったのは言つまでもなく想像力の豊かな読者さんにはわかりきったことだろう。

そして日が暮れかけたところで別荘へと戻った。

第十九話 風呂って言ったら覗きがでる。

そんなわけで別荘で夕食の準備をする。今、佐藤たちは風呂に入っている。なぜか温泉に。その辺のことを栗原に聞きたいのだが栗原は答えなかった。

「さて、諸君！！ 我々の目的を達成するときが来た！！」

三上が言う。こいつ絶対によからぬことを考えてるな。あの無駄に真剣な顔がそれを物語っている。

「何をする気だ」

「愚問だな悠。今女の子たちは全員風呂だ」

三上のやりたいことやろうとしていることがわかった。栗原も同じくわかったようだ。

「あゝなるほど」

「そう、覗きだ！！！！」

「犯罪だぞ」

「何を言っているんだ悠！！ 覗きという至高にして崇高にして神聖なる目的の前には法律など意味を成すわけないだろう！！」

「そんなわけあるか！！」

「バカ野郎！！ もっと欲望に忠実になれよ！！」

三上が熱く言う。夏の暑さもあって物凄く暑苦しい。やめてくれ。てか、こんなときだけその無駄なやる気を起こさないでくれ。いつも僕に被害がまわってくるんだ。あの時だって……。

「三上は忠実過ぎるけどな」

栗原が的を射た事を言っているが三上にはまるで届いていない。三上は何かぶつぶつ言っている。おそらく覗きの作戦だろう。やめておいたほうがいいのに。

「さあ！！ 行くぞ！！！！」

「僕は遠慮するよ」

栗原は拒否した。

「僕は夕食の準備があるから行く気はない」

飯に夕食の準備がなくても行く気はない。なんたつて今風呂には佐藤と中宮会長という武闘派（？）がいるのだ。確実に五回は死ぬ。莉子は逆に見せてきそうだから逆に恐ろしいし。木山には精神的に殺されるか奴隷にさせられそうだ。だから行かない。

「貴様等には失望した！！」

別に三上に失望されても痛くも痒くもない。無駄に期待がない分楽だ。

「もう、いい俺だけで行くからな！！」

風呂へと続く通路へ歩いて行く。

「行っちまっつからな！！」

とか言いつつ全く進んでいない三上。一人で行くのが寂しいのだ

ろっつ。と言つてもついて行く気はないが。

「ほら、本当に行つちまうからな!!」

風呂へと続く通路に入る前に言った。明らかについて来て欲しそ
うだ。

「ああ行け行け」

「ごゆっくり」

僕と栗原はそれに気がつかないふりをして三上に見送る言葉をか
ける。

「後から来ても知らないからな!!」

三上は風呂へと向かった。最後までついて来てとは言わない三上
であつた。

「三上、お前のことは五分くらいなら忘れない」

「ねえ、悠」

「何だ？」

「どの位保つと思つ？」

栗原が言っているのは三上が覗きをしてどの位生きていられるか
だろっつ。

「一瞬じゃないか？」

「そうだね。佐藤さんや中宮生徒会長がいるし。悠ならまだしも三
上じゃ黒江さんも色々殺るだろっつし」

「字がおっかないことになつてるぞ」

やるが殺るになっっている。これじゃ意味が色々変わるぞ。栗原はわかって使ってそうだが。

「師匠の友人なんだし結構持つと思いますよ」

……………ん？

「おい、沢村どうしてここにいる」

「嫌ですね師匠。ボクは師匠の行くところに必ずいますよ」

ストーカだよ。

「いや、そうじゃなくてお前補修中だろ」

「気合いで終わらせました！」

沢村そこで褒めてって顔しても褒めないぞ。てか、補習って気合いで終わらせられるものなのか。しかもアノ有名な学年主任の補習だぞ。受けたものが全員人格が変わるといわれているんだぞ。それをコイツは平然と終わらせてきやがったよ。ある意味大物だな。

「おいおい、で、栗原が呼んだのか？」

「まあね、僕としても人数は多いほうが何かといいしね」

栗原が何か企んでいるように笑う。何を企んでるんだよ。聞いても言うとは思えないが、とにかく用心はしておこう。たぶん何か起こるはずだ。

「まあ、いいか、とりあえず沢村も風呂入って来い」

「えー師匠とがいいです！」

「ちよつおま!! 駄目だ!!」

「え〜!!」

「え〜じゃない」

「む、わかりました」

まったく。僕も健全な男子高校生ですので危ないですよ。本当にまったく。沢村にはもっと自重してもらいたいねまったく。

「とか言いつつにやけている悠なのであった」

「こら、栗原嘘を言うな嘘を!」

「ごめんごめん」

栗原も余計なことをしてくれる本当に。

「それで師匠。三上はどこ行ったんです?」

「覗きだ」

「おお!!」

何をそんなに感心してんだ沢村。どこにも寒心するところはないぞ。まさか何か勘違いでもしてるわけじゃないだろうな。

「さすが三上」

「ちよつと待て沢村お前なにか勘違いしてないか」

「ん? 何が?」

「なんで三上がさすがなんだ」

アイツただ覗きに行っただけなんだぞ。

「男子にとって女子の風呂は天国であると同時に地獄でもあると聞きました。だからそんなところに行く三上はすごいなと」

「……………それは誰に聞いたんだ」
「三上です」

思わず目頭を押さえる。呆れて何も言えないぞ三上。てか、後輩のしかも女子に何教えてんだ。こいつ素直というかバカ正直だから信じてしまってるぞ。

「よし、じゃあボクも行つてきますー!!」
「っておいお前女だろ　って、もういないし」

まあ、そんな大変なことにはならないだろう。そう思って料理を続ける。

「元気な子だよね」

栗原が言った。

「確かにな。だが、元気すぎだろ」
「まあ、彼女のいいところだよ。ああ、それとはい、これ」

栗原に渡されたのは大きな茶封筒。

「サンキュー。助かる」
「いいよ。頑張つてね師匠」
「師匠言うな」

茶封筒をテーブルの上に置く。これは沢村の流派とかと沢村自身について栗原に調べてもらったものだ。

「キヤー!?! この馬鹿! 変態!?!」

その時悲鳴が上がり鈍い音が響いた。

ドゴッー！

「ぶべらっ！？」

そして三上が吹っ飛んで来た。

「我が…生涯に…一片の…悔い…なし」

がくっ チーン

三上はそう言って気絶した。

「バカだ」

「バカだね」

どうせ復活するだろうから放っておくことにした。

第二十話 お風呂場の談話（前書き）

これが限界です

第二十話 お風呂場の談話

変態を追い出した（蹴り飛ばした）後になぜかいないはずの沢村さんが入ってきた。今、全教科赤点で補修中じゃなかったわけ。終わったのかしら。

「何でここにいるの？」

「師匠のいるところに弟子あります!!」

つまりあいつを追って来たってわけね。どこまで師匠大好きなのよ。

「本当に良くやるわね」

「えへへ、それほどでも」

「褒めてないわよ」

アイツも苦勞してそうね。

「師弟愛ですな」

木山さんが言う。そうかしら？

「木山さん。たぶん愛があるのは弟子だけと思っただけど」

あいつに愛があるとも思えないんだけど。

「それはそれで面白いんですよ」

「そ、そう」

私には理解できないわね。黒江さんとか好きそうだけど。

「……………」

何か沢村さんが黙って私たちを凝視している。何を見てるのかしら。

もにゆ

「ひゃ!?!」

もにゆ

「うにゃ?」

もにゆ

「あう!?!」

もにゆ

「なんだ?」

私、黒江さん、木山さんが黄色い声を上げた。中宮会長はまったく動じてなかった。理由は。

「何するよの沢村さん!!」

沢村さんがいきなり胸を揉んできたから。

「皆さん大きいですね。ボクなんてこんななのに」

沢村さんが自分の胸を見ながら言う。触られたことはおいておいて結構大きいと思うんだけど。高一だしまだ成長する余地はあるとおもつ。

「それで誰のが大きかったです？」

木山さんが余計なことを聞いている。確かに気になるけど。それは明らかだと思つ。

「え〜つと大きい順で言うと。中宮会長、黒江さん、佐藤さん、木山さんです」

「カップで言うത്？」

それ触っただけじゃわかんないでしょ。てか、わかったら変態じゃない。……………あの三上つてのわかりそうね。

「え〜つとたぶん、中宮会長がIで黒江さんがF、佐藤さんがD、木山さんがBです」

「正解ですね」

ちよつと待ったなんでそこまで正確にわかんよ。それになんで木山さん知ってんのよ。

「武術家のたしなみと兄に教わりました」

絶対違つわ。ただの変態じゃない。その兄絶対変態よ。あまり言いたくないけど最悪だわ。

「ふむ、いいお兄さんだな」

中宮会長なんでそこで賛成するんですか。おかしいじゃない明らかに。何を考えてるんですか。

「何も考えていない」

「勝手に心を読まないでください」

あれ、そういえばさっきから黒江さんが静かだけどなにやってんの？

「うう、悠以外に胸もまれた〜!!」

うわっ、号泣してるよ。ほっとこ。面倒だし。どうせすぐ元に戻れると思うし。戻らなくてもどうせあいつが何とかするでしょ。

「さて、恒例の行事を行うですよ」

木山さんが言う。

「何？」

「好きな人を言い合いましょー!」

「いや」

何でそんなことしないといけないのよ。あと別にいいし。

「ちなみに私はいないです」

「あんた性格悪いわね」

「それは自覚してますよ」

ならもつとたちが悪い。

「さあ、じゃあ生徒会長から言っていくです」

「私か、私はなそうだな」

考え中の中宮会長。考える必要ないと思うんだけど。

「自分だ」

ナルシストかよ。

「じゃあ、次黒江さんいくです」

中宮会長のナルシスト発言には何も言わないで次行くのね。本当に性格悪いわね。

「もちろん悠！」

復活した黒江さんが言った。やっぱり予想通りね。

「やっぱりわかりきった答えですね。じゃあ、狩野君のことが好きな人が他にいたらどうします？」

「殺す」

黒江さんがトーンを下げた。物騒すぎでしょこれ。

「ヤンデレですね」

ヤンデレ？

「何それ？」

「詳しくはググッと下さい」

教えてくれないのね。調べる気はないけど。興味ないしヤバそうだし。でも、あいつに好きな奴ができたらどうするのかしら。まあ、私には関係ないけど。

「じゃあ、真希ちゃんはどつです？」

「師匠！！」

腕を振り上げながら答える沢村さん。師匠ってあいつよね。

「いいの？」

黒江さんに聞く。殺すとか言ってたけど。

「あれは師弟愛だし」

いいんだ。基準がわかんない。

「ほほ、じゃあ、佐藤さんはどつです」

「いないわよ」

いるわけないじゃない。なのにしつこく追求してくる木山さん。

「本当ですか？ 一人くらいいませんか気になる人とか？」

「気になる人？」

何故かアイツの顔が思い浮かんだ。って何であんな奴のことなんて思い浮かべてんのよ！？ アイツお節介だし、お人好しだし、誰

にでも優しいし、料理うまいし、バカだしって何思ってるのよ!!
あんな奴なんか気になるわけないじゃない!!

「いるわけないでしょ」

内心を悟られないように言った。あとで思ったけど別に気になんないんだから隠さなくてもいいじゃん。何やってんだる私。

「そうですか」

なんかやけにあっさり退いたわね。なんか怪しいわね。何その全部わかってるみたいな顔は。そして私の耳元で言った。

「(ばれたら大変ですからね)」

「(何がよ)」

そこでにやける木山さん。何を考えてるのよ。

「(わかってるくせに、狩野君のこと……)」

「知らないわよ!」

あ。そこで失敗に気が付く。全員が私を見ていた。木山さんはニヤニヤしている。

「……………もう上がる」

それだけ言ってお風呂から上がった。

「あゝもう、何でこうなるのよ!」

全部あいつのせいだ。

「ムカツク」

むしゃくしゃする。

「なんなのよこれ……」

わけわかんない。その後みんな上がってきてリビングへと戻った。

第二十一話 密室閉じ込め師弟（前書き）

勢いでやった後悔はない

第二十一話 密室閉じ込め師弟

さて、現在僕は危機に瀕している。いや、正確には僕たちと言っべきだろう。

「どつしまししょう師匠」

そう沢村もここにいるからだ。そして危機的状況だ。

「どつしよつか」

今の状況を簡単に説明しよう。沢村とサウナに閉じ込められたほぼ裸で。いやタオル一枚という姿で。以上説明終了。なんでこんなことになったのか思い返してみよう。それは一時間前にさかのぼる。

・
・
・

一時間前、風呂からあがってきた佐藤と迎えた。なぜか佐藤の機嫌が異様に悪くずっと僕を睨んできていた。なぜか聞いても何も言ってくれないから少しばかり恐怖を味わっていた。それで、男性陣も風呂に入ることになった。

「じゃあ、行くぞ三上」

「おっ」

なぜか異様にテンションの高い三上といつもどおりの栗原と供に風呂入。一瞬で脱いで入っていった三上。

「どつした？」

「ここに女子が入ったんだ!!」

変態だ。まごうことなき変態が姿を現した。そして風呂にダイブする三上。

「ちなみに湯は変えさせてもらったよ」

「え?」

ザッパーン!!

三上が飛び込み水柱が上がる。

「何でだよ!!」

そしてすぐに上がり栗原に詰め寄る。

「女子、主に佐藤さんとかからの要望で」

「ちつきしょおおおおおー!!」

叫ぶ三上。バカだ。本当にバカだ。コイツのカテゴリがわからなくなるな。バカか変態か。いや、どっちもか。

「さつさと上がるかな」

体をあらって湯に浸かる。

「ふっ」

しばらくしてから上がる。

「早いなおい!!」

「誰も男の風呂なんか期待してないだろうが」

「BL好きの女子!!」

「死ね」

アイツは何をやりたんだ。風呂から上がり脱衣所へ。

「なら、僕としようか」

「え、栗原!？」

「ほら」

「アー!!」

何か後ろから風呂の中から聞こえてくるが無視だ無視。そんなことはないと思う。絶対にそつだな、あつたら三上とは絶交だな。

「ん?」

脱衣所に入ると物音が聞こえた。地下への階段からだ。ここはサウナへと通じている。

「誰かいるのか?」

腰にタオルを巻いて言ってみる。サウナへ入ると。

「あ、師匠!!」

タオルもつけていない全裸の沢村がいた。首が一回転するんじゃないかというくらい勢いで顔を背ける。少ししか見てないよ。うん。ほんのり赤い顔と汗に濡れた肩とかぐらいだよ。断じてそれ以外は見てません。

「と、とりあえずタオル巻いてくれ」

「え？ なぜです？」

「な、なぜって、い、色々見えるからだ」

「ああ、見せてるんです！！」

言い切った沢村。

「わかった僕はでる」

サウナの扉に手をかけるが。

ガチャッ

「あれ、開かない」

「え！？」

扉は何をしても開かなかった。

「つてことはもしかして」

「閉じ込められましたね」

「……………沢村とりあえずタオル巻け」

「はい」

さすがに素直に応じてくれた。

そうして冒頭へ。

・
・
・

回想終了。

「本格的にやばいな」

ここに入ってから十五分、沢村は二十分。大体サウナに10分から20分が普通だからそろそろ沢村は限界。

「沢村大丈夫か？」

「はい！」

大丈夫そうに返事をするが明らかに大丈夫そうではない強がっている。さて、どうしたものか。三上達が気づいてくれるといいんだが。

その頃三上たち。

「あ、ちょ、栗原、そこは」

「へっ、ここは弱いんだ、えい！」

「あ〜!!」

三上が栗原のマッサージを受けていた。期待していた人残念でした。これがさつき悠が脱衣場で聞いた声の真相です。

「はあ、はあ、はあ」

沢村の息は荒い。

「沢村大丈夫か？」

「は、はい」

明らかにきつそうだ。

「無理するな」

「大丈夫です!!」

大丈夫そうに見えないから言っている。顔は真っ赤だし目の焦点が定まっていなくて。扉を叩いてみるが効果なし。窓を割ろうとしても割れなかった。強化ガラスか何からしい。

「クソ」

ダメだ落ち着け。あれから既に30分以上経過している。僕も限界だ。頼む誰か気づいてくれ。

「うっ!」

フラッ

「沢村!!」

倒れかけた沢村を支える。

「す…み…ま…せ…ん」

「喋るな!!」

「はあ、はあ」

「とりあえず横になれ」

沢村を横にして頭を僕の膝に乗せてやる。沢村はぐったりしていた。頭を撫でてやる。沢村は目を閉じたままだ。息はしているから生きている。

「早くなんとかしないと」

だが、どうする。三上たちは来てくれないし。佐藤たちもおかしいと思っても来れないだろう。

「し、師匠」

「なんだ？」

「最後に……なる、かも……しれないですから……言います……あり……が……とう………」

「馬鹿野郎！！ 最後とか言つな！」

沢村からの返事はない。

「沢村！！」

まだ息はある。だが、危険な状態だ。

「待ってる直ぐに出してやる」

沢村の頭をそっとおろして立ち上がる。

「てりゃー！！」

扉のガラスを殴りつける。

「まだまだ！！」

ドン、ドン、ドン

何回も、何十回も、何百回も殴りつける。強化ガラスに血の跡がつく。殴りすぎで右拳から血が流れる。

「それがどうした!!」

ドン!!

それでも殴り続ける。殴り過ぎて腕の感覚がない。でも、今はそれがちょうどいい。

沢村を見る。ぐったりしているのは変わらない。息はしている。

くらっ

「くっ」

目眩が襲う。

「急がないとせりゃ!!」

ドン、ドン!!

精一杯の力を込めて殴り続けた。そして。

バリイン!!

扉の強化ガラスは割れた。そこからひんやりとした空気が入ってくる。強化ガラスを更にわりそこを沢村を抱えて通り抜けた。

「やった……」

ガラスの破片をよけて何も開けた場所に行く。

パタン

そこで僕は沢村を抱きかかえたまま気を失った。

第二十二話 星空の下

気がつくところそこは栗原の別荘の僕が泊まる部屋だった。服はきちんと来ていた。頭には氷がのせられている。

「よつやく、お目覚めね」

「佐藤……」

佐藤がベッドの横で僕を見ていた。なんだどうして僕はここに……。

「わけがわからないって顔ね。あんたサウナの前で倒れてたのよ。沢村さんと一緒にね」

佐藤の言葉で混乱していた記憶が蘇った。急いで起き上がるようにする。

「沢村!!」

バツ!!

「まだ寝てなさい!!」

だがすぐに佐藤に寝かされてしまった。

「沢村さんは無事みたいよ。もうちょっとで危なかったけど」「そうか、良かった」

助かったんだな。

「あんだ無茶し過ぎ」

棘のある声で佐藤が言う。確かに無茶だ。無事じゃない右手に包帯巻かれてるし。幸いあまり酷くないみただけ。幸い左手は使えるからいいけど。

「もうちょい何かやり方あったでしょ」

言い返す言葉もない。

「大体あんたはいつもそうでしょ。後先考えないで、あの雨の日だつてそうよ。って聞いている？」

本当にそうだな。今回は全面的に僕が悪い。

「ごめん」

「今日はヤケに素直ね」

「流石にな」

あんなことがあったんだし。

「そう、なら、もう少し寝てなさい。夕食は後で持ってきてあげるわ」

「ああ、ありがとう佐藤」

僕の言葉を聞いた佐藤の顔が赤くなる。

「べ、別にいいわよ」

顔を真っ赤にして佐藤は部屋を出て言った。その理由はまだ頭が朦朧としていてわからなかった。

「まあ、いいや。寝よう」

とりあえず寝ることにした。

・
・
・

「ほら、起きなさい」

「ん？」

佐藤の声で目を覚ました。あれから一時間位寝ていたようだ。

「よく寝てたところ悪いけどはいこれ」

佐藤の手にあるトレイには夕食が乗っていた。

「お腹すいたでしょ持って来てあげたわ」

「助かる」

「食べれる？」

「ああ、なんとかな」

佐藤からトレイを受け取って食べ始める。

「はい、あと水」

佐藤が水のペットボトルを渡してきた。

「サンキュー」

受け取り飲む。

「ふう、生き返るな」

しかし、なんで開かなくなったんだ？ 栗原が管理を怠ると思えないんだが。とりあえずあとで栗原にでも聞いてみよう。

「じゃあ、今日は静かに寝てなさいよ。いい、命令だからね！」

そう言って佐藤は部屋を出て行った。

「了解」

食べ終わったので命令どおり寝ることにした。

・
・
・

「ん？」

ふと目が覚めた。外はすっかり暗く時計を見ると真夜中だ。窓の外には満天の星空が瞬いている。

「ちょっと見てみようかな」

ついでに喉も渴いたし。

部屋を静かに出て一階に降り冷蔵庫から水のペットボトルを取り出してウッドデッキに出る。そこには先客がいた。

「まだ、おきてたのか佐藤」

「あんたこそ、寝てなさいって言ったはずだけど？」

「結構寝たさ。星が綺麗だったから見に来た」

そこでお前にあっただけだ。しかし、綺麗だな。さすが南国の無人島。

「案外ロマンチストなのね」

「そうか？」

そういうもんとは思わないな。単純に星が綺麗だったから見に来ただけだし。

「じゃあ、アンタはもう寝なさいよ」

「まるで僕が寝たほうがいいみたいない方だな」

「そうね、明日も倒れられてたら困るからね」

一応心配してくれてるのかな佐藤なりに。なら、もう少し優しく言うてくれないかと思うのだが。

「なに？ 何か不満でもあるの？」

「別に、それならお前も寝ろよ」

「私はいいの」

自分はよくて僕は駄目なのかよ。まあ、僕と佐藤じゃコンディションも違うか。僕は蒸し焼きの一步手前の状態だったわけだし。

「お前、意外に優しいよな」

「い、意外ってのは何よ！！」

「ほめてるんだよ、お前会ったときとは大違いだ。まだまだ、棘が

あるけど、こっちの方が好きだぞ僕は」
「……………」

あれ、佐藤に何も反応がない。僕は何かまずいことでも言ったか？
何か佐藤真っ赤だし。

「おい。佐藤？」

恐る恐る呼びかけてみる。

「……………寝る」

「おい！」

佐藤は何も言わずに戻って行ってしまった。

「なんなんだ？」

何か佐藤の機嫌を損ねることも言ったか僕？ ………………考えて
もわからん。

「はあく寝るか」

僕はもう一度見てから部屋に戻った。

空には満天の星空が限りなく輝いていた。

第二十三話 一度あれば二度ある

朝、目が覚めると時間は8:00だった。いつも起きる時間を考
えると寝坊と言える。昨日あんなことがあったのを含めたら当たり
前のことかもしれないが。

「慣れない場所に来て調子が狂ったか？」

とりあえず着替えてリビングへと向かう。

「おはよう」

莉子以外の全員に言った。どうやら莉子はまだ寝ているようだ。

『おはよう』

栗原が料理していたのでそこに行く。

「悠が遅いなんて珍しいね」

お前は僕の何を知ってるんだよ。

「さすがの悠も昨日の今日じゃ無理だったか」

三上が言う。

「さすがにな」

だが、三上僕は思うんだよ。お前が気がついればこんなことには

ならなかったと。思うんだよ三上。そこんとこるどつと思つっ。

「ふむ、まあ、無事だったのだからいいと思つぞ」

「生徒会長の言うとおりですよ」

「まあ、しばらくは右手は包帯だがな」

「ああ、それ一週間くらいで治るらしいよ」

栗原が言う。治るの早くないか？ そんなことないよな。普通だよな。たぶん。

「申し訳ありませんでした!!」

沢村が土下座しながら言った。

「気にするな。お前こそ大丈夫みたいだな」

「はい!!」

うん、元気みたいだな。よかった。これで無事じゃなかったら僕はどつしたらいいんだって話だったからな。

「それならいい」

さてと、じゃあ、まだ起きてきてない莉子を起こしに行くかな。

「じゃあ、ちょっと莉子を起こしてくるよ」

「がんばってね」

栗原が面白そうに僕を見送った。階段を上がり莉子の部屋の前へ。

「師匠!!」

「何しに来たんだ沢村」

「手伝いに来ました!!」

栗原だな。

「じゃあ、頼むか」

「はい!!」

さて、じゃあ、起こすのでしょうか。

コンコン

「莉子ー入るぞ」

一応ノックしてから部屋に入る。莉子はベッドで寝ていた。

「よし、じゃあ沢村は莉子を揺さぶってくれ僕は呼びかけるから」

「はい!!」

沢村が莉子に近づいていゆする。

「莉子起きろ」

そして僕は一応離れる。

ガバツ!!

「わっ!!　　むぐっ!?!」

すまん沢村、お前は尊い犠牲だった。状況説明をしよう。沢村は

い出したくないから。

・

「じゃあ、今日は森に行ってみようか」

「いいぞ」

「俺は賛成だ」

「別にいいわよ」

「賛成ー!!」

「OKですよ」

「異議はない」

「師匠がいいならいいです」

栗原の提案に全員が賛成する。

「じゃあ、準備して外集合ね」

僕はさっさと準備して外へでた。

「師匠！」

沢村が一番に出てきた。髪をポニーテールにしている。似合ってるな。

「髪型変えたんだな似合ってるぞ」

動きやすそうだな。格好も半袖の赤いTシャツに膝までのジーンズで似合っている。

「そ、そうですか？」

「ああ」

「こっちの方がいいですか？」

「僕はそう思う」

「そ、そうですか」

どことなく顔が赤い沢村は嬉しそうだ。髪型褒められたのがそんなに嬉しかったのかな。

「やっほー!!」

莉子が飛び出して来た。

「どう悠似合っ？」

そう言う莉子の格好は麦わら帽子に水色のノースリーブにショーツパンツと言う手足露出過多な服を着ていた。惜しげもなく太股と二の腕を晒している。

「似合っ似合わない以前にお前この森に行くこと忘れてないか？」

「忘れてないけど？」

頭が痛くなりそうだ。こいつ舐めすぎだろ。どうなっても知らないぞ。

「そっかならいい」

「??？」

頭の上にクエスチョンマークが出ている莉子を放っておいて他の奴ら待たせ。次に出てきたのは三上だった。

「お待たせ〜莉子ちゃん結婚してくれ」

「別に待ってないしヤダ」

「ガーン」

三上が体操座りで落ち込む。バカだ。バカがいる。てか、何やってんだよお前ら。意味不明だぞ。

「待たせたか？」

中宮会長が出てきた。紺の野球帽と黒の半袖Ｔシャツとジーパンという格好だ。

「いえ待ってないですよ」

「そうか良かった」

次に出てきたのは木山で探検隊の格好。一番本格的だ。どんだけやる気あるんだよ。

「待たせたですよ」

「後は栗原と佐藤か」

次に出てきたのは佐藤だ。白のＴシャツの上に薄い青色のパーカーを羽織りブラウンの長ズボンをはいていた。

「あれ、まだ全員揃ってないんだ？」

「ああ、栗原がまだだ」

「ごめんね」

栗原が出てきた。

「待った？」

「いや、待ってないさ」

「よし、じゃあ、行こう」

僕は森へ出発した。

・
・
・

そして皆さん予想通りの展開へ。

第二十四話 落ちた先は洞窟

「どうしてこうなった」

「ふむ、それは不思議だな」

二連続ともいえる。不幸だな。

「ふむ、しかし不運だな。洞窟に閉じ込められるとは……」

現状報告、中宮会長と洞窟で出口なしで閉じ込められて迷子以上とりあえずなぜこうなったかもう一度思い起こしてみよう。

・
・
・

森に入った後しばらく何かないか探していたときのことだ。

「何も無いね」

莉子が言う。そう何かあっても困るな。曰くつきの島だったらヤバイだろうが栗原に限って………ありそうだ。

「まあ、ただの森だからな」

「つまらない」。巨大怪獣の子供を期待してたのに」

「そう言うな莉子。本当に出て来たらどうする気だ」

「保健所に任せる」

「妙な所で現実的!!」

まあ、本当に出て来たら保健所じゃ無理と思う。たぶん自衛隊とか米軍の管轄だと思う。

「私の期待したのも出て来ないですね」

「木山お前は何を期待してるんだよ」

「金髪碧眼野生口りっ娘!!!」

ああ、そう言えば昨日そんなこと言ってたような。てかあれ冗談じゃなく本気だったのかよ。

「私は何時も本気です」

「その無駄な本気度を別な所で使ってくれ」

もっといいところでその本気を使ってくれここで使うものじゃない。絶対に。

「期待はずれだぜ」

三上はどうせろくでもないだろうな。だから聞かないでおこい。

「いやいや！ 聞けよ!!!」

「どうせ美人だろ」

「違う!」

じゃあ、何なんだよ。

「アマゾネスだ!!!」

「違わねえよ!!!」

変わらないよそんなに。どっちも女だし。

「野生と文明の違いもわからんか!!!」

「……」

三上が熱く語っている。正直どうでもいい。

「そもそもコスプレエロとはコスプレしているのが前提であって全部脱がしたらそれは違うのだ!!」

話が変わってるぞ。てか、そんなこと誰も聞きたくないよ。と言
うよりどこかで聞いたことがあるぞ。

「さて変態は放って置いて」

「放つとかないで!!」

無視だ、無視。

「このあたりだったはず」

「なにかあるんだ栗原」

「ん？ いや、なんでもないよ。そろそろだと思っただけさ」
「なにかだよ」

何か企んでるのか？ 栗原のことだからありえる。

「お楽しみお楽しみ」

そのお楽しみが物凄く怖いんだが。また、昨日みたいなことにな
っても困るし。あれは完全な事故だけど。

「ふむ……」

「どうしたんですか中宮会長」

中宮会長がなにやら地面を調べていた。

「いやな、この島の地下に何かありそうだ」

「え？　というか地下なんてあったんですか？」

「そうみたいだな」

栗原に聞いてみよう。

「さあ、僕は知らないね。別荘建てただけだしそれからずっとほっぽってたし。管理はしてたけど」

それはどうなんだよ。もったいなくないか。こういうのが経済の不況につながるのかね。わかんないけど。

「師匠師匠！！」

「どうした沢村！」

「こんなの見つけました！！」

沢村が持っていたのは巨大なニシキヘビ。ってこんなところになんでいるんだよ！

「って、危ない！！」

「大丈夫ですよ、こいつ人懐っこいんで」

いや、そうじゃない。そういう問題じゃない。問題なのは女の子がそんな蛇を持ってよろこんでいるということだ。普通の反応は嫌がるだろ。なのに抱きかかえてるよ。

「よし、沢村、それはわかっただがとりあえずは野生に返してあげよう。そっちの方は幸せだ」

「そうですね。師匠が言うのなら」

沢村がニシキヘビを離す。すぐにニシキヘビは茂みの中に入った。
いった。

「また、遊ぼうな〜!!」

「……………さて、沢村」

「はい、何でしょう師匠!!」

「僕はお前に強制するわけではないがそういうことは人前ではやめておけ」

「そういうこと?」

「蛇とかを素手で捕まえるとか抱きかかえるとか」

「なんですか?」

なんでって……………そういうわけてもな。答えようがないか? さて、なんて答えよう。

「あまり女の子らしくないから」

「そ、そうですね?」

「うん、普通蛇とか怖がる」

「え、じゃああれは?」

沢村が指した方を見ると莉子が蛇と戯れていた。

「あれは気にするな」

「? 師匠が言うなら」

幼馴染が蛇と戯れている姿なんか見たくなかったよ。やはり莉子は普通じゃないな。

「本当に普通じゃないわね」

「お前が普通で感覚で助かったよ佐藤」

「アンタも十分普通じゃないと思うけどね」

まあ、気合いで強化ガラス砕いたりするからな。少し普通から外れてる程度だと僕は自覚している。

「あと、鈍感さね」

「僕が鈍感？」

そんなわけないと思うけど。

「ええ、十分鈍感と思うわよ」

「そうか？」

「ええそうよ」

佐藤が言うからには僕は鈍感らしい。そういえば莉子にも言われた気がするな。いつだったか忘れたけど。そんなに僕は鈍感かな？

「気づけない時点で相当な鈍感よ」

「そういうわないでくれ以外にぐさってくる」

結構心に響くんだよ。うん。

「それなら何とかしなさい」

「なんとかなればいいんだけどな」

切実にそう願う。

「ん？ これは……………」

中宮会長が何かを見つけたようだ。

「何か見つけたんですか？」

「……………いや、見間違いだったようだ」

「そうですか」

「ああ、すまない」

そこから離れようとした瞬間地面が崩れた。

「な!?!」

中宮会長が落ちる!! そう思った瞬間僕は飛び込んでいた。そして中宮会長に抱きつき衝撃を与えないように背中から僕は落ちた。そこで意識を失った。失う前に思ったことはこれで二度目だなということだった。

・

・

・

「……………きる」

「うう」

「……………おきる」

声が聞こえる。そして徐々に体に感覚が戻ってきた。何か僕の上に乗っている。

「起きろ狩野」

「うう」

目をあける。……………ちょっと待とうか。どうしてこんなことに

なっている。

「ん？ どうした？」

「い、いえ」

どうしてあなたは僕のマウントを取っているんでしょうか。そう聞いてみると。

「ふむ、何もしなくても着地はできたのだがな、その前に君に抱きとめられてここまで落ちてきた」

ああ、つまり僕は余計なことをしたということですね。

「誰かに助けられるとははじめてのことだな。少しこの感覚を味わってみたかったからこの状態でした。」

「さいですか」

まあ、とりあえずはつきりしているというのは洞窟の中というところだけである。

第二十五話 洞窟迷い

「それで、とりあえずどいてくれませんか？」

「ん〜、それなのだが、もう少しこのままでいいか？」

それは結構危ないんですがね僕の一部分とかが反応しそうで。栗原達はどうかやら別荘に戻っているらしく声はかけてこないけど。これ見られたら結構まずいし。

「まあ、あまりいや、結構まずいんですけど」

「ほう、それは性的に興奮するということか？」

「言わないでください！！」

「ふむ、私は構わないぞ」

「え？」

ちょっとストップ。今、中宮会長はなんと言った。構わない。つまり、それはいいってことです。いやいや、そんなわけないだろう。

「冗談だ」

ほらね。ほら、やっぱり。別に期待したとかじゃないから、断じて違うから。

「ふむ、では、私はもう少し守られると言う感覚を味わうでしょう」

中宮会長が体を倒して僕の胸に顔を乗せる。

「ちょっと！？」

「ふふ、君の鼓動を感じるぞ。そうか、これは安心だな。これが守られる感覚なんだな」

言おうと思っていた言葉を飲み込んだ。中宮会長の顔を見たら言う気が失せたんだ。だって中宮会長のあんな安らかな顔は初めてみたから。

「はあ〜」

しかし、やばいな、いろいろと。中宮会長良い匂いだし。それに柔らかいものが当たってるし。いや、考えるな。今密着してるから不味い。

「鼓動が早くなったな。それに……堅くなってきた」

「ちよっ!?! 触らないでください!?!」

「どうした?」

明らかに楽しんでいる。

「ほらほら、こんなになってるぞ」

「あっ、うわ!?!」

「んふふ、可愛いな。よし、そのままじゃキツかろう。ほれほれ」

「わ! ひゃ! あ。って待て〜!?!」

・
・
・

「はあ、はあ、はあ」

なんとか中宮会長を引き剥がすことに成功した。え? どうやったか説明しろ? 何やったか言え? お前からこの小説消させる気が

？ 言えないし言いたくない。

「まったく残念だ」

本当に残念そうにしないでください。罪悪感が芽生えて来ますから。

「ふむ、まあ、次の機会もあるだろう」

ありませんしやらせません。というか普通逆なのでは？

「さて、どうやってでしょうか」

「助けを待ったほうがいいのでは？」

穴はある……………。

「無理ですね」

穴はふさがっていた。

「道があるみたいだな」

中宮会長が道を発見した。

「外に通じてるかもしれませんがね」

「ふむ、では行こうか」

「って、そう言っただけで腕を組んでくるんですか！！」

胸当たってるって！！

「なに、はぐれると危ないからな」

「それなら腕組む必要ありませんよね」

「うん、私がかくみたかったそれが理由だ」

「はあ」

「ふふ、では行こうか」

こんな状況なのに中宮会長はどこかはしゃいでいるようだった。

「どの位大きな洞窟なんでしょうね」

「恐らくこの島とほぼ同じと考えていいと思うぞ」

えらくでかいったことですね。しかし、出口あるのかな。なかったら不味いけど。

「心配するな。こういつ洞窟ならどこかに海と通じている場所があるはずだ」

最悪泳いで戻ることですか。右手包帯巻いてるからあまり泳ぎたくはない。とにかく出口を探すのが最優先だな。

「とりあえず泳がないでいい出口を探しましょう」

「そうだな」

とりあえず壁伝いに歩いて行く。だが、いつこうに出口は見えないしそれらしきものもない。

「まずいですね」

「そのようだな。しかし、ん？」

「どうかしましたか？」

「いや、誰かに見られていたような気がしてな」

「まさか、そんなわけないですよ」

伝説上のモンスターとかがいるわけないだろうし。こんな洞窟にいたらおかしいと思う。

「気のせいかもしれないな」

こちらとしては気のせいではよかったです。再び歩き出す。

「こっちだ」

分かれ道で中宮会長が右側を指した。

「どうしてですか？」

「水の音がした」

「本当ですか!？」

「ああ、行くぞ」

「はい」

中宮会長の感覚を頼りに水の音がすると言う場所目指して進む。しかし、僕には全く水の音は聞こえないのだが。中宮会長の凄さを再確認した。しばらく進むと僕の耳にも水の音が聞こえてきた。そして一際広い空間に出た。

「うわ〜」

「ほう、すごいな」

その空間は思わず声を上げてしまうほど綺麗なものだった。水中から反射して入ってくる光が水がゆれることに動き暗い洞窟の天井に絶えず違った色をつけている。光はまるでカーテンのようだ。

「ふむ、どうやら外に繋がっているようだな」

「光が入って来ているみたいですからね」

問題は光が入って来ているであろう穴が人が通れる位かってことと息がもつかってことだな。

「よし、私が見て来よう。君はここで待っていてくれ」

中宮会長はそう言うのとさっさと服を脱ぎ始めた。慌てて目を閉じる。

「うわっちょ！？ 脱ぐなら言うてください！！」

「ああ、すまない。だが君になら見られても見られてもいいと思っている」

こんな所でそんなこと言わないで下さい。どうなるか知りませんよ。衣擦れの音だけでもやばいのに。

「なるほど私をあられもない姿にひん剥いて犯し尽くすのかなかなかに外道だな」

「誰がそんなことするかあああー！！」

思わずタメ口で思いつきりツッコンでしまった。しないよ誰もそんなこと。

「冗談だ」

「冗談に聞こえませんかよ。どうしてみんな冗談に聞こえないことばかり言うんだよ。」

「どのみち、私は今あられもない姿だからな」
「……………」

ツッコまないツッコまないぞ。

「目を瞑っている君の為に解説すると裸でピーーをいじっている。音が聞こえるだろ？」

「そんなこと言っつなあああー!!」

もう叫ぶしかない。叫ばずにはいられない。理性を保つ為には。

「冗談だ」

だから冗談に聞こえないって言ってるでしょうが。本気で怒りますよ。

「頼みますから真面目にしてください。放送禁止用語禁止です」
「ややこしいな。では、行ってくる」

足音が遠ざかっていく。

「ああ、そうだ」

中宮会長が立ち止まり言った。

「これで最後になるかもしれないから言っておこう。君、生徒会に入らないか？」

「そんな……………最後って!!」

「どうなるかわからないからな。さて、でどうする？ 私は君が気

に入った。君に生徒会に入ってもらいたいと思っている」

「……………最後だなんて言わないで下さいよ。そしたら生徒会僕一人じゃないですか」

「ふっ、そうだな。おっと忘れていた」

「えっ!?!」

中宮会長により僕の口が塞がれた。中宮会長にキスされていた。

「……………!?!」

そしてすぐ離れる。

「さて、じゃあ、行ってくる」

混乱している僕をそのままに中宮会長は飛び込んで行った。

「な、なななな何でだよー!」

その答えは考えてもわからなかった。

・
・
・

しばらくして中宮会長が戻って来た。音がしたので目を瞑る。

「どうでした?」

「ああ、出口を見つけた。なんとかかなりそうだ」

「良かった」

これで心配事が一つ消えたな。あまり水には浸かりたくなかったけど。そんなことも言ってもらえない。衣擦れの音がして止まった。

服を来たみたいなので目を開ける。

「本当なら服は着ないほうがいいんだが君のためだな。さて、では行くでしょう。手を貸せ掴んどいてやろう」

「はい」

そこは素直に中宮会長の手を握る。はぐれたら死ぬしね。まだ、死にたくはない。

「では行くぞ」

「はい」

精一杯息を吸い水の中へと入っていた。

・
・
・
「ぷは!!」

海面から顔を出す。新鮮な空気を求めて息を繰り返す。

「ふう、なんとか出られたな」

「はい」

「さて、岸に行くか」

泳いで僕達は岸へと向かった。

第二十六話 夜は野獣が現れて？

何とか岸に無事にたどり着いた。きつい。正直に言ってきた。それなのに中宮会長は平然としている。

「お〜い！！」

木山が走ってきていた。

「二人ともよかったです」

「木山か。みんなは大丈夫だったのか？」

「はい、ふたりだけ落ちたですよ」

そっか、それならいいか。それにしてもよく木山ここがわかったな。

「記者の勘ですよ。それで、中宮会長との二人っきりはどうでした？」

いやらしい顔で聞いてきた。思い出されるのはあんなことやこんなことっていかんいかん。

「そんな場合じゃなかったよ」

「なんだ残念ですね。面白くないですよ」

「面白いはうがいいのかよ」

「はい」

即答したよ木山の奴。

「おゝい!!」

「あ、みんな来たみたいですよ」

木山の言うとおりにみんな来ていた。

「悠大丈夫!!」

「大丈夫だ。だから抱きつくな莉子!!」

「え〜」

え〜じゃないよ。え〜じゃ。

「たく、心配かけやがって」

「三上……………」

そうか、三上も心配してくれたのか。

「ああ、悪」

「そして、羨ましいんだよこのバカやろう!! 穴に落ちて死んでたら良かったんだ」

違ったいつも通りだ。

「暗い洞窟で中宮会長と2人つきり……………やったのか! やったのか!??」

「何もしてねえよ!! 勝手なこと言うなよ!!」

「くはっ!!」

一発殴っておく。これでうざいのが消えたはずだ。

「悠……………」

「ん？ どうした莉子？」
「本当にやってないの」

あの莉子さん。黒いオーラが出てるんですが？ 物凄く怖いんですが。

「やってないってか出来るかー！！！」

「そっか、悠だし大丈夫だね」

それはどういう意味だ莉子。

「そのままの意味」

「お前な」

まあ、その通りなんだけど。

「まあ、とりあえず別荘に戻ろうよ。ここじゃなんだし、二人はお風呂入ったほうがいいでしょ」

栗原の提案どおりにしたほうが得策だな。

「わかった。行こう」

別荘へと向かう。本当思い返すと僕散々な目にあってるなこのバカンス。誰かの作為を感じるのだが。

・
・
・

別荘で僕はゆっくりしていた。食事は栗原が作ってくれているし。僕はいまやることがない。

「それにしてもなんだろうな。誰かの作為を感じるのだが」
「作者^神じゃないですか？」

僕の呟きに木山がそんなことを言った。

「メタな発言はするなよ」
「しかし、誰かの作為なら作者^神以外考えられないですよ？」
「確かにそうなんだけど」

あの作者^神がそんなことするかね？ しそうなんだが一回でやめそうなんだよな。二回もやらないよそれだけは確実に言える。

「そうですね」
「たぶんな」

あくまで気がするだけだし。

「まあ、ただの不運とかありえますよ」
「それにしても誰かの作為を感じるんだよね」
「そうですね。まあ、気をつけるです」
「ああ、わかってる」

さてと、そろそろ栗原が夕食を作り終えるころだろうな。そう思っ
ってカウンターを見ると。

「ブツ！！？」

思わず噴出してしまった。

「ん？ どうした？」

僕の目の前には中宮会長がいた。だが、それだけなら嘔き出しはしない。問題があった中宮会長の格好に。

「な、何て格好してんですか！？」

中宮会長の格好はエプロン。そう、エプロンのみ。つまり裸エプロンという格好なのだ。それが料理していたのだ嘔き出さない方がおかしい。栗原はというとソファアに座ってくつろいでいた。

「おかしいか？」

「おかしいでしょう！！ 服はどうしたんですか！！」

「洗濯中でない。明日には届くはずだ。それまでないからなこれを着ている」

「いやいやいや。服ないから裸エプロンっておい。明らかにおかしいだろう。」

「何か問題でもあるか？」

「大有りです」

「どこがだ？」

「……………駄目だこりゃ。とりあえず退場願おう。」

「木山頼む」

「貸しーですよ」

「わかった」

木山が中宮会長を連れて行った。ふう、これで大丈夫だ。被害者

は三上一人だけだし。死因鼻血による出血死。

「よくねえよ!!」

「チツ、生きてたのかよ」

「生きてるよ!!」

まあ、いいや。さてと、栗原が残りをやってくれたようで夕食は完成したようだ。

「じゃあ、食べるとしようか」

夕食をおいしくいただいたあと僕は疲労により部屋に戻り眠ってしまった。

・
・
・
「ん？」

なんだ。誰かがいるような気配が。この感じ前にもあったような。

「
……………」

うん、侵入者がいた。

「……………」
莉子、なにやってるんだ」

さて、目の前には下着姿の莉子がいた。律儀に鍵はかけられている上に

「夜這い」

「……………」

ああ、もう、コイツはなんでいつもいつもこうなんだよ。

「とりあえず　おい」

「ん、なに？」

莉子め、しらばっくれるな。僕もさつき気がついたんだが今完全に拘束されている。おいおい、前回と違ってかなり用意周到じゃねえか。

「これはまずせ」

手を動かして縄と示す。

「いや」

即答したよコイツ。てか、このままでは大変なことになる。さて、どうする。運良く誰かが来る……………はないな。そんな小説みたいないことはないな絶対に。

「さて」

本格的にやばいぞこれ。

莉子の手が生き物のように俺の体の上を這う。なんとも言えない感覚が脳を刺激する。

「ふふふ、どう？　気持ちいい？」

「ふざけるなやめ　むぐ!?!」

莉子に口付けされてふさがれた。無理矢理莉子の舌が中に入ってくる。

「んんんんん!?!」

「んっんっん」

そして何かを流し込まれた。

「むぐ!?!」

「ぷは〜。ふっふっふ〜」

「莉子なに飲ませた!?!」

なんか知らんが体の感覚がなくなってきた。というか体が痺れて動かん。こいつ何飲ませやがった!?!

「とある伝手を使って手に入れた痺れ薬」

なんだその伝手って!　てか、マジやばい。

「さて、じゃ、動けなくなっただとこでいくよ〜」

莉子が僕のズボンとシャツを脱がせる。動けない僕は抵抗すら出さない。

「ふふふ〜」

莉子が笑っている。誰でもいいから誰か入ってきてくれ。じゃな
いと大変なことになる。作者神でもいい。

(よんだ?)

作者^神早く何とかしろ。

(といつてもねほら、お客さん期待してると思つんだよ)

何をだよ!

(だからさ、一発やつちやえはいいいじゃないの。弊害はないんだし)

気楽に言つなよ!! あるよ。弊害めつちやあるよ!!

「悠?」

やばい、変な妄想としゃべってた。いかん現実逃避は死に繋がる。

「大丈夫? まあ、大丈夫じゃなくてもやるけど」

莉子が僕の体にべったりと張り付く。そして、胸を舐める。

「うっ」

「ふふふ、良い反応だね」

舐め続ける莉子。その感覚は僕の脳を刺激して反応させる。

「ふふ、悠のここ大きくなってよ」

莉子は僕のを弄る。

「くあっ
」

「ふふふ
」

もう、どうしようもない。そう、僕は悟った。だから、僕は意識を手放した。

第二十六話 夜は野獣が現れて？（後書き）

やばい、ストックが切れてきた。というか切れた。これからは不定期更新になるかも。なるべく、ならないようにがんばるけど。もしものときは申し訳ありません。

第二十七話 台風は突然に

目を覚ますと莉子はいなかった。いつの間にか服も着ている。体の感覚も正常だった。そして違和感もない。

「夢だったのか？」

しかし、あんなリアルな夢があるのだろうか。いや、夢ならそれで良い。あんなことが現実であつたら困る。

「夢で助かった」

「何が助かったのかしら」

「うお!？」

部屋の扉のところに佐藤が立っていた。

「急に入ってくるなよ」

「いいじゃない。それで何が助かったの？」

「なんでもない」

「言えるはずもないし。」

「?」

佐藤が不思議そうな顔をする。まあ、当たり前だけど。これだけは言えないしな本当に。夢なら夢で済ませたいし。

「まあ、いいわ。台風が接近してるみたいだから窓とか閉めといったほうがいいわよ」

「そうなのか」

確かに曇り空で今にも雨が降り出しそうだ。風も強いみたいだし。

「わかった。わざわざすまん」

「別にいいわよ」

佐藤が部屋を出て行った。さて、じゃあ、言われたとおり窓を閉めるとしようかな。

「よしと。本当に雨振り出したな」

窓を閉めている間に雨が降り出していた。風もありまさに台風といった感じだ。

「今日は別荘から出ないほうが良いな」

まあ、この別荘色々あるみたいだから外に出ないでも遊べるらしいからいいんだけど。とにかく下に行くか。

「あ、悠おっはよ〜」

「あ、ああ、おはよう莉子」

いきなりエンカウト。しかし、莉子におかしな様子はない。うん、夢だったようだな。

「ん？ どうしたの？ 何かあったの？」

「いや、なんでもない。夢だったようだ」

「ふ〜ん。あ、そうだ私も夢見たよ」

さて、小説とかではお約束な気がする。

「ど、どんな夢なんだ？」

「うーん、忘れた」

おい。まあ、いいか。

「ふー、昨日は疲れたです」

木山が疲れたように出てきた。

「どうしたんだ？」

「いや、昨日は　　ってうひゃああー!？」

「うわ!？」

ビックリした。いきなり木山が大声出すとは。

「なんだよ」

「い、いや、なんでもないですよ」

「そうか？」

それにしても疲れてるように見えるんだが。

「やあ、おはよう」

「ああ、おはよう栗原」

なにやらやけにニコニコしている栗原が朝食を作っている。

「なんか機嫌よさそうだな」

「んー、まあ、色々あってねえー。あ、そうそう、台風は明日まで

には遠ざかるみたいだからきちんと変えられるから」
「そうかそれはよかった」

まあ、ここの設備ならいくらでも滞在は出来るんだろっけどな。
まあ、あんな夢が現実になるかもしれないからあまり長くいたくないんだが。

「よう、三上」
「よう悠」

三上はテレビの天気予報のアナウンサーを食い入るように見つめながら言った。

「何見てんだよ」
「見てわからないか。桃子さんだ」
「誰だそりゃ」

「ってああ、今写ってる天気予報のアナウンサーね。馬鹿らしい。」

「お前、今、馬鹿らしいと思ったな」

「こいつ読心術でも使えるのかよ。なんでわかるんだよ。」

「思ったが」

「貴様は今全国の桃子さんファンを敵に回した!」

いきなり立ち上がり指差してくる三上。

「なんだよいきなり」

「いいか、貴様はやっちゃいけないことをやっちゃまったんだよ」

そこまで大げさなことなねまったく。

「いいか、桃子さんはなとにかく素晴らしいんだよ!!!」

「いや、説明されなくちゃわからないし」

素晴らしいだけじゃどこが素晴らしいのかわからんだろうが。

「貴様みたいな奴に説明する必要はない。無駄だからだ!!」

あつそう。じゃあ、もう、いいよまったく。相変わらず三上は良くわからない。

「まあ、どうしても知りたいのならこれをやるう」

意味不明なパンフレットを渡された。速攻でゴミ箱行きだな。すぐにそれをゴミ箱に持って行った。面倒な三上に見つからないようにだ。見つかったら何されるかわからない。

「あ、おはようございます中宮会長」

中宮会長がリビングに入ってきた。

「ああ、おはよう。昨日は大変だったな」

「まあ、そうですねですけど生きてるんですから良いですよ」

「それもそうか。さて、栗原君。私も手伝おう」

「ありがとうございます生徒会長。あ、そうだ悠、沢村さん呼んできて外走ってると思うから」

「外って、おいおい。わかった呼んでくる」

栗原と中宮会長が朝食の用意をする。てきぱきと料理が完成していく。その間に僕は沢村を呼びに行くことに。その途中で佐藤に会った。

「何してんだこんなところで？」

「沢村さん呼びに行くのよ。確か走ってたでしょ。あんたは？」

「お前もか。僕も呼びに行くところだよ」

「そう。そういえばあんた沢村さんに師匠って呼ばれてたわよね。もしかしてこんな雨の中は走るようにいったのかしら」

はつきりと佐藤の視線にははつきりと軽蔑が含まれていた。

「そんなわけないだろ。沢村が勝手にやってるんだよ。走ってる」と自体さつき栗原に聞いたんだからな」

「そう、てつきりあんたが走らせてるのかと思ったわ」

そうでしょうね。思いつきり軽蔑の視線が混じってましたし。

「人聞きの悪いこと言うなよ。ったく」

外に出る。雨と風が酷い。浜の方を見ると沢村が走っていた。

「お〜い沢村〜!!」

僕達に気がついたのか走ってきた。

「おはようございます師匠」

「おはよう沢村」

「佐藤さんもおはようございます」

「ええ、おはよう」

沢村はしぶ濡れだった。

「なんでこんな中で走ってるんだよ」

「日課ですから!!」

日課でも雨の日はやめようよ。

「日課でも雨の日はやめてくれ」

「でも……………」

「でもないわよ。それで倒れられたらこっちが迷惑なのよ」

佐藤それは言いすぎじゃないか？

「は。はい」

さすがの沢村も佐藤には逆らえないのかね。とりあえずこれで雨の日は走らないでくれるだろうな。まあ、走っててもいいんだけど僕が知らないところならだけど。

「さて、じゃあ、朝食にしますか」

そろそろできてるだろうし。

「そうね」

「そうだ〜!!」

「っと、沢村お前はとりあえずシャワーでも浴びて来い」

風邪ひくからな。沢村を風呂場に押し込んだあと僕と佐藤はリビングにもどった。

第二十八話 地下にトラウマを感じる今日この頃

朝食を済ましたあと今日どうするかを話し合うことにした。当然台風の本っ只中で外は風と雨で出ることには出来ない。そのためやることは限られている。

「それでどうするんだ栗原？」

別荘の持ち主である栗原に聞く。

「ん？ じゃあ、地下に行こうか」

地下か、この二三日であまり言い思い出ないんだけどな。閉じ込められたり閉じ込められたりで酷い目にしか遭ってないから。というかこのまま言ってまた閉じ込められるとかないな。

「大丈夫大丈夫。きちんとしてあるから」

栗原のその言葉はもう使用できないようになってるんだけどな。もう、二回も閉じ込められてるし。

「大丈夫だつて。さあ、行こう」

サウナとは違う入り口から地下へと入る。この島って割りとファンタジーな構造をしていると思う。

地下は天井が高く閉塞感はなく。ビリヤード台やスロット、マシン卓、ボーリングレーンなど様々な娯楽設備があった。

「どっ？」
「すごいな」

ありとあらゆる娯楽設備が揃ってるってのはすごいと思う。とうかがゲーセンだなこりやって感じのスペースまである。

「でしょ頑張ったんだよ」

がんばったのは栗原本人ではなくて業者さんだろうけどな。

「全部自由にして良いのか？」
「OKだよ」

じゃあ、遊びましようか。遊んで地下ってことを忘れよう。うん、そうしよう。地下だと不安になるとかじゃないからな。絶対に違うからな。ちよつと怖いかな？なんとかじゃないからな。

「なにしてんのよ、あんた」
「は！？ い、いや、何でもない」

危ない危ない、変なこと考えるとこころだった。

「よし、早く行こう悠！！」
「ちよつとまで、引つ張るな莉子！！」

莉子に引つ張られ連れて行かれる。

「あはははは、仲良いね」
「笑うな栗原！ それと離せ莉子」
「ねえ、ねえ」

聞いちゃいねえ。

「アレとって」

「あ？」

いきなりクレーンゲーム。それも奥にあって大きな何かよくわからないファンシーな人形。普通に取れないレベル。

「無理」

「え、取ってほしいんだけど」

「無理。明らかに無理。というかほしいなら栗原に言え」

ここの所有者は栗原だからな。あいつに言ったらもらえるだろう。物凄くクレーンゲームをバカにしているが。

「それじゃ意味ないでしょ！ どうせ、ただなんだからお願い」
「はあ」

この流れだとたぶん莉子は僕があの人形を取るまで離さないだろうな。仕方ない、何とかやってみるか

。どうしても無理なときは、栗原に頼もう。てか、なんでこんなにクレーンゲーム難易度高いんだよ。

「わかったやってみるよ」

「やった。じゃ、がんばってね」

莉子はそそくさどこか別のゲームのところに行った。あいつ、僕に押し付けやがった。

「はあ」

「お人好しね」

「ん？」

振り向くと佐藤がジト目で僕に言った。

「何でもないわよ。遊びたいなら、さっさとしたら」

「お前に言われなくてもやるよ」

まあ、必死にやっても取れるかどうかわからんがな。栗原所有のゲームなため金はいらない。つまり、取れるまでやれるということ。

「がんばるとしますか」

ああ、本当に佐藤にお人好しと言われても否定できないな。本当に。

・
・
・
「……………」

十分、たった十分挑戦しただけで絶望の淵、地獄の底が垣間見えた気がした。無理だろ、これ。

「無理なんじゃないの？」

佐藤が声をかけてくる。言わないでくれ僕もその結論に達したくなくて言わなかったのに。しかし、本当にどうする。無理だ。百回以上やって数ミリしか動かないとかがありえない。本当にこれ取れるようになってるのか。気になって栗原に確かめてみたら取れるって

いうし。必勝法みたいなのも聞いたが。

しかし、現実には甘くなくそんなもの焼け石に水であった。何が必勝法だよ。他のクレーンゲームでは必勝法だったけど、これだけは無理だ。これ取れる奴いたら神だろ。

「取れたわよ」

「は？」

振り返ると佐藤があのでファンシーな人形を持っていた。えっと、僕が考えている間に何があった。このファンシーな人形があるってことはなんですか、取ったってことですか？

「え、取ったの？」

あまりの驚きでわかりきっていることを聞いてしまった。見ればわかることだが一回でだよな。考え込んでいたとはいえさほど時間は経っていない。

「結構簡単だったわよ。一人でゲーセンよく行くし」

それはちよつと寂しくないか。でもまあ、佐藤のおかげで何とか取れたな。

「サンキュー助かった」

「別に、あんたのためじゃないわよ」

「それでも、助かったのは違いないからな。あとで何か礼するよ」
「そっ」

さてじゃあ、莉子に渡しに行くかな。

しかし、僕地下って大抵酷い目にあってるな。トラウマとかにな

らないといけどな。

第二十九話 ゲームを楽しめ！！

佐藤が取ってくれたファンシーな人形を莉子に渡す。それを持ってきたとき莉子はかなり驚いた顔をしていた。取れるとまるで思っていないかったように見える。

「え、取れたの？」

おい、お前取れないこと前提で行ったのか。取れないと思っただのかよ。まあ、僕は取れなかったけど。つまり、なんですか、お前は僕にあそこで絶望してると言ったのか。殺意が沸いた。それを莉子が感じ取ったのか乾いた笑みを漏らす。

「あは、あはは、で、でも、悠なら取れると信じてたし」
「……………」

明らかに嘘だろ。お前こっち向けよ。明後日の方向見てんじゃねえよ。

「い、ごめなさい」

黙ったまま睨んでいると莉子が謝った。きちんと謝れるところが莉子のいいところだと思う。けどさ、謝るなら最初から、やらせなければよかったと、僕は思うんだよ。その人たちも思わないかい？ 思うよな。思うと言え。

「ゆ、悠？」

恐る恐る莉子が僕の様子を伺う。さて、どうするか。このまま、

怒ってもいいんだが、それじゃ、ワンパターンだ。さて、どうしようか。

「……………さて、黒江さん、ここにいいものがある」

取り出したのは莉子の苦手なものだ。こいつが苦手なものとか超少ない。だが、一個だけ、昔から苦手なものを僕は知っていた。そう、それは……………。

「きゃあああああああ！！」

莉子の悲鳴が響き渡った。

・
・
・

「ぐすっ、もうしません、ごめんなさい」

「もう、二度としないな」

「はい」

「じゃあ、もう良いぞ」

さて、空白の時間に何があったのか、それは神望み知る。一つ言えることは、莉子が従順になった程度だ。まあ、たぶん二、三時間でもとに戻ると思っけど。

「……………ふん」

あれ、何か佐藤が軽蔑した目で見ている気がするんだが……………気のせいだよな。たぶん、気のせいだよな。

「何か言いたいことがあるなら言ってくれないか」

「別に、何も無いわよ」

だから、その割にはなんか態度がおかしい気がするんだよ。

「そうか？」

「そうよ」

「まあ、それならいいが」

さてと、なにするかな。色々ありすぎて迷うな。

「それなら、これでもしてみないか？」

中宮会長がやってきてとあるゲームを薦めてきた。それはよくある、銃でゾンビを倒していくゲームだ。普通のゲームセンターではかなりの腕前がなければ、クリアはほぼ出来ない類の奴だ。しかも、クリアまでやるとかなりの金を消費することになる。だが、今回は栗原所有なので、金はかからない、システムはまったく同じなのでかなりお得。

「いいですね。やりましょう」

この手のゲームのクリアって見たことないから楽しみだ。さてと、日頃のストレス発散もかねて、やりますか。

「さて、じゃあ、はじめよう。まずは、武器を選ぶみたいだな」

武器か、何にしよう。てか、中宮会長は刀か。なんで、刀みたいなコントローラが？ これもしかして、新製品か？ 確かにそうだな、見たことないし。武器ごとにコントローラがあるのか。金がかかっている。

「じゃあ、僕はこれで」

バレットM95。ボルトアクション式のアンチ・マテリアル・ライフルだ。なんで、これ選んだかって？ 作者が勝手にやった。作者がボルトアクション好きで、その中でもバレットM95が途轍もなくカッコいいからだった。だから、使いたかったんだと。こんなところでそんな趣味を出さないでくれ、僕はアサルトライフルとか、ショットガンの方がよかったのに。でもまあ、狙撃とか好きだけど。こういうゲームは違うのでは。

「始まるぞ」

とか、思いつつゲーム開始。中宮会長と二人で、迫り来るゾンビを倒していった。

・
・
・

そして、ゲーム画面にはクリアの文字が。

「ふう、終わったな」

「そうですね」

クリア時間20分。主に中宮会長の腕です。僕はそこら辺で狙撃してただけだ。一体も僕に近づいてこなかったよ。中宮会長が倒してたんだよ。

「お〜い、みんな〜」

なんだ、栗原が呼んでる。とりあえず行くか。行ってみると、そ

ここにはなにやら全員分のベッドのような装置が置いてあった。

「どうしたんだ栗原」

「いや、ねえ、これから実験をやるんだよ」

「実験？」

「そうそう、VRゲームのね」

VRだって！？ それって、まだ、開発中の技術だろ。どうしてこんなところに？

そうだ、わからない奴に行っておくとVRとはバーチャルリアリティのこと。つまり、VRゲームとはバーチャルでのゲームだ。む、ちよっと説明し難いな。まあ、自由に遊べる夢みたいなものだ。VRゲームに関しては作者の別の小説、グローリアオンラインを読んであつてさ。宣伝するなよ。

「うん、うちと、南雲財閥でね、開発中なんだよ。で、これはその試作実験機ってわけ、ちゃんと製作者も来てるよ。ほら」

栗原が指し示す。そこには、ゆるゆるに服を着た、女性がいた。かなり美人だ。ウェーブのかかった長い黒髪、眠そうな緑がかった瞳。でも、どこか、残念そうな気がするけど。

「ん？ あゝ、どうも〜狭間由宇です〜」

「あ、どうも、僕は……」

「ああ、いいよ〜みんなの名前知ってるから〜」

なぜ？ なぜ知っている。栗原が教えたのか？ そうだな、栗原だろう。

「うん、僕が教えておいたんだよ」

「じゃあ、早速はじめよう。じゃあ、寝て」

「待ってくれないか？ まだ、我々は十分に説明を受けていない」

中宮会長が言う。

「中で説明する、こっちじゃ面倒くさい」

おい、それで良いのか。なんで、こんな人が製作者なんだよ。あ、そうか、残念そうな感じはこれか。

「はいはい、寝る、寝る」

問答無用で眠らされ、そして、装置が始動する。それと同時に僕は意識が遠のき、そしてブラックアウトした。

第三十話 開戦

ブラックアウトした意識が覚醒する。そこは幾何学模様が浮かぶ謎の空間だった。床も壁もなく、ただ変な空間に僕は浮いていた。気を抜けば酔う、絶対これ、吐くよ。うへへ何かだんだん気持ち悪くなる空間だなこじ。

「それより、みんなはどこに……」

探す必要なかったな。みんな居た。ただ、栗原と、木山だけがいなかった。どういうことだ？

『超絶美少女木山ちゃんは、こんな珍しい現場を見るチャンスはこじかないと現実にいるですよ』

どこからともなく木山の声が聞こえて来た。なんだ、珍しい現場つて。まあ、いいか、とりあえず外にいるのはわかった。たぶん栗原と一緒にだな。二人が外か………何も企んでなければいいけど。

『ほい、それじゃ、説明するよ』

やはりどこからともなく、ゆるい狭間さんの声が聞こえてきた。

『そこは、まだ、何もインストールしてない、空間ね。これから、ゲームをインストールするから、ジャンルの言えばFPSもまあ、どのみちFPSになるんだけど』

わからない人のために解説を、FPSとはファーストパーソン・シューティングゲームのこと。シューティングゲームの一種で、主

人公の視点でゲーム中の世界を自由に移動でき、武器もしくは素手などを用いて戦うアクションゲームのことだ。

この面子でやるの？ 莉子とか、中宮会長とか、沢村とかが圧勝しそうなんだけど。

「悠」

三上が肩に手を置いて話しかけてきた。

「俺と組もうぜ」

物凄い切実な願いが言葉に込められていた。確かに、一人じゃあの三人には勝てないだろうからな。

「わかった。ただし、邪魔するなよ」

「わかってるって」

そうしているうちに周りの風景が変わる。それに伴い、僕達の姿も軍服に変わった。僕は三上と一緒だったが、莉子や佐藤たちは、バラけたようだった。狭間さん、もしかして、僕達の会話聞いてたのか？

『じゃあ、好きにやってね〜NPCもいるから寂しくないし〜』

確かに周りにはたくさんの方がいた。NPCとは、到底思えないほど感情豊かだった。すごいな。あの人が作ったのだろうか？ まあ、弊害としては、リアルすぎて超怖いということくらいか。しかし、すごいなこれ。もっと小型化とか出来たら、すごいだろうな。

『そんなわけで〜戦争開始〜、あ〜女子チームと男子チームにした

からね。人数あわなかったから、強いNPCいれてるから勘弁してね。』

通信終了。はい、というわけで、あと十五分で戦争開始だそう。軍曹に聞いた話によれば。しかし、本当にこっち、不利だな。うん、勝てる気がしないな。でもやるだけやろう。作戦は立てておこう。

「よし、三上少しこっち来い」

「お、なんだ？」

「これを体に巻け。そしたら、勝てる」

「わかったぜ!!!」

三上が僕の渡したものをいそいそと体に巻いていく。何かも確認せずに馬鹿な奴だ。

「って、これC4じゃねえか!!! 俺に突撃しろ!?!」

気づいたか。まあ、そりゃそうか。これで気がつかなかったらもうおしまいだからな。

「そうだ」

それぐらいしか三上の使いどころはない。みんなもそう思うよな。思う人は感想に書き込んでくれ。もっと酷い目にあわせるから。とまあ、冗談はさておき。こいつが突撃するのは決定だとしても、ほかはどうしようか。

「俺が突撃するの決定かよ!!!」

無視だ。しかし、どうしようか。とりあえず、僕は狙撃に徹した

い。戦場のど真ん中に放り出されたら死ぬ。僕は戦争を知らない日本人だからな。まあ、ゲームだから、そうはないだろうけど。銃の使い方もなんかわかるし。なんでだろう？

「よし、準備完了だな」

完全に狙撃兵の格好。何かすごいな。そして、僕のとおりにはC4達磨の三上。これなら、誰か一人くらいは道連れに出来るだろう。

「俺の扱い酷くない!？」

なんだ、空耳が聞こえるな。まあ、虫だろう。無視しよう。

「さて、行くか」

「無視するなよ!」

「うるさいぞ、さっさと突撃しやがれ」

まったく、それしか存在意義がないくせに。

「これ、怒ってもいいよな？」

「ぐだぐだ言っただけで行け」

さて、戦争の始まりだ。

第三十話 開戦（後書き）

三上君は怒っていいと思います。

というか、まだ、無人島編が終わらない。どうしよう。はじめは三話程度だったはずなのに。

しかも、まだまだ、夏は続く。現実では、既に秋。季節感ゼロ。でも、諦めません。完結するまでは。

そうだろうな、死んだ痛みがあつたら、シヨック死しかねん。その辺の配慮なのだろう。しかし、普通に問題ない分の痛みはありそうだな。嫌だな、僕こういうの一番嫌なんだけど。

「そう思ってるわりには、楽しそうだな」

「勝手に人の心を読むな」

まあ、楽しいのは本当だな。こういう機会が早々あるとは思えないし。それに、あいつらに勝てる力も知れないからな。楽しくもなるう。

「さて、じゃ」

「行こうぜ」

三上と共に僕は戦場に走った。正確に言えば僕は狙撃ポイントへ。三上はそのまま敵陣に仲間と共に突撃。降りかかる火の粉は僕が狙撃する。うん、完璧だな。さてと、あとは三上を撃てば……。

「なに俺を狙ってたんだよ……！」

「チッ」

勘の良い奴め。まあ、いい、三上を狙うことはいつでも出来る。とにかく、今は集中だな。まだ、あいつらは出てきてないが、今のうちに敵は減らせるだけ減らしておこう。まあ、倒しても復活するんだけど。

勝敗は、敵陣を制圧したほうの勝ちだし。今のうちに進めるだけ進んでおこう。

あ、また三上やられやがった。

「それにしてもあいつらは　いた……………」

物凄い爆発が巻き起こっていた。そこには、莉子と中宮会長と沢村が立っていた。佐藤はたぶん本陣だろうな。こういうことにあまり積極的に参加しなさそうだからな。

「さて……どうするかな」

まともによっても勝てなさそうだ。だが、戦略が戦術に負けちゃいかんでしょ。っとこれじゃ某零のセリフだな。

「じゃあ、やるとしようか」

持っていたスイッチを押す。莉子たちのいるほうで爆発が起きる。仕掛けておいた爆弾だ。さて、これで、倒れてくれればいいだが。莉子たちが爆風の中から無傷で出てきた。

「やっぱり、そう簡単にはいかないな」

そう言いながら無線機に手を伸ばす。

「三上、そろそろお前の出番だ」

『OK、準備できてるぜ。どうぞ』

「よし、作戦通り行くぞ」

『了解』

三上との無線をいったん切る。そして、軍曹に繋ぐ。NPCとは思えないほど感情豊かなんだよな。

『何でしょう。大佐殿』

無線からは某フルメタルでパニックの主人公の声が聞こえる。ビジュアルまでそうだったからな。性能もだけど。狭間さんの趣味だろうか。まあ、役に立つから良いけど。探したら蛇の人もいそうだな。まあ、こんな前線にはいないだろうけど。

「作戦を伝える。敵のあの女三人は無視。三上に任せ、全員は本陣を指せ」

『は！ 了解しました！！』

さて、どうなる。僕達の部隊は莉子たちを迂回して敵本陣を目指し始めた。ただし、三上だけ残っている。三上は一人、莉子たち三人の目の前に立った。

「たった一人で来るとはな。一人で私たちに勝てると思っているのか？」

中宮会長が言う。ショットガンやライフルを装備して、近遠距離に対応している。アサルトライフルもあるから、バランスがよさそうだな。まあ、本当にバランスがいいのかはわからないが。確かに普通なら、勝てるとは思わないな。普通なら。

「あははは！！ 無理無理、私たちに勝てるわけないよ」

莉子の奴乗ってるな。あいつが持っているマシンガンだよ。質よりに量で来たな。しかも、あれ、反動とか無視して、両手で撃つ気だ。撃たれたら近づきようがない。だが、うちの三上を舐めるなよ。そんじょそこらの馬鹿とは格が違うからな。

『それでも馬鹿なの！？』

人の心を勝手に読むな。だから、馬鹿なんだ。

『それなら、心読める前提で、心の中で会話するなよ!』

さてと、沢村は普通だな。アイツは根っからの武術家だからな、銃らしきものは装備してないが、その分身軽だし。このゲーム、近接ってかなり強いからな。あの拳にちょっとでも触れたら一撃死らしい。どうして、そんな設定になっているのやら。従来のゲームでもそうみたいだし。

「さて、これからだ」

『無視するなー!』

「うるさい」

無線を一方的に切る。まったく、これから本番って時に。って、ちよっとまで、莉子はどこ行った。

すぐにバレットM95のスコープを覗いて、探してみる。いた、莉子は、僕たちの味方に狙いをつけたのか突撃しているところだった。とりあえず止めないと味方に損害が出る。

「さて、僕の仕事だな。距離にして1500ってところだな」

バレットM95のスコープを覗きながら言う。狙撃などやったことはないが、これはゲームだ。風とかの心配はないみたいだし。大丈夫だろう。よく狙い、引き金を引いた。

「え?、きゃ!?!」

命中。きちんと足に当てたが、さすがはアンチマテリアルライフ。足に当てただけで一発死。すげえ、強い。これ選んで、正解だ

な。てか、これ、作者の趣味か。まあ、これだけは感謝だな。つと、とりあえず移動だ、移動。既に敵に場所はばれたと思っておいたほうがいい。用意していた次の拠点へ。

三上が中宮会長とかをひきつけてくれたおかげで楽に移動ができた。まあ、その間に三上は十三回殺されてたけど。さて、次の指示をだすか。

第三十一話 戦争はいけないと思います（後書き）

いつの間にかPV1000000越え!?

こんな作品を読んでくださりありがとうございます。

読み返してみれば、最初のほうはまったくダメダメな感じでした。

少しへこみます。

修正が必要なところもありましたし。いずれ、時間が取れたときにします。

これからもがんばりたいと思いますので、変わらぬ応援をよろしく
お願いします。

第三十二話 暇暇な佐藤（前書き）

佐藤視点です。

第三十二話 暇暇な佐藤

「暇ね」

私ってこういうのあまり好きじゃないから、ここにいて言うたら。あの三人それでいいよって言って、嬉々として、行っちゃうし。

「はあ、暇」

前は、これくらいのことどうにでもなったのに。二年になってから、暇な時間を持て余すようになった。理由はわかってる。あいつだ。あのお人好し。あいつが関わってきてから、暇な時間なんて、どうしてかなくなったのよね。

「つまり、あいつが悪いわけね。あゝ何か、むしゃくしゃしてきた」

どうして、あいつのこと考えるとこう、むしゃくしゃするのかしら。どこかに良いストレス発散になるものないかしら。とりあえず、どこかに行ってみようかしら。まだ、あまり歩いてないし。バーチャルリアリティなんて、そうそう、体験できるとは思えないし。

「思ったら早速行動よね」

立ち上がりキャンプを出る。戦場の方には向かわずに逆方向にある森へと入っていく。本当にここがゲームの世界とは思えない。それほどリアル。

「本当にリアルよね」

でも、ここってゲームなのよね。現実じゃない。ということとは、あの昔あった映画みたいなのが出来ないのかしら。壁走ったりとか。どうなのかしら？

「まあ、試す気ないけど」

そんなことして、無駄に怪我してもどうにもならないし。てきとつに歩いていると、湖に出た。なんで、こんな戦場にあるのかしら。

「でも、綺麗ね」

湖に近づいて、靴を脱いで、足を水につける。

「冷たっ!!」

思わず足を引っ込める。まさか、ゲームの水がこんなに冷たいとは思わなかった。この水も本物みたい。

今度は、ゆっくりつけてみよう。そつと、最初に少し、足をつけて水の冷たさに慣らしながらゆっくりと全て足をつける。水の冷たさが心地よい。

「ははっ!!」

自然と笑みがこぼれる。なんだろう、こんなに穏やかな気分は久しぶりな気がする。

「はあ〜」

伸びをする。なんだか、そうすることで、現実のしがらみとかが落ちそうだった。うん、良い気分。

「このまま泳ごうかしら」

ダメダメ、どこで、誰が見てるかわからないし。足だけで我慢しよう。それに、頼めばあの狭間って人はいつでも用意してくれそうだし。その時に頼もう。

「ふう、それにしてもいいところ」

こうしても誰にも何も言われないっていいわね。あいつがいればまた、何か言ってくるんだろうけど。って、なんで、また、私あいつのこと考えてんのよ。こんなときくらいあいつのことなんて忘れないと。いっつも関わってくるんだから。こっちはたまったもんじゃないわよ。

え？ それなら、嫌だとはつきり言えって？ それじゃ、私が一方的に悪者になりそうじゃない。これ以上評判は落とすたくないわよ。まあ、評判がいいほうじゃないけどさ。だからよ。あいつと関わってるのはそれだけの理由よ。勘違いしないでよね！！

「って、私は誰に説明してんのかしら。あくやだやだ、変なのがうつったのかしら」

でも、不思議と嫌な感じはしなかった。むしろその逆で、心地がいいくらいだった。これも、あいつのおかげ？ ううん、きつと、この湖のおかげね。そうよ、きつと……。

第三十三話 作戦開始

戦況は互角といったところだった。先行させたこちらの部隊はど
うやら、敵の妨害にあつていているようだった。あちらの大將は中宮会
長だ。こちらの策を読んできている。さすが生徒会長。伊達じゃな
いな。莉子も沢村も手強いし。まあ、三上が意外に役に立ってるお
かげで、あの二人は抑えられている。

「本当に意外だ」

「もつと素直に褒めろよ!!」

「無駄口を叩く暇があるのならさっさと倒せ」

アイツの通信機だけ壊してやろうか。それはあとでいいか。とり
あえずは、あの三人を封殺した上で、敵本陣を狙うのがベストなん
だが、まあ、そうはいかないみたいだし。

「さてと、A班は、そのまま前進しろ。敵をなるべくひきつけろ、
お前たちは囷だ」

「了解！」

「次、B班C班は、分散しつつ敵を突破して、本陣を目指せ」
「了解！」

さて、これでどうなる。完全に部隊を分散させて、他方向から、
同時に攻める。さすがに中宮会長も一人では対処しきれないはず。
莉子や、沢村は三上が何とか抑えるだろうし。佐藤はどうか行つて
るみたいだし。これなら、行けるか？ だが、それでも向こうの軍
は対応してきた。こりゃ、アレをやらないとダメだな。

「さて、全軍、後退」

『了解』

地図マップに表示されている自軍のマーカーが一斉に後退し始める。追撃はない。おそらく困惑しているはずだ。いきなり撤退をはじめたのだから。

「で、三上は敵陣地に特攻」

「了解ヤって!! なんで俺だけ特攻なんだよ!!」

「うっとうしいからだ」

「お前の正直さに泣けるよ!!」

そうか、泣くほど嬉しいのか。正直に生きるって言うのはいいことだな。

「違うわ!!!!」

「はやくやれ」

それだけ言って何か言う三上の通信を勝手に切る。さて、これで邪魔者は消えた。

「俺邪魔者扱い!?!」

「お前、どうしてここにいる」

どういうわけか、三上が隣にいた。こいつには僕の場所は伝えてないはずだ。なのにどうして、ここにいる。

「俺に悠がわからないわけないだろ」

ドン引きした。

「ちょっと、この線からこつち側に来ないでくれ」

まさか、三上にそんな趣味があるとは、確かにそういう趣味の奴がいるとは理解していたが、まさかこんな近くにいるとは。だが、僕には荷が重過ぎる。誰か他の奴に頼んでくれ。

「違うから!! そんな意味ないっての!!」

「さて、そろそろ作戦ポイントに敵がくるな」

「スルーするなよ!!」

さてと、始めよう。今回は本当に勝たせてもらっせ。今までは僕達男子組にはまったく良いところなかったからな。誰がなんと言おうと大人気ないと言われようとも、勝たせてもらっせ。だって、この機会を逃したらもう、中宮会長や沢村に勝てる機会なんて巡ってこないかもしれないからな。いや、単純な強さでの話しな。勉強とか抜きにして、単純な強さで勝ちたいのだ。男のプライドの問題だ。さあ、行くぞ。

「作戦開始だ」

勝つための一手をうつ。

反撃の狼煙が上がった。

第三十三話 作戦開始（後書き）

なんだろう。最近悠君の性格が変わってきているような……。まあ、いいか。

はい、三十三話目です。なにやら悠君が作戦を開始しました。どっちが勝つかは決めてます。というかここまで見ればわかりますよね？

そして、ちょっとここでキャラクターの人気投票がしたいのです。感想がてら投票してくれると嬉しいです。

対象

狩野悠

佐藤美鈴

三上喜助

栗原直哉

木山秋子

黒江莉子

中宮風里

九条カリン

白崎小雪

九条ひとみ

沢村真希

狭間由宇

です。登場が少ないキャラとかいますけど、関係なしに投票お願いします。それにより、登場回数とかが変わります。

第三十四話 いざ行かん

どうも皆さん、中宮風里だ。今回は大将をさせてもらっている。ん？ 大将が前線に出るなって？ なに、大将が先を歩かなければ部下はついてこないぞ。

現在は、敵本陣に続く一本道の谷を進んでいる。相手の本陣は高所にあり、この道を通らない限り攻めることは出来ない。

「しかし、妙だな」

向こうの指揮を取っているのは、おそらく狩野だ。どれも、こちらの手を読んだいい指示を出している。だが、まあ、こちらはそれも同じ。だから、拮抗していたのだが……。今、このタイミングでの撤退、定石なら伏兵だろうが、いや、それなら、撤退した敵を追撃に出た今、この瞬間を狙うのがベスト、しかも、こんな両方を崖にはさまれた谷、一本道しかないこの場所がベスト。高所から狙えばこちらに甚大な被害が与えられるはずだ。

「だが、狩野はそれをしなかった。何か、他の考えがあるのか？」

なら、それは何だ？ そもそも、この地形だ。爆破でもするつもりか？ 生き埋めに出来る。だが、それならもう爆破してもおかしくないし、それに、周りの兵士はダメだが、私や沢村、黒江ならば乗り切ることが出来る。得策ではない。あと、考えられるのはなんだ？

「何をする気だ？」

その時、何か音が聞こえた。何かが発発したような音だ。それを

証明するかのよう前方で黒煙が上がっている。なんだ、勝てないから自分の本陣を爆破もしたのか。愚かな。まさか、自決とは見損なったぞ。

だが、その時水の流れるような音が響き渡った。そして、私は気がついた。

「しまった!!」

その瞬間、大量の水が谷に流れ込んできた。巻き込まれる瞬間、まるで波乗りのように波を走る、船が見えた。そこに乗っている狩野も。

「水攻め成功だな、悠」

「ああ」

うまくいった。気づかれないかとひやひやした。まあ、僕もこれに気が付いた時はかなり驚いたけどね。この谷と、窪地の高原という地形で使う機会のないと思われた船というオブジェクト。調べてみたら過去に潰れた水脈があったが、まさかそれが、まさかこんなことに使えるとは。

そして、全ての要素はこちらに有利に進んだ。このまま水の流れに乗り一気に敵陣地へ攻め入る。敵が復活したら、大変だと思うがこのゲームは窒息死というものが無いのだ。つまり、水の中では死ねない。マニュアルをよく読んで確かめたからな。まだ、そこまで再現できないらしい。

だから、中宮会長たちは死んで戻ることが出来ない。だから、敵に今の僕達を防ぐ手段はない。さあ、勝つぞこの戦い。

「さあ、行くぞ」
『おおー！！』

船が進む。窪地に溜まった水の上を敵陣に向かって進む。水の流
れがなくなり、敵の本陣へと到着した。

「進め！！」

兵士たちが敵陣へ飛び降りていく。残っていた守備兵を次々と倒
し、目標に近づいていく。さすがの中宮会長もここには罨を仕掛け
ていないみたいだな。本陣まで罨をしかける司令官はいないか。

その時、こちらの本陣で爆発が起きた。どうやら、水の中を進ん
だ中宮会長達が本陣にたどり着いたみたいだな。だけど、僕が仕掛
けた罨にかかったようだ。さっき本陣に罨を仕掛ける司令官はいな
いといったけど、訂正、僕がいる。たぶん、正規の軍とかじゃ使え
ないし。本陣に罨仕掛けるのは大抵負けてるときだしな。

「さ〜と、これで勝ちだな」

「ようやく出てきてくれたな」

「な！？」

そこには、中宮会長が立っていた。バカな！！ どうして、こん
なところにいる！！ 今は、水の中で流されているか、三上と戦っ
ているはず。

そこで気がついた。

「まさか！？」

「そういうことだ。わざと倒されて、ここまで戻らせてもらった。

私はここをリトライに選んでいるからな」

「くっ！！」

くそ、これは予想外だ。こんなところで中宮会長と出くわすなんて。どうする！ どうすればいい。逃げるか。いや、ダメだ。ここで逃げたらもう、勝てるチャンスはない。なら、攻めるか。可能性はあるが、ダメだったら同じことだ。僕が足止め？ 出来たとしても、厳しい。運しだいだ。

「策は決まったか？」

「はっ！」

どうやら、考え事に没頭していたようだ。気がつくとも周りの兵士はほとんどが動けなくなっていた。くそ、やるしかないようだな。

銃を捨て、ナイフを持つ。

「さて、私は今、すごい機嫌がいい。まさか、君がここまでやるとは思わなかった」

「そうは思えませんね」

お互い皮肉を言いながら相手との距離を探る。そして。

「行くぞ！」

「はい！」

一対一の闘争が始まった。

第三十五話 ポロポロの戦い

中宮会長が地面を蹴り、一瞬のうちに目の前に現れた。咄嗟に腕をクロスさせガードする。それと同時に腕が砕けるかと思うほどの衝撃が襲う。

中宮会長が蹴りを放っていた。そして、今度はわき腹に衝撃を喰らいそのまま吹っ飛ばす。

中宮会長の動きがまったく目で追えない。完璧人間で、何でも出て人間離れしている。本当に人間化と思ったほどだが。この前の一件で、この人も人間なんだなと持った瞬間にこれだ。本当にこの人は人間なのか！

「ぐう！」

「どうした？ この程度か」

「まさか！」

強がってみるが、ダメだ。この人強すぎる。というか、この人負けず嫌いだ。少し負けたからって本気出してる。

攻撃しようとするが中宮会長の蹴りと拳を防御するだけで精一杯だ。車に引かれてるみたいなの衝撃を喰らっても腕の感覚がくそ。

だが、防御しろ。体は動く。厳しいが耐えられている。それなら勝機はある。どこかに、一瞬でもいい、そこを突く。だから、耐える、耐えてくれ僕の腕！

「はああああああ！！！」

「ぐうっ！」

回し蹴りを受けきり距離をとる。クソ、まだ勝機が見えない。

連続回し蹴りからの拳、それを僕は何とかガードする。その僕の

腕を伝いそのまま僕の背後に中宮会長が移動する。振り向く間もなく蹴りが放たれる。そのまま僕は吹き飛ぶが、何とか堪える。

「衝撃の瞬間、前に跳んだか、いい判断だ。だが、ダメージはかなり喰らったな」

中宮会長が視界から消える。その直後、咄嗟にガードした腕に感じる衝撃。さらにそれと同時に背中からも衝撃。早すぎる。これが、常人と天才の差か。って何か違うだろうけど。いかん、意識が保てなく照りそうだ。

「眠らせはしないぞ」

連続で拳を放ってくるそれが体中に辺り、意識を失う前に強制的に痛みで意識を繋ぎとめる。

「ぐー」

こちららも拳を放つが簡単に避けられ、代わりに攻撃を喰らう。そこに蹴りを繰り出すが、それをあざ笑うが如く、避けられ腹にけりを喰らう。

「そろそろ終わらせよう。私も結構つらくなってきた。人を殴るというのはあまり気持ちのいいものではないからな」

それからの攻撃は言い表すことなど出来ない。あえて言い表すならば暴風だ。まるで、台風が自分に直撃したかのようだった。体が細切れになりそうだ。だが、そうだ。これを凌げ、凌げばかならず正気はある。

「はあああああ！！」

強烈な一撃。意識が飛びそうになる。今度は痛みで意識を繋ぎとめるのは無理だ。

だが、繋ぎとめる意識を！ 手繰り寄せろ勝機を！ どんな不恰好でも構わないあがけ！！ どうなっても構うな！！

「ほう、驚いたな。まだ、立っているとは」

「はあ、はあ、はあ！」

結果、ボロボロだが、僕は立っていた。だが、動くことはもはや叶わず。立っているのが精一杯という状況。だが、やるなら、今しかない。中宮会長は警戒はしているだろうが、こんなボロボロの僕が動けるとは思ってもいないだろう。そう、だからこそ……だからこそだ。

「ぐっ！」

「な！？」

精神力だけで、足に力を込め、中宮会長に飛び掛る。動けるとは思っていなかったのか中宮会長に避けられることなく押し倒す。そして、持っていたあったけの手榴弾のピンと仲間がこの辺りに仕掛けたC4の起爆スイッチを押す。

その瞬間爆破し、全てを吹き飛ばした。僕の意識はその瞬間に消えていた。

第三十五話 ポロポロの戦い（後書き）

はい、どうもテイクです。

来週から一週間ほど、用事で出掛けるので執筆が一切出来ないため、二週間ほど更新できなくなります。

ので来週と再来週の更新はお休みしたいと思います。

第三十六話 ゲーム終了(前書き)

パソコンは調子悪くてフリーズしまくりのなか書いたのでクオリティが低い上に短いです。
すみません。

第三十六話 ゲーム終了

意識が戻ると、ゲームが始まる前の幾何学模様の空間に戻っていた。今まで戦っていた兵士たちも、戦場もなくなっていた。あとは参加した僕達プレイヤーだけだった。僕達の服装も元に戻っている。ということはゲームはどちらかが勝って終わったということだろう。どちらが勝ったのだろうか。

「ふう、まさか負けるとは思っていなかったぞ狩野」

考え込んでいる僕に中宮会長が声をかけてきた。その言葉から、僕達が勝ったことがわかった。ふう、もうあんなのはごめんだな。

「やったな悠!!」

いきなり三上が肩を組んでくる。いつもなら、振りほどくところだが、今くらいは良いだろう。勝利の余韻に浸っているんだろうし。まあ、これが終わったら振りほどくけど。

「そうだな」

「お前の作戦勝ちだぜ。俺最後のほう逃げてたし」

ほう、つまりこの僕が中宮会長と死闘を演じていたときにこの力は悠々と逃げ回っていたと。ほうほう。なるほど、こいつは後で殺す必要があるな。まあ、あの二人から逃げれたというのはすごい。逃走能力だけなら、こいつがこの中でトップだろうからな。そして、変態度も。

「そうかそうか」

「つて、あれー？　なんで悠の後ろに般若が〜？」

「お前なあー！！」

「ひいひい！！！！」

三上が走って逃げる。

「まてこらー！！」

三上を追いかける。全力で逃げる三上。それを追う僕。三上程度の運動能力ならば、追いつけないはずがない。しかし、いつまで経っても三上との距離が縮まることはない。いったいどういうことなんだ。明らかにおかしい。

「どづいっことだ？」

「ああ、ごめんです。間違ったです。プライスレスです」

「いや、意味わかんねえよ」

何だよ、プライスレスって。もはや、つながりが完全にわかんねえよ。

「ノリです」

「ノリかよー！！」

さて、いつもどおりのノリツッコミは終わった。

さて、本題だ。おそらく、この状況を生み出しているのは謝った木山だ。それ以外に考えられない。いや、考えられるのは栗原もいるけど、この状況なら三上をきちんと殴らせるはずだ。もしくは自分で殴るはずだ。だから、除外だ。狭間さんはよくわからないが、こんなくだらないことをするはずがない……はずだから除外。となると必然的に木山しか選択肢がなくなるのだ。というか謝ったのな

ら自白したようなもんだよな。

「で、なんだこれは？」

「いやあ、ちよっと弄ってたら距離とか色々操れるんですよ」

「というところ？」

「つまり、ダイブしている間は外から干渉することで中の人を自由自在に操れるということです。ちなみに」

木山が声を抑えていった。誰にも聞こえないように設定しているのだろうか。というか、その理論からすると人の感情とか操れそうだな。待てよ、もしかして、木山が言いたいことって……。

「中宮会長があんな風になったのはちよっとした私の干渉です。どうです？ 凄いです？ ゴスロリです？」

「いや、最後が意味わかんねえよ。というかお前のせいだよ！！」

木山のせいであんな目にあつたのかよ！ 最悪だよ。木山は比較的、比較的 大事なことなので二回言いました まともだと思つていたのに。僕の中で木山の評価物凄いわがったよ。

まあ、上がったたり下がったりしたところでは何かが変わるといっわけではないけど。

「まあ、どうでもいいですけど。ちよっと面白いことするんで、まっすぐですよ」

「何をするんだよ」

「秘密ですよ。ちゃんと見とくですよ」

仕方ない。どの道、木山が干渉をやめないと、いつまで経っても三上には追いつけないのだ。それなら、木山に従って見ておくのが吉だろう。

しかし、こいつの将来が物凄い心配だ。こいつのことを好きになつて、こいつがどんなことをしてもそれを受け入れてくれる人間なんているのだろうか。最悪あいついつまでも一人じゃないのか？ まあ、心配しても仕方のないことだけど。さて、雰囲気的にそろそろ何か起こりそうだな。

すぐにそれは起こった。

「ぎゅあああああああ！！」

三上が爆散した。内側から爆弾が爆発したかの如く爆発した。

「あちゃ〜、間違つたです。しくじつたです。素面です」

いやいやいや、何をどう間違つたら人が爆発するんだよ。というか、最後の素面つて、そりゃ当たり前にみんな素面たる未成年だから。

『……………』

その場に居た全員が絶句していた。

木山の声だけが響く。

「あ、あはは〜、間違つたDEATHよ」

何を間違つたんだよ。というか、おい、発言が凄いことになってないか？ 気のせいかな？ そうだな、気のせいだな。

「さて、おふざけはこれくらいにしようか木山さん。じゃあ、悠、みんな、そろそろ戻すよ」

栗原の声がして、僕達は気を失った。

第三十七話 帰還（前書き）

お待たせしました！

PC復旧後、執筆意欲増加により、予定変更で更新です！

第三十七話 帰還

目を覚ますとゲームの中に入った時に寝ていた場所であった。他のみんなは既に目覚めているのか、ここには居ない。となると、扉の向こうだな。ここが、再現されたゲームの中じゃない限りは。なんか、栗原とかならやりそうなんだよな。

「遅いお目覚めね」

「ん？」

体を起こすと、横のイスに佐藤が座っていた。何をやっているんだ？ もしかして、待っていてくれたとか？ いやいや、佐藤に限ってそんなことはないだろう。偶然起きたタイミングが同じだっただけかもしれない。

「佐藤も今起きたのか？」

「別に、あなたには関係ないでしょ。それよりもあなたが一番遅いんだから急いで起き上がりなさい」

「わかったよ」

なんだか佐藤の機嫌が悪いように感じる。何か悪いことしたのか？ 考えうる可能性。先ほど考えたとおり、起きるまで待っていてくれた。起きるのが遅かったため不機嫌。うーんでも、佐藤なら待っているわけではないと思う。

第二、呼びに来てくれたがなんどやっても起きなかったから。これが現実的だな。って、そうなるって僕はかなりの時間寝てたってことですか？ うわー、結構恥ずかしい。

「何で、あんた急に頭抱えて唸ってるわけ？」

「いや、なんでもない」

とりあえず、みんなと合流しよう。これ以上遅れるわけにもいかないだろう。多分そんなに時間は経ってないだろうと思うし、今なら大丈夫なはず。

「ほら、行くわよ」

あまりに僕がのろのろしていたからか、手を差し出してきた佐藤。

「えっと？」

「早くする！」

「は、はい！！！」

慌てて佐藤の手を掴む。そのまま立たされ、部屋を出るために歩かされる。それにしても、佐藤の手ってやわらかいな。いや、まあ莉子の手もやわらかいのは同じだけど。そうだな、人の手って人によってやっぱり違うものなんだなと、微妙に思ったり。

「何にやけてんの？ 気持ち悪い」

どうやら、にやけていたようで手を離されてしまった。まあ、いか。これが見つかったら三上に何を言われるかわかったもんじゃない。

「いや、何でもない」

「？」

僕の返答を不思議に思ったようだが、それ以上佐藤が何か言ってくることはなかった。

扉をあけるとあの地下スペース。ゲーセンは相変わらず五月蠅い。そこに三上たちはいた。

「おつ、遅かったな悠。何やってたんだよ」

僕に気がついた三上が聞いてくる。

「別に。何もしてねえよ」

「じゃあ、何で佐藤さんと一緒に出て来るんだよ」

やっぱりそこに突っ込んでくるのか。ここは佐藤に任せよう。僕が説明するより誤解はなさそうだし、佐藤なら嘘も言わないだろうし。

「佐藤、説明」

佐藤が立っていた方を見たら、そこに佐藤はいなかった。どこに行ったのか探すと離れた場所の椅子に座っている。呼んでも来てくれそうにない。

「あゝ、まあ、何でも良いだろ」

「何だよその間は！」

「はいはい」

うるさい三上を無視して狭間さんと話している栗原の所へ。

「やあ、悠。遅かったね」

僕が話しかける前に気がついた栗原が僕に言う。

「ああ、寝てたからな」
「疲れてたのかもね」

ゆるい口調で狭間さんが言う。
疲れてたか……そんなに疲れてたとは思えないんだけど。確かに大変な目にはあったけど、きちんと寝たし。

「ん、最近の疲労とかじゃなくて、昔から蓄積してた疲労かな」
「それがどうして今、出たんですか？」
「慣れないことしたからかな？」

納得出来そうで、何でか納得出来そうにない。まあ、どっちでもいいか。

「それより悠、ゲームは楽しかったかい？」
「楽しかったかな。初めての体験だったし。僕的にはもう少し優しいのが良かったかもな」
「そっか、みんなにも意見を聞いたんだけどね、三上はギャルゲー、黒江さんは女子向け恋愛ゲーム。会長さんは、対戦格闘系って言うてたよ」

みんなバラバラな意見だな。三上に関しては完全に欲望だよな。明らかに狙ってるのがわかる。

莉子にしても、女子向けって絶対、腐が付く女子向けですよな。だって、あいつ僕の部屋にあっち系の本隠してるから。驚いたよ見つけた時には、何でこんなもんがあるのか。自分の家に隠せないなら買つなよと言いたい。

中宮会長は対戦格闘か。戦った身としては、あまり中宮会長とは戦いたくない。木山の介入だったとしても、あんなことは二度とこ

めんだ。

で、こんなことを聞かせたってことは僕からも意見を聞きたいんだらう。

「で、悠は何かゲームの意見ある？」

ほら、来た。で、僕の意見ね。基本ゲームは暇な時しかしないけど、どうするかな。あれでいいか。あれだけ精巧に世界を作れるなら、多分こういふのとか人気出そうだし。多人数でやるのにちょうどいい。ネットゲームの主なジャンルだし。

「そうだな、MMORPGとかどうだ？ あれだけ綺麗に世界を作れるなら人気でるんじゃないか？」

「成る程ね。MMORPGか。確かに人気出そうだね。ありがとう悠。どう、狭間さん？」

「システムの問題なし。私の目的にも丁度いい。問題はハードでも、解決策はある。しかし、圧倒的に時間が足りない。」

何やら二人で専門的な話になってしまった。まったくついて行けない。なら、木山に話でも聞きに行くか。色々やってくれたからな。

「よう、木山僕に言うことはないか？」

「お疲れ様ですよ」

「お前な。あんなこととして謝るとかないのか」「うーん」

考えることがそれ。普通謝るだろ。おい。

「冗談です。冗談ですって。そんなに睨まないでください。妊娠してしまいます」

………はあ。駄目だ、こいつ。早く何とかしないと。

「あれ、ツッコミなしはさすがにきついですよ。ツッコんでください。あ、何かこのセリフエロいですね、卑猥ですね、非才ですね、卑屈ですね」

「相変わらず意味わかんねえよ」

「愛変らず？ それは、そのままの意味でとっていいんですか？」
「違うわー!!」

駄目だ、こいつ。めっちゃ絶対調じゃん。かなわないよ。絶対。無理、もう木山に何か言う気力うせた。誰か、こいつのツッコミになれる奴いないのか？ 転校生として来てくれないかなあ。

「まあ、冗談はさておいて、ごめんなさいでしたです。さっすがの私もちよっと、微妙に罪悪感を感じていますよ」

「そうは見えないぞ」

「おろ？ そうですか？ あやや、それは失礼しました」

はあ、駄目だ。こいつに何を言っても効果がない。

「っと、ではでは私はもう少し用事があるので」

木山がどこかへ走っていった。

「何なんだよ」

僕は近くにあった椅子に座る。

「ねえ、木山さん走っていったけど何？」

「さあな。僕にもわからん」
「そう」

佐藤が隣に座る。

「それにしても、私のゲーム殆ど不参加だったわね」

「自分で言うくらいなら参加しろよ」

「いや。ああいうゲームって疲れるのよ。それにああいうのは野蛮な奴がやるもんでしょ」

それは偏見だと思っよきつと。そういうゲームやっている女の子とか居るよ。莉子とか。まあ、莉子を普通の女の子と定義できるかはなぞだが。

「あんた今結構誰かに失礼なこと考えなかった？」

「いや、別に」

鋭い。

「まあ、いいわ。意外と楽しめたし」

「……………」

「なに、そんな驚いた顔してんのよ」

「いや、お前から楽しめたとか、そんなことは初めて聞いたような気がする」

は！？ しまった、こんなこと言っんじゃないかった。

しかし、後悔先に立たず。佐藤の顔が不機嫌で染まる。

「とりあえず一発かしらね」

その後僕は佐藤に殴られた。結構理不尽だと思っただよ。
そうして、この日は過ぎていった。

第三十八話 最終日、片付け

そんなこんなで最終日。

は？ 夜に何かあったことを話せ？ 風呂の生中継をしる？ むしる女子が風呂入っている間に風呂に飛び込め？

馬鹿か。そんなことをやったら僕は死ぬ。確実に死ぬ。莉子だけだったらどうだがわからんが。佐藤や中宮会長がいるのだから。というか、これ前にも言ったよな。

それはおいておいて今日は午前中までで午後には島を出る予定だ。毎日荷物の片付けはやってきたからいつでも出発できるようになっている。今頃ぐちゃぐちゃの荷物と格闘しているであろう三上とは違うのだよ、三上とは。

「さて、時間まで何するかな」

何をするか考えていると部屋の外からドタドタと誰かが走って来る音が聞こえてくる。

きつとあと1秒後にはバーンと言うとんでもない音をさせて、扉を開け放ち誰かが部屋に入って来るだろう。

バーン。扉が勢いよく開け放たれた。

ほらな？

そしてそこには莉子が立っていた。

「悠！ 片付け手伝って！」

言い放った莉子。予想通りだ。

「自分でや」

ちよつと待て、ここで断つても、どうせ強引にやらされるのだ。なら、いつも色々被害にあっている復讐をしよう。ちよつとあいつに不利な条件を付ける。莉子、覚悟しろよ。

「　　いいぞ」

「え、手伝………え？　手伝ってくれるの？」

何で聞き返したし。しかも、断られること前提だった。まあ、今まで僕が快く引き受けたことなかったからそれも当然か。

「聞こえなかったか？　手伝ってやる」

「ねえ、ちよつと私のほっぺ抓ってくれる？」

夢と思ってるのかよ。まあいい、合法的痛みを与えられるからな。ん？　ドSみたいだなんて？　そんなわけない。僕は清く美しい狩野悠だ。さて、では、抓ろう。

思いつきり莉子の頬を抓る。それはもう思いつきり。それにしても、頬つて柔らかいな。しかも伸びるし。

「いたたたたた！　ゆ、夢じゃない！？　って、悠、もういいよ。わかったから。ちよつ、何でもつと強く抓るの！　いや、大丈夫じゃないからつあたたたた！」

そろそろ離すか。あまりすると暴れそうだし。離してやる。

「うう、痛い」

「とりあえず、目は覚めただろ」

「うん、覚めた。じゃ、行こっか！」

「待て」

僕を伴って部屋に行くところを莉子にストップを出す。ここから重要なんだ。

「何？」

「手伝うのは良いが条件がある」

「条件？」

「ああ、今後一週間朝、僕の家勝手に侵入しないことだ。この条件が呑めないなら僕は手伝わない」

毎日毎日布団に潜り込んでくるんだよこいつ。いや、おい、うらやましいとか言っつな。男の読者ならわかるだろ、朝どうなってるかわからないと言わせないぞ。ここでは言わないが、それが見つかるで大変なことになると言っておこう。

何とか潜り込む前に目が覚めるため事なきを得てるが、起きなかつたらと思うとおちおち寝てられないんだよ。この条件はそれを一週間でもなくそうというわけだ。何で一週間なんて期間をつけたかって？ 莉子の性格を考えて永久に来るなとか言っても無駄だから。絶対に忘れて破る。期間をつければそれもないからだ。文子さんにも言っし。

「うー、わかった」

「よし、じゃあ、行くか」

これで、少しは平和な日々がすごせるだろう。

莉子と一緒に莉子の部屋に。扉を開けて中に入り、そこで見た光景は忘れられないだろう。いや、どうしてこうなるんだと思った。あいつの部屋は文子さんが居るから綺麗なんだということが判明したよ。いや、まあ、それはわかってただけだ。

莉子の部屋はそれはもう見事にぐちゃぐちゃだった。あいつの持

って来たであろう荷物がそこら中に散乱している。足の踏み場がないほどにだ。

「おい……」

「……………」

全力で顔を背けている莉子。いやね、僕は思ったよ。てつきり少しは片付けているもんだと。少しは努力をした跡があるだろうとね。だけどさあ、これはちよつと酷いな。

「はあ。引き受けたからにはやるが、お前もやれよな」

「了解 了解」

はあ、本当にわかってるのかな。

「さてと、じゃあ、僕はこっちの方をやってるから、お前はゴミといるものを分けるよ」

「おっけー」

整理開始。しかし、いるものとゴミの整理って大掃除とかにしかやらないぞ普通。それだけ、ここのごちゃぐちゃ具合が凄まじいつてことなのだろう。幸いGは居ないようだから助かるが。これでGが居ようものなら発狂できるぜまったく。

「おい、何で僕のところにお前は自分の下着を寄せてくるんだおい。お前が自分でやれよ」

「な、何のことかな」

こいつ……。はあ、とりあえず、寄せられた下着を全て見ないようにして莉子に返す。何で、人のしかも女子の下着を片付けないと

いけないんだよ。

「でも、片付け方知らない」

はあ。もういい。こいつに任せてたらいつまで経って終わらない。このまま帰れねえよ。仕方ない。我慢して僕がやるか。

「わかった。お前はとりあえず、ゴミだけ捨ててる」
「りょうかい」

はあ。極力見ないようにして下着をこいつの鞆に放り込み、服をたたんで入れていく。何で、こいつこんな服持ってるんだよ。多すぎだろ。こいつなにやってたんだよ。いや、これよく見たら中宮会長の着てた服もある。こいつが貸してたのか？

うわ！ 何でこいつこんなもんまで持ってきてんだよ。何で、僕のアルバムがこんなところにあるんだよ。これ処分だな。っておい、処分した端から回収して行くなよ。

「おい、それじゃ、片付かないだろ」

「だって」

「はいはい、お前の言い分はいつでも良いから。捨てる」

「うう、わかった」

さて、片づけだ片付け。ここからは単調な片づけが続くのでカット。

・

「ふう、終わった」

「うんや〜」

ようやく終わったよ片づけ。まったく、あの後からもあいつ下着を押し付けてきやがって。いったいいくつ持ってきてんだよ。まったく、しかし、不思議だ。部屋中にあったあのゴミの巣窟のような空間が綺麗になり、そして、大量の服が消え去った。うん、不思議だ。バック一つに収まるとは誰が思おうか。

「ほんとだよね」

「お前が持ってきたんだろうが」

「だって、お母さんが詰めたし」

「納得した」

なるほど、文子さんか。あの人なら、納得だな。あの人収納とかとにかくうまくいから。どうして、こんなところにそんなものが入っているんですかってことが何回もあった。まあ、そういう僕も、結構その人の影響を受けているんだけど。

しかし、常々思うが、どうしてあの両親から、これが生まれてきたのだろうか。本当に疑問だ。うん。無駄に性能が高いところは遺伝されているが、どうしてここでか抜けているんだろうか。

「さてと、おい、お前のせいで、もう出発じゃないか。どうするんだよ」

「あはは」

「はあ。もう、降りるぞ」

「はーいー!」

荷物を持って下に下りる。

「ああ、悠長いタイミングだね。ちょうど呼びに行こうかと思ってたんだ」

「そうか」

「じゃあ、全員揃ったから。出発しようか」

みんなが順番に外に出て行く。僕も出ようとすると、佐藤が、なぜか荷物を差し出してきた。

「何だ？」

「もって」

「はあ！？ 何で？」

「いいから早く持ちなさい。重いの」

わけのわからないまま押し付けられてしまった。

「まったく、何なんだよ」

それに、重いつて、かなり軽いんですけど。絶対押し付けたな。まあ、良いか。軽いし。

「ほら、さっさと行くわよ」

「はいはい」

僕も別荘を出た。

こうして、僕たちの色々あった、無人島滞在は終わった。本当に長かったようで短かったな。それだけ、濃い内容だったのだろう。良い思い出だった、そう信じたい。

第三十八話 最終日、片付け（後書き）

新年一発目の更新です。

皆様あけましておめでとございます。

今年もよろしく願います。

さて、挨拶も終わったので連絡を。

次回の更新は十六日を予定しています。

ので、皆さんお楽しみに。

それではまた。

第三十九話 木山遭遇す（前書き）

今回は木山視点でお送りします。

第三十九話 木山遭遇す

8月4日、今日は私こと木山秋子が主役ですよ。狩野君に代わって私主役、私視点、私試薬。さあさあ、嬉しい人はうれしやがってください。崇め奉りやがってください。コホン、さてと、そろそろ話しに入るですよ。

今日は特に予定もなく、暇な一日でした。みんな無人島旅行での疲れが未だ抜けないのか、遊ぶ人も特にいないし、取材しようにもネタがなく、もう本当に暇で暇でしかたがなかつたんですよ。というわけで、何か面白いことがないかと、町に繰り出すことにしました。

「しかし、どうしましょかね」

完全な見切り発車なので、何も考えてませんでした。格好もショートワンピースにジーンズに、キャスケットをかぶるというラフなものです。動きやすいですし。

あ、あと眼鏡も外してます。コンタクトにしています。イメチェンという奴です。まあ、実際はコンタクトの試験ですかね。ついに眼鏡卒業です。眼鏡って結構疲れるんですよ。眼鏡かけている人にしかわかりませんが、視界も狭くなりますし。というわけで、この度私は、眼鏡を卒業してコンタクトになったわけです。あ、言うておきますよ。別に眼鏡外したら美人だったとかありませんよ。普通ですよ。そんな小説みたいなネタはないですから。

つとと、話がそれてますね。修正修正つと。そんなわけで、町中を適当にぶらついているのです。場所は中央駅ですね。人が集まりますし、何よりも県外からの観光客とか居ると思うんですよ。まあ、こんなあり見所もないような町に来る人に気がしれませんがね。つと、これは酷いですね。この町にもちゃんと見所はあるんですし。

たぶん。

「あの？」

あや、誰かに声をかけられてしまいました。同い年くらいの男です。顔は……まあ、良い方ではないでしょうか。わかりませんね。比較になる人はいないので。活発そうな印象を受けます。頭髮は茶髪で割りと長い。首元くらいですね、もう少し伸ばせば結べそうですね。なにやら大きな荷物を持っていますね。引越してでしょうか。

つと、あまり考え込むのは悪い癖ですね。怪訝な顔で見られてますので、返答しないと。何か用があるようですし、聞いて見ましよう。中々面白そうなことになりそうですし。同い年くらいでたぶん転校生ですよ。この辺りで、高校といえばうちしかありません。つとと、また考え込んでますね。早く返答返答つと。

「私です？ 何か用ですか？」

「すみません、このマンションに行きたいんですけど、今日ここに着いたばかりでわからなくて教えてくれませんか？」

その男の持っている地図を見る。おお、ここは最近できたばかりのマンションですね。立地も駅まで10分、私たちの通っている埜宮高校まで10分という中々の立地。内装も中々で、結構家賃とか高そうと思っていましたけど、調べたら大学で研究開発された最新設備とか何とか間とかの実験用とかで家賃はかなり安いと聞いたことがあります。まさか、そんなところに住む人間が居ようとは。いや、まあ、多分ほかにも住む人いると思いますけど。便利ですし、というかそう言う私もそこに住んでいますしね。うちの母親も私と同じで新しいもの好きで、好奇心旺盛ですから。あ、父親もそうです。ね。だから、出来た瞬間に引越し余裕でした。中々に面白いマンションですよ。いえ、住処に面白いとか必要なかは知りませんが、

私的には最高ですね。

さてと、案内ですね。案内。私ほどこの町に精通している人間などいないでしょうし、それに自宅でもあるんですから、案内は余裕です。ここで恩を売っておけば何かと利用できそうですし、転校生の情報が得られるのは大きいです。オーケーしましょう。

「オーケーですよ。というか、私も同じマンションですしね」

「おお、ありがとうございます。それにしてもすごい偶然ですね」

「そうですね。じゃ、いくですよ。あ、私は木山秋子ですよ。あなたは？」

「私は志雄原稜麗（はむらびら）です」

「そうですね、では行くですよ」

男改め志雄原さんと共に、来た道を戻ります。はあ、面倒です。

それにしても面倒です。いえ、面白いかなとか、ちよつとは思っただけですけどね。ほら、あれですよ。修学旅行と違って、あれ、計画までが楽しいじゃないですか。本番になるとテンションがただ下がりするんですよ。作者はまさにそれで、その子たる私もそれを受け継いでいるんですよ。というわけで、案内するとなると、途端に面倒になりました。

いえ、ここで放り出すとかはしませんよ。私は記者なので、信用第一ですからね。一度言ったことは遂行しますよ。はい。この黒く腹黒い木山秋子はきちんとしますよ。あれ？ 信用できそうにないですねおおよよ、これは困りましたね〜（笑）。

つと、はいはい、とにかく案内ですね。案内つと。そうですね会話でもしてこいつの個人情報を掴むとしましょう。いえ、別に悪用する気はないですよ。本当ですよ。

「さてと、志雄原さんはどうしてこの町に来たんですか？」

「えっと、まあ、色々あっていいいますかね。家の都合ですかね。」

親が外国に行くということになって私は残る選択をただけですよ」「ほく、そうなんですか（カキカキ）」

両親は海外つと。それで本人は日本に残る決意をして、一人暮らし。多分、一人暮らしできる環境じゃなかったんでしょね。元の高校と家は。高校は校則が厳しければアルバイトも出来ないところがありますしね。それだからでしょう。家はでか過ぎたんでしょかね、そして、そこにもう帰る気がないということでしょう。

息子に好きな場所で生活をさせようという親心というわけですか。中々良い親御さんではないですか。これはポイント高いですね。それにしてもどこの国に行ったのでしょうか？ アメリカとか、その辺りが妥当そうですね。まあ、これ以上は初対面の私が聞くことではないですね。自分で調べます。

「あ、あのそのメモは？」

「気にするなですよ。こつちのことなので、じゃあ次です。好きなものや趣味は？」

「そうですね。趣味は写真撮影ですかね。好きなものは子供、ゲーム、料理ですね」

「ほほう（メモメモ）」

なるほど、写真撮影が趣味ですか。この辺りは風景とかいいですからね。名物というほどじゃありませんけど。酔狂な大学が実験的に色々やってたりしますから、建物の面白いですから被写体にはびったりかもしれませんね。しかも、カメラが趣味とは好都合ですよ。カメラマンは私もほしいと思っていました。これは写真部に入られる前に捕まえるですよ。

え？ 狩野君たちですか？ アレは雑用係と記者と編集とか、新聞作成班の方々です。というかあの面子にカメラ使えるのいませんでしたから。

「じゃあ、好きな料理は？」
「ん、特これといった物はないですね。嫌いなものもないです」
「そうですか」

料理が好きなわりには意外ですね。いえいえ、これは関係ないですね。さてと、メモしてっと。ほかに色々聞きたいのですが、うん、時間がないですね。もう、マンションが見えてきてますし、はあ、駄目ですね。でも、まだ、色々聞いてみたいんですね。うん、どうしましょうか？

「さてとここが目的地のマンションですよ。何階です？　ちなみに私は5階ですよ。501ですよ」
「そうなんですか！　私は502です」

ありや、お隣ですか。本当に偶然がかさなるもんですね。ここまで来ると何か作画的な何かを感じずにはいられませんね。何か神の力でも働いているのではないのでしょうか？　何なんですかね。まあ、良いです。ここで好感度でもあげておけばカメラマンとして引き込みやすいです。

「あ、そういえば、そろそろ昼ですね。引越し当日じゃろくなものはないです。隣のよしみです。うちで食ってください」
「いいんですか？」
「いいですよ。ちょっとメールするですよ」

メールに志雄原さんという人が隣に引越してくるということ伝え、彼を食事に誘ったことを伝える。そうすると、二つ返事でOKということだったので、自宅に招待する。フッフッフ、これでカメラマンは確保ですよ。あ、別に誰かさんが期待するような好意なん

てものは私にはないのであしからず。

「オーケーですよ。荷物置いたら来るです」

「ありがとう、それがご相伴に預らせてもらつよ」

そういうわけで、志雄原さんと共に私の自宅へ。先に志雄原さんの自宅に荷物を置いてから、私の自宅に行きました。引越してきたばかりなのもろわかりなダンボールばかりの部屋でしたね。どんな部屋になったのか後片付け終わったら見に行きたいですね。ベッドの下とかを探りたいと思います。

え？ 何をするかってわかっていんでしょう。そんなのを聞くのは野暮ですよ。

「さあ、入るですよ。ただいまです」

「お邪魔します」

「おつかえり〜」

赤いキャミソールにジーパン、ポニーテール姿の女性、私の母が出てきました。アクティブな印象を受ける。もう三十路の一児の母とは思えない容姿ですよ。ちなみに仕事も現役。まったく、私の母とは思えない。本当に思えません。それなのに、父はさえないサラリーマンとか、いったいどうやってうちの母を落としたのでしょうか？ うゝん、わかりませんね。

さて、私の母がジロジロと志雄原さんを観察します。

「へえ」

多分中々良い男とも思ってるんじゃないでしょうか。うちの母はこの手の若い男好きですからね。時々逆ナンしてますからね。まったく、本当に子持ちの母とは思えないですよ。それを容認して

いる父もある意味大物ですよ。まあ、最終的に母も父が一番好き
と言っているのです、本当にバカ夫婦ですよ。こんな遺伝子が私に
もあると思うとちょっと鬱になりそうです。

いえ、別に鬱にはなりませんけど。言ってみただけです。そも
そも、鬱になるのだったら、物心ついた時から、なってるはずで
よ。幼少期から、あの二人は毎晩毎晩私の寝ている隣で、お盛んで
したからねえ。それに母に限っては、私を買い物とかにつれていつ
た矢先にナンパしてから、若い男の純情を踏みにじってましたから
ねえ。豪胆にもなりますよ。おっと、これは別に関係ないですね。

「中々良い男じゃない！ いいなあ、アキちゃんもお年頃なのね
」

「違います。それよりご飯出来てます？」

「当然！！ このハルちゃん特製手料理が出来てるわよ」

「そうですか」

なぜか母は自分のことをハルちゃんと言う。名前が春華はるかだからだ
と思うです。正直、年を考えるときめえですが、容姿が若いので、
見た目的にはあまり気にならないですよ。

ちなみにアキちゃんは私のあだ名ですね。主に母と父しか使いま
せんけど。それに家族以外に使わせる気もありませんし。

「さあ、入って食べるですよ」

「はい」

その後、私たちは昼食を食べました。パスタだったんですが、流
石我が母つまかったですよ。普通に店で出せそうな腕ですよ。まっ
たく記者なんかやめて料理人になればいいのに。

「今日はありがとう、おいしかったよ」

「そういうのは、母に言うです」
「そうだね。じゃあ、私はこれから荷物を片付けるとするよ」

片付けですか。こういうのって大抵掘り出し物とか、紛失してたものとか、アルバムとか、昔読んでた本とか、毎日つけてた日記とか、そういうのが出てきて大抵見てしまっただけで進みませんよね。うちの親もそうですね。父はそうでもないんですけど、母が凄いですよ。

母の個人部屋があるのですが、そこを片付けているとなぜか、シヨタやら、オッサンやらの写真がいっぱい出てきます。あれを見つけたときはもう恐怖でしたよ。ああ、それと、女の子の写真も多かったです。母曰くバイだとか。おお怖い怖い。あの時の顔は確実に私を狙ってましたよ、ああ怖い怖い。うちの母はキャラが濃すぎますよまったく。

「そうですね。なら、手伝いますよ」

「え、でも悪いですよ」

「良いですよ良いですよ。私、手伝いとか大好きなんですよ」

嘘です。相手のうちの荷物を片付けることで志雄原さんの秘密を知りたいだけです。弱点でも良いです。そういうのは知っていたほうが良いですからね。本来なら面倒くさい片付けもよろこんで手伝ってあげますよ。あ、別に好きな人のことが知りたいとかじゃないですから。記者として情報を知っておきたいんですよ。狩野君たちに驚きをもって伝えることが出来ますからね。

「そうですねですか。じゃあ、お願いします」

「任されたですよ」

そんなわけで、私は志雄原さんの荷物の片付けを手伝ったのでし

た。ふふふ、色々と面白そうな情報を仕入れることが出来ましたよ。しかもこっそりと。性癖とか。うん、これは良い情報ですよ。こっそりメモに色々と記録しました。しかし、あれですね。なれないことはしないことです。結構疲れました。まあ、こっそりやっていするため妙な緊張感があったせいでもあるんですけど。金輪際こんなことはやらないと思います。これ疲れます。

「今日はありがとうございました木山さん」

「別にいいですよ。じゃあ、帰るです。なんかあったら、いつでも行っていいですよ」

「あ、それじゃ、明日町を案内してもらえないですか？」

うーん、案内ですか。これは……まあ、良いでしょう。

「いいですよ。明日の九時にマンション前に集合です。遅れたら。お・し・お・き、しますからね。それじゃ」

ふい、まあ、今日は中々いい日だったのではないのでしょうか。帰った途端ニヤニヤ顔の母を見なければ。まあ、良いです。全体的には、良かった。その一言で片付きますからね。

side 志雄原

木山さんか……。良い人だったな。マンションまで案内してくれたい、それに初対面の私に昼食までご馳走してくれたし。お母さんも優しそうな人だったし。あ、でもなんか視線が時々怖かったけど。これはさすがに人の母親に言えることじゃなかったから、言わなかつただけ。

明日も町を案内してくれるって言ってくれたし。

「顔とかも結構可愛かったなって、私は何を言ってるんだ」

「……………でも、気になるな。ん？ よくよく考えれば案内してくれるって、二人だよな。あれ、デートじゃね？ それって、デートじゃね？」

「うわ、どどどどどど。どうしよう。何着て行こう。ま、待て、お、お、落ち着くでしゅねる」

「って、本当に落ち着け私。何だござるって。明日は、あくまで、デートじゃない。そう、デートではないんだ。そうただの案内。……………」

「駄目だ。意識したら、もうデートとしか思えない。モロタイプだったし」

それに、何だこの胸の高鳴りは……………まさか、これが俗に言う一目惚れという奴なのか……………。ど、どうしよう。明日私が平静でいられる自信がない。う、うゝん。

「と、とりあえず寝よう。全ては明日考えよう。そうしよう」

そんなわけで、なんか落ち着かないが、眠ることにした。明日になればスツキリして考えがまとまるかも知れない。

目を閉じた。

「しまった眠れん」

駄目だ、興奮して眠れん。待て、このまま明日の待ち合わせに遅

れたらお仕置きされる。いや、それもいい 駄目だ駄目だ。それは駄目だ。寝よう。目を閉じていれば寝れるはずだ。

・
・
・

結局一睡も出来にまま朝を迎えてしまった。

第三十九話 木山遭遇す（後書き）

木山視点書きやすい。

だから、無駄に書いてたらいつもより長くなってしまいました。

もう、こいつが主人公で良いんじゃないか？ とか思ってます。

そして、今回G・S様より、いただいたキャラクター志雄原稜麗君が登場です。詳細な情報は次回載せることにします。

次回も木山視点なので、とても長くなります。

では、お楽しみに。

第四十話 木山案内す（前書き）

今回も木山視点です。

第四十話 木山案内す

うるさい目覚まし時計が私の眠りを妨げました。うう、何でこんな時間にセツトされてるです。うるせえです。夏のため毛布ではなく、被っていたタオルケットから、手を出して目覚まし時計を捜索する。あ、ありやがりました。私の睡眠を邪魔するとは良い度胸です。死ね。

ぶん投げました。しかし、それでも目覚まし時計は壊れず健気にも私を起こそうと鳴り続けています。きつとしゃべれたら、これしかできないからとか言いそうです。健気です。しかし、うるさいのはうるさいのでさっさと黙ってもらうです。

ノソノソと動いて行って、目覚ましを止める。時間は七時。早い、休みは昼間まで寝るです。何で、こうして早くセツトしたんだっけ？ あゝ、まだ、起動しなくて頭が働きません。フラフラします。とりあえず顔でも洗ってくる。

フラフラと洗面所まで歩いて行って顔を洗う。冷たい水のおかげで私の眠気は少し吹き飛び、脳も正常に起動はしました。しかし、まだ、完全ではないです。

次に伸びをする。

「ふあゝ」

んゝ、伸びは気持ち良いですねゝ。その際おへそとか見えてますが、ほかに見ている人は洗面所にいる幽霊（24）独身男さんしかいないので、気にしません。とか、思っていたのですが、駄目だったようです。

「おゝっはよーアキちゃん!!」

母が抱きついてきました。暑苦しいです。夏なので抱きつかないでほしいです。

「あ〜ん、寝起きのアキちゃんも可愛いわ〜。スリスリ、ほれほれ」

「頬を摺り寄せてこないでください。あと、体を弄らないでください」

小説じゃ描写できないような場所までいじらないでくださいです。まったく、毎朝これなんですから。これが寝ぼけているなら、まだ救いがあるのですが、まったくこれが素なので、どうしようもありません。お手上げです。ちなみに、弄られるのは子供の頃からで、さすがに耐性がつきました。これくらいでは感じることはないです。まあ、そのせいで、色々と弊害がありますけど、それもここでは言えませんね。

とりあえず、邪魔な母を引き剥がしシャワーを浴びます。描写はなしです。自分のシャワーシーンを描写するほど私は変態ではないのです。見たい人は妄想でもしやがっててくださいです。

・
・
・
シャワーを浴びたらもう、バツチリ目覚めました。さてと、そうでした、アラームを早くかけたのは食事当番もあるからです。なので、ちゃっっちゃか作ってしまうです。あ、そうですね、今日は志雄さんを案内しないといけませんから、弁当でも作って行きましょう。そっちの方が安上がりですし、面倒でもありません。弁当は志雄原さんに持ってしてもらえば大丈夫ですね。よしそうしましょう。

少女調理中……………。

ふう、出来ました。うん、中々の出来ですね。料理の才能を受け

継いでいるので当たり前ですね。さてと、では、あの母と父を呼んで、あ、父は出張中でしたね。そうでした。忘れてました。親不孝者ですね、まったく。

「アキちゃんできた〜?」

ナイスタイミングで入ってきますね相変わらず。どこかで見てるんじゃないでしょうね。そして、タイミングでも合わせてるんじゃないかと、疑ってしまいそうですよ。この母なら、やりかねないんですよ。いつもタイミングよく現れやがりますし。

「出来てますよ。さっさと食ってます」

「お〜、さすが我が自慢の娘」

「頭を撫でるなです。鬱陶しいです」

「もう、ナツくん。アキちゃんがいじめるよ〜」

はあ、まったく父にまで電話し始めましたよ。まあ、いつものことなので、ほっときましょう。それよりもさっさと朝食を食べたほうがいいですからね。

宣言どおり私は朝食を食べて、着替えのために部屋に行きました。なんか着替えは母が勝手に用意していた。というかこれ以外は着させないという臨戦態勢で、もう面倒なので、それを着ることにしました。

水色で、水玉模様のロングスカートに、白のブラウスに薄手のカーディガン、それに麦藁帽子。なんという夏ファッション。というか、これ、母が用意したですよ。何で、こんなに気合がはいってますか。はあ、仕方ありません。用意したからには着ますよ。

さてと、あと待ち合わせまで十分ですね。バック良し、弁当も問題ないですね。さあ、行くですよ。

「行ってくるですよ」
「行ってらっしゃい」

エレベーターを使ってさつさと一階まで降りて、外に出る。既にそこで志雄原さんは待っていた。あや、早いですね。まだ十分前だというのに。律儀ですね。どこか、寝不足のような気がしますが、気のせいですね。

「早いですね」

「ええ、まあ」

「ん？ どうかしましたですか？ 大丈夫ですか？」

「大丈夫です」

「そうですか」

むむ、どうも大丈夫ではなさそうですが、まあ、本人が大丈夫と言っているので、大丈夫なのでしょう。さてと、では行きましょうかね。さつさと行った方が良いでしょうし、この町を回りつくすなら時間はいくらあっても足りないです。ふふふ、覚悟するですよ志雄原さん。

「じゃあ、行くですよ」

「はい、あ、荷物私を持ちますよ。それと服似合っていますよ」

「おお、ありがとうございます」

計画通りです。中々の紳士ですし、高ポイントですよこれは。ふふふ、さあ、案内を始めましょうかね。

まず、私達が来たのは、このマンションと駅の間にある商店街です。今では珍しい商店街。かなり巨大で、駅前どおりはこれです。ここだけで、殆どのもと、情報が揃います。さすが主婦ですね。ちなみに、裏路地には猫の溜まり場になっています。

「ここが商店街ですね。食材とかはここで買うといいです。お得意様になれば、値引きとかおまけしてくれますよ」

「大きいですね。最近はスーパーとか多いですけど」

「まあ、スーパーもありますけどね。なんというか、スーパーと商店街で売り上げ対決みたいなのをやってるみたいですよ」

不況なのに本当に物好きですよ。まあ、私はスーパーよりも商店街の方が好きです。情報も集まりますし、雰囲気的にこういったほうが好きですよ。良い意味と悪い意味の両方で有名な私の母のおかげで私は割りとここでは有名です。だから、おまけとかしてくれるんですよ。本当に良いところですよ。

「そうなんですか。面白いですね」

「そうですね、さあ、次行くですよ」

「お、秋子ちゃんじゃねえか。野菜買ってくか！」

つと、商店街を出ようとしたら八百屋のおっちゃんに見つかってしまったです。まあ、良いです。野菜は買わないので。

「今日はこの引越してきた志雄原さんの案内なので遠慮しとくです。五割安くしてくれたら買うです」

「はは、なら売らんわ、八八八八！」

「八八八八」

「八八八八」

つと、八百屋のおっちゃんと一緒に笑ってる場合じゃないですよ。さっさと行かないと時間が足りませんよ。追求されるのも面倒なので。追及するのは好きですけど。さあ、さっさと行きます。

そんなわけで、次に来たのは駅ですね。ここはまあ、普通に駅です。彩皇町の交通の心臓部ですよ。ここにくれば町の殆どの場所に公共交通機関で行くことが出来ます。外にも出れます。この辺りも取材によく来ますね。時々テレビの方とかが来ることがあるですよ。何かとこの町は注目されることがあるようです。学業区画とか、特区画計画とか言われるものが進行してるらしいですよ。まあ、概要は面倒なので説明しませんけど。

「まあ、昨日も来たからわかっている通り、駅ですよ。彩皇中央駅、この町の交通の心臓です」

「ええ、予想外に大きいし、綺麗だったから印象に残ってますよ」

「まあ、基本は使いませんね。そんなに遠出とかはすることはないとしますし」

「そうですね。高校に行ってる間はあまり使わないですね」

ああ、あと、ここの駅前広場は夏祭りとかの会場ですね。商店街の人総出で盛り上がりますよ。あの人たちは本当にお祭り好きですからね。だから、高校の体育祭とか、文化祭に飛び入り参加してるんですけどね。まあ、面白いので、いいんですけど

「まあ、突発的な旅行とかに使うかもですから、覚えとくです。そして、駅前のパン屋はガーリックパンがオススメです」

「そうですね、今度買いに行きたいと思います」

「そうしてくださいです」

よし、パン屋さんに頼まれてた宣伝はこれくらいで良いですね。まったく、主婦ってどこから情報を仕入れてくるんでしょうね。昨日のうちにメールがいっぱい来てましたよ。殆どを無視しましたが、パン屋だけ、値下げしてくれるとか書いてあったので、宣伝しました。ほかのところ？ 知りませんです。

さてさて、次に向かったのは、ちよつと、中心街から離れた丘ですね。星望みの丘と呼ばれる場所ですね。ここは夜に来ると本当によく星が見えます。夏は特にですね。花火大会を見るのにも使います。それと、ここからなら中心街を一望することが出来ます。まあ、その代わり来るのは一苦労、上るのも一苦労、はあ、疲れました。

「星望みの丘、良い場所ですね。カメラ、持ってくればよかったですな」

「はあ、はあ、まあ、それは別の機会にですねすると、はあ、いいですよ。ふう、久しぶりすぎて疲れました」

「大丈夫ですか？」

「大丈夫ですよ。ちょうど、ここでお昼にでもしようかと思っただので、私の荷物の中にシートでもあるので、座って食べるですよ」

「はい！」

いそいそと準備する志雄原さん。そんなに食べたかったですかね。まあ、ここまで来るのは疲れましたからね。お腹もすきますね。私もそれなりにすいてきましたし。今のところは予定通り、案内は半分といったところでしょいかね。主要な場所だけです。高校は場所は知ってるみたいですし、ほかに、まあ、適当ですね。

木陰が良い感じに出来ている場所にシートを引き終わり、準備は出来たようですね。

「じゃあ、食べましょうか」

「そうですね」

「いただきます」

というわけで、食事です。

「あ、この玉子焼きおいしいですね」

「そりゃ、私が作りましたからね」

「なるほど、おいしいのも当然ですか」

「光栄なことを言ってくれますね。ほら、どんどん食べるですよ」

「はい！」

はい、そんなわけで、食べ終わりました。うん、満足です。どうやら、志雄原さんも満足したようです。よかったですね。

「ふう、しかし、気持ちいなこは」

志雄原さんがシートに寝転がる。今日は天気もいいですし、この場所は中々過ごしやすいですからね。昼寝すれば気持ち良いですね。でも、それは出来ませんね。今日はあくまで、案内が目的なので。

「さあ、志雄原さん行き　あらら」

寝ちゃってますよ。寝不足だったんですねそうですね。そりゃ寝転がれば寝れますね。気持ち良いです。やれやれ、まったく、寝不足なら寝不足と言えはいいのに。そうしたら、少しは配慮したですけど。少しお仕置きですかね？

「まあ、いいです。今はおやすみなさいですよ」

・
・
・

side 志雄原

「うひひひ」

どうやら私は眠っていたらしい。既に日が傾きかけている。失敗

してしまつたな。寝不足だつたけど、無理するんじゃない。まあ、そのおかげで、昨日の葛藤を今日に持ち込める余裕がなかっただけよかつたと思えるんだけど。

「ああ、起きたですか」

起き上がると、木山さんが声をかけてきた。今まで待つてくれたのか、迷惑かけたな。謝らないと。

「すみません、寝てしまつて」

「いいですよ。まあ、寝不足なら寝不足と早く言つてほしかったです」

「……すみません」

迷惑かけまいとか、思つて言わなかつたんだけど、それがあだになつてしまった。

「いいですつて、さて、早く帰りましょう。夏とは言え、暗くなる
と危ないですから」

「そうですね」

シートをテキパキとたたんで私達は帰路に着いた。

今日は良い日だつたと言えるのだろうか。まあ、いいか。あの葛藤の理由も、これからわかつていけばいい。時間はいくらでもあるのだから。

第四十話 木山案内す（後書き）

次回は黒江莉子視点の小話です。
それではまた次回。

第四十一話 黒江遊ぶ

8月5日、今日は私こと黒江莉子ちゃんが、主役だよー！ わーい。っと、きちんとしないと悠に怒られるから、きちんとしないで、昨日から一週間も悠には家に来るなっって言われた。うう、あの時は仕方なくて思ったし、約束は破るためのものだから、破ればいいやって思ったのに、母さんまで、行くなっ。だから、絶賛欲求不満なのです。昨日は疲れてて殆ど何もしてないし。誰かと遊ぼうにも木山さんはなんか用事あるっって言ってたし、真希ちゃんはどうか行ってるみたいで連絡つかないし、悠もだけど。会長はなんか忙しいみたいだし。栗原と三上は論外だし。

というわけで、少しでも気を紛らわせようと、私は外に出ました。何がというわけかはわけわかんないけど。悠の家の前で、少しくらいじっとしてたけど、それから、適当にぶらついてます。

「むづ、暇だ」

どうしよう。外に出たのに、暇だ。どうしよう。本当にどうしよう。誰かに会わないかな？ 会いたいな悠とか、悠とか、悠とか。うう、さびしい。泣きそう……。

「じゃー……」

駄目駄目、そんなことじゃ駄目だ。うん、この一週間で悠もたじたじになるほどの女に成長してやる。そうすれば、大丈夫なはず！ ううんでも何をすればいいんだろう？ 誰かに聞くにしてもな。ううん、あ、そうだ。小雪ちゃんにでも会いに行ってみようかな。最後に会ったのどれくらい前か忘れたし。あ、でも無理か。会えるの今親戚だけだったけ？ ん、振り出しに戻った。どうしよう。

とか、やってたら、三上と栗原にあった。

「げ」

「何なんだよその露骨に嫌そうな顔は」

「まあまあ、三上。彼女なりの愛情表現だよ」

「違うわよ。露骨に嫌なのよ」

何で、休みの日にこいつらと会わないといけないだろ、悠には会えてないのに。むづ、悠に会えないからイライラするー！！ あー、もう、いやだー！

「今日は一段とイライラしてるね黒江さん。悠に会えないから？」

「そうよ、悠はどこなのよー！」

こんな可愛い幼馴染を置いて悠はどこに行ったのよー！！

「それは僕も知らないな三上は？」

「俺が知ってるわけないだろ」

「それもそうだね。じゃあ、僕たちは行くよ。黒江さんはどうする？」

「私はぶらぶらする」

「そっか、じゃあね」

栗原と三上がどこかへ行った。あの二人なんか、あの旅行以来仲がいい気がする。はっ！もしかして、あの二人って、そのあれ？もしかしてアレなの？確かに、そういう雰囲気はある、気がする。この莉子ちゃんリーダーが反応している……気がする。ちよつと、待てよ。あの二人だとそうね。三上が受けて、栗原が攻めね多分。

「アハツ、ちよつと興奮してきたかも」

でも、あの二人の絡みなんて想像してもな。前に悠の部屋に隠してた奴は全部発見されて捨てられちゃったし。うーん、まだ、新刊は出てないんだよな。本屋に行っても意味ないし。へ？ 勉強？ どうして夏休みに勉強しなくちゃいけないの？ 夏休みは遊ぶためのものでしょ。宿題は前日にやればいいのよ。適当に歩いていると、いつの間にか公園に来ていた。小さいように見えて結構広い公園。

「あ、ここ昔悠と遊んだところだ」

懐かしい。昔はここに来るといつも悠がいたし、来てくれた。何かあったときはここに逃げ込んでたから、覚えてたのかな？ それにても変わっていない。少し、この町を離れてるだけだったけど、一年もこなかったら、かなり変わってて驚いたもん。けど、変わらないものもあるんだね。

「あ、黒江だ！」

「む、誰、私を呼ぶ捨てにするのは！」
「俺だよ俺」

そこにいたのはサッカーボールを持った子供。ん？ こんな知り合いいたっけな。

「はあ、その顔は覚えてないな」

むう、何だその上から目線は。私のが年上だぞ、年上。

「ケンちゃんだよ。ケンちゃん」

ケンちゃん？ う〜ん、ケンちゃん、ケンちゃん……な〜んか、いたようないなかったような〜？ ん〜？

「相変わらずバカだな」

問答無用で殴った。

「いで！！」

「馬鹿つて言ったほうがバカなんだよ。バーカ」

「それなら、お前もバカじゃん」

アレ？ この感じ、前にもあったような〜？ そうそう、確かこの公園で、前にもこんなやり取りをしたような気がする。子供と。う〜ん？ もう少しで思い出せそうだったんだけどな〜誰だっけ？ もう少し、もう少し。えっとなあ、なんだろうな〜、あ。

「思い出した」

「やつとかよ」

「ケンちゃんだケンちゃん」

「だから、そう言っただろうが」

そうそう、ケンちゃんだよ。ケンちゃん。中学に入学したての頃に公園にいたから、遊んであげたんだったね。そうそう、それからよくサッカーとか一緒にやったんだっけ。そうそう、思い出した思い出した。

「おい、お前、適当な説明してんじゃねえぞ。間違ってるからな」

「へ？ そうだっけ？」

「そうだ。お前、俺がここでサッカーしてたら、いきなりボール奪

って、私の下僕になれって言っただろっが」

あるえ〜？ そうだったけ？ う〜ん、私の記憶では、違っただけだな？ うん？ 悠に後で聞いてみよう。きつと、私の方が正しいって言うてくれるはず。うん、そうだそうだ。きつとけんちゃんがいじわるしてるんだよ。

「お前、適当なこと思ってるだろ」

「うん？ 適当なこと？」

「まあ、いいか。なあ、暇なら、手伝ってくれよ。俺んとこ人数足りないんだよ」

「オーケー、いいよいいよ〜」

やったね、暇つぶしの手段が出来た。本気でやるぞー！

というわけで、私はこの日、日が暮れるまでサッカーを楽しんだ。いや〜、本気でスポーツするっていいよね。

でも、悠には会えなかった。どこいつてるんだろ。どこかに出かけた様子もないし。あ、そうそう、なんと、この私あのシュレインガーを確保したのだ！！ えっへん、偉いでしょ、ほめてほめて〜。というわけで、合法的に悠の家にいける理由が出来たのだ！

やったね、明日は必ず悠の家に行くぞー！

ちゃんと、シュレインガーが逃げ出さないようにケージに入れて、捕獲用の麻酔玉も投げ込んだ。逃げられる心配はない。そして、明日着ていく服。これも決まっている。いつもどおりの私が良いって悠は言うてくれるからね。いつもどおりのカジュアルな服。これで悩むことはない！ お母さんにお菓子も作ってもらった。うん、おいしい。あ、つまみ食いは駄目だよ。でも、一個くらい。あ、お母さんが隙間から見てる。食べてない、食べてないよ。

準備万端。あ、きちんとアレも用意してないと。アレをすることになったら、必要だしね、アレ。既成事実作るにはいらないけど、

私は悠の配慮が出来る良い女なのだ。だから、アレは必須だよね。

「よし、寝よう！」

目覚ましを5時にセットしてっど。

おやすみ〜！

side シュレディングー 猫語を日本語に変換してお送りします。

やれやれ、まったく、そろそろ帰るつもりだったのに、黒江の嬢ちゃんに捕まるとは、俺も焼きが回ったかねえ。しかし、俺を見つけた時のあの喜びよう、何かあったのか？ まあ、黒江の嬢ちゃんの思考はわかりきっているからな。どうせ、我がご主人のことも考えていたのだろう。今のニヤニヤしながら寝ている。

ご主人には平穩に暮らしてほしいのだが、まったく、そうも行かないらしいな。父上もまだ帰らぬようだし。うむ、こんなことを考えている場合ではないな。とにかく、このケージとやらからは出れぬし、今は寝るとしよう。まったく、我が家が恋しい。

そうだな、帰ったら学校の方にも行って見るか。あの佐藤って言う嬢ちゃんは俺にパンくれたからな。無事なのを見せにいかねえとまあ、我がご主人の学友というのだから、心配はしていないだろう。しかし、ああいう女性がご主人と恋仲になると良いのだが、どうにもご主人はその手の話題に疎い。というか、別のあの高慢ちきメスのご主人なんぞに現を抜かし負ってからに。いや、これはご主人の勝手だな。しかし、俺は納得できん。まったく。

うむ、寝よう。このままでは眠れなくなる。

おやすみだ。

第四十二話 黒江行く(前書き)

1ヶ月お待たせしました。

これから復帰です。

これからもよろしくお願いします。

第四十二話 黒江行く

希望の鐘の音のような目覚ましの音が私を眠りから覚ました。目覚ましを止めて、伸びをする。いつもとは違い、今日は、今日はしっかりと目が覚めていた。そう、今日は、悠の家にいけるのだ。もう、これだけで、おなかいっぱいだよ。あ、でもちゃんとご飯は食べないとね。色々やるし、腹が減っては××××は出来ぬだよ！さてと、お母さんにはやけてる私を苦笑しながら見ているけど、しっかりと朝食を食べる。

「あんだ、悠君に迷惑かけてないでしょうね」

「大丈夫大丈夫！ むしろ逆だよ！」

「心配になつてきたわ。どこで育て方間違えたのかしら」

なんかお母さんが悩んでるけど、まあいいや。別に関係ないだろうし。うーん、おいしー。やっぱ、お母さんの料理はいいよね。お袋の味！！ あ、悠の作る料理はもっとおいしいよ。あんなお嫁さんがほしくないな。本当にほしい。

「じゃ、行って来ます！！」

「こんな時間じゃまだ寝てるでしょ。それに、あんだパジャマで行く気」

「あ、そうだった、着替えてくる！」

あらかじめ用意しておいた服に着替える。黒色で、スカートがふんわり広がるテクニクワンピース。今回は生足晒してます！ どう、どう？ これなら悠も欲情するでしょ。ふふん、もっとほめても良いのよ？

さあ、これで私に死角はない！ さあ、レッツゴー。あ、一応ア

レも持って行っておこう。悠が持ってなかったら生でしか出来ませんよ。駄目駄目、高校生のうちから、それは、悠のためにも。私は別に良いんだけどね。そしたら、色々出来るし。

よし、今度こそレッツゴー!!!

「ふ〜ん、ふ〜ん、ふ〜ん」

やったー!!! やった、やったー! 悠の家にいける、いつけるー!!! 嬉しいなー、嬉しいなー!!! やっほー!!! アハハハ! つとと、少し落ち着かないと、また悠に何か言われちゃう。それは嫌だから、落ち着かないと、あ、でも顔のにやけが止まらないや。まあいいや。いいよね。いいよねえ!!! デュフフフ。

「お前は何をやっとするんだ」

「あ、悠!!!」

ここぞとばかりに抱き着く!!! しかし、避けられた。ぶー、どつして避けるのー。いいじゃん、会えなかったんだから、良いじゃん。ロミオとジュリエットの展開になってもいいじゃん。せつかく気合入れてきたんだよ!!!

「文子さんから連絡があったからもしやと思ったがお前は何をしてくるんだよ」

「これこれ」

シユレディンガーを見せる。ふふふ、さあ、私を褒め称えて、そして、色々させて、いや、色々して!!! もつ、あんなことやこんなこと! 心構えは出来てるから!!! さあ、さあ、さあ、さあ!!!

そんな私の気持ちは悠には伝わらなかつた。いや、きつと恥ずかしかつたんだよ。まったく悠は恥ずかしがり屋なんだから

「シユレディンガー！ お前帰ってきてたのか。何で莉子につかまってるんだよ」

『じゃー』

ん？ なんか、よからぬことをシユレディンガーが言っている気がする。何だろう。悠に告げ口している気がする。ええい、こいつに何か言われる前に、さっさと悠の家へ行くぞ！！

「さあ、行こう、すぐ行こう！！」

「ちよ、待てこら！！」

悠の手を引いて、家に侵入！ あゝ、数日ぶりの悠の家！ やばい！！ 興奮する！！ あゝ、いい空気、悠の匂いだ。最高、もうこれだけで……いや、駄目、今日は最後まで行くって決めたんだから、がんばらないと。うん、がんばるぞ！

「急に興奮したり、満足そうにしたり、そして、いきなりやる気になったり、お前は何なんだよ」

「今日は最後まで行きたいとおもいます」

「何の宣言だ！？」

「ふふ、それを私に言えと？ もう、悠ったら何を言わせるの」

「お前は何をやる気だ！」

何って、決まってるじゃん！ アハハ、今から、楽しみ楽しみ！ 本当に楽しみ！！ あ、そうだ、昨日なにしたか聞こうかな。私がない間何してたか、気になるし。うん、そうしよう。その前にシユレディンガー出してやらないと。

出してやると、すぐに自分のベッドに行った。よし、これで邪魔者はいない。

「さあ、悠！　って、アレ？　悠？」

あれ、どこ行った？　さっきまでそこにいたじゃん。

「お前が遅いからさっさとリビングに行ったただだよ」

むう、声くらいかけてくれればよかったのに。あ、そっか、照れてるんだね。もう、可愛いな。悠は。じゃあ、私もリビングいこつと。ふ〜ん、ふ〜ん。

「お前、妙に機嫌いいな」

「やっと悠の家に入れたからね！」

この数日間、悠の家にいけないことで、どれほどストレスが溜まったか。あ、あと性欲も溜まったね。まあ、それは私の限りない妄想力でなんとかしたけど。ストレスはもう、きつかったきつかった昨日サッカーで発散したから、いいけど。あ、あのサッカーは楽しかったな。

「そんなことでご機嫌になるなよ。はあ」

「いいじゃん！　小さなことに幸せを感じられることは大事だよ！」
「まあ、そうかも知れないが」

なんか納得行かないような顔をする悠。うん、いいことだと思うんだけどな？　みんなもそう思うでしょ。そうだよな。

「じゃ、シャワー借りて良い？」

「唐突過ぎるだろ。話に魔脈略がないだろ。何で借りるんだよ」

「え、そりゃね。聞かないですよ」

「駄目だ」

「ええー!？」

何で、何で何で何でー!？ 汗とかかいてるから、シャワー浴びてからしたいんですけど。あ、もしかして悠つてば、汗とかかいてる方がいいのかな？ そうか、私的には綺麗にしてからやりたいんだけど、悠がしたいならどんなことでもやる!

「悠がやりたいなら、それでもいいよ」

「お前の頭の中で何があった!？ 何の話が繰り広げられてるんだ

よ!」

「あれ、違うの?」

「いや、話の流れがまったくわからない」

うん? 何でかな? 自然な流れで言ったと思うんだけどな? おかしいな? うん? どこが駄目だったのかな? 私に魅力がないわけじゃないだろうし。どんなプレイも出来るし、やろうと思えばそれはもう、いろいろと練習してるんだけどな? うん? 私どこを間違ったの?

「うん?」

「お前もわかってないのかよ」

「とりあえず、ご飯ちょうだい」

「お前な。はあ、わかった。まったく、作ってやるよ。リクエストは?」

「何でもいいよ」

うん、悠の料理は何でもおいしいからね。

えーっと、それから、悠の作った昼食に舌鼓? だっけを打って、ゲームして遊んだ。なんか新しいゲームあったからやっちゃったよ。

ふぶん、この私にかかればあんなゲーム一日でクリアだよ。隠しボスとか倒しちゃったよ。ふぶん、悠のあの顔、携帯で写メとっておいたから後でそれで、あれしよつと。

つと、そろそろ帰らないとだね。時間だし。帰るとしよつと。

「じゃあ、帰るね〜」

「おう、またな」

「うん、じゃね」

あゝ、今日は楽しかった。あれ？何か忘れてるような気がする。そもそも、私って悠のところに遊びに行っただっけ？うん？なんか大事なことをしに行こうとしたような？あれ、何だっただっけ？ま、いつか。思い出せないってことはそれほど重要なことでもなかったんだろつし。でも、重用だったような気もするけど。うゝん、悠のところを楽しむすぎて思い出せないや。

「ま、いつか、さあ、帰ろつと、ふぶん、ふんぶん」

第四十三話 中宮、会う

私は中宮風里だ。埜宮高校の生徒会長を勤めている。ふむ、何？
今度は私が主役なのか？ いや、私視点と言ったところか。ふむ、
前回や、前々回、それ以前は木山や黒江が好き勝手やっていたな。
さて、私はどすればいいんだ？ うん？ そうか私の何気ない日常
を語ればよいのか？ ふむ、私の日常など平凡でつまらないものだ
ぞ？ なんだ、それでもいいのか。そうか、酔狂だな。わかった、
語ろう。では、8月4日にあつたことでも話そうか。

生徒会の仕事もないので、私は散歩に出ている。晴れた日の散歩
は気持ちが良い。特に夏は青空がよりい一層綺麗だ。なに？ 受験
生だろう？ 心配しなくてもいい、きちんと勉強はしている。今日
は休みの日だ。そもそも、私にとってはそれくらいどうでもない。
それに詰め込んでばかりでは体に悪い。きちんと休みは取るべきだ。
でないと倒れてしまうぞ。さて、説明もこれくらいにして、散歩を
続けよう。

しかし、私の憩いの時間はそう長くは続かなかった。目の前に一
人の女が現れた。

「ここであつたが百年目よ!!」

その女は往来のど真ん中でそんなことを大声で叫んだ。周囲の人
間が一斉にこちらに視線を向ける。注目される。やれやれ、散歩中
だというのに。私の目の前に男女の二人が立っていた。男の方は茶
髪で割と顔は整っているが平凡そうな印象を受ける。名前は秋月健
一。女の方は、黒髪をポニーテールにした行動力のありそうな印象
の女だ。名前は音葉風音。ああ、音葉の方は黒江に似ているな。ま
あ、あちらの方がまだ可愛いものだが。そのための秋月のブレーキ
役なのだが、こういった時にはまったく機能しないから困りものだ。

「ああ、君たちか」

「さあ、私と勝負しなさい！」

まったく話が要領を得ないいつものごとく。そんな音葉に秋月が言う。一応いさめる言葉だ。まあ、それでも音葉は止まらないだろうけどな。やれやれ、いつものことながら困ったものだ。

「会っていきなりそれはないだろ風音」

おっと、そうだなこの二人について説明をしておこうかな。この二人は私の知り合いだ。ふむ、世に言う幼馴染という存在か。高校に入ってからあまり会っていないな。同じ高校に通っているのだから、会いにすればいいのだが、まったく会いにこないからな。休みの日は町では会うのだが、どういうわけかいつもこんな感じだ。私は普通に付き合いたいのだが。音葉はそうは行かないらしい。昔はよく一緒に遊んだものだがなあ。どうしてこんなことになったのだろうか。

「いいのよ！ 今度こそ勝ってやるんだから！！」

そう宣言する音葉。まったく私などに勝つてどうするのだろうか。ろやかな音葉は。私みたいな平凡な人間に勝つても面白くないだろうに。そういえば、昔から音葉は私に勝負を挑んできたな。生徒会選挙のときもそうだった。私が立候補したら、音葉も立候補してきたんだ。あれも勝負だと言っていた。ああ、去年の体育祭の時も、文化祭の時もそうだったか。いつもいつも会うたびにこれだ。私としてはこれも中々楽しいからいいのだが、場所は考えてほしいものだ。ここは町中だ。少しは自重してほしい。

「こんな町中でそんなことを言うな」
「じゃあ、どこで言えっつてんのよ!」

どこつて、人のいないところだな。勝負をするのも私たちの個人的なことなのだから、誰にも被害がなく誰も巻き込まない場所だ。山奥や私の家なんかでも良いし、海でもどこでも、人が少ないかない場所だ。さてと、じゃあ、受けるとしよう。受けなければ音葉は帰らないだろうからな。

「まったく、良いだろう。勝負なら受けよう。それで何をするんだ?」

何をして良いが、なるべく時間がかからないものにしてほしいな。貴重な休みだ。散歩は遅くまで楽しみたい。が、まあ、今までの経験から察するに音葉は何も考えていないだろうな。

「え? うん」

やはりな。やれやれ、勝負を吹っかけてくるのなら最初から考えておけと何回言えばわかるのだろうか。秋月も何度も言っているはずなのだが、まったく成長していないな。

「何も考えてなかったのかよ! おい、それじゃ何で風里に勝負を挑みに来てんだよ」

「いや、ほら、暇だったし」
「おい!」

二人はそのまま言い争うを始めてしまった。やれやれ、人と話しているときに自分たちで言い争いを始めるとは。まったく、仕方ない、私が勝負を用意してやるか。まあ、あまり無理のないのにしよう

うか。そうだな……ああ、ここならあの場所が近い。そこでならあの勝負が出来る。今だ50勝50敗、引き分けだ。決着もつく。しかし、己の実力を過信するわけではないが、私もよく負けているものだ。いや、音葉がよくやっていると聞いた方がいいか。

「まあまあ、二人ともそこまでしておけ、通行人も見ている。それで提案なのだが。ここからならあの場所も近い。どうだ？ 久しぶりにあの決着をつけないか？」

「そうね、ちょうど50勝50敗、決着が着くわね。それでいいわ」「ちよつと待てよ二人とも、今から行くってことだろ？ いきなり言ってやらせてくれるのか？」

ああ、それは考えていなかったな。あそこはそれなりに有名だから特にこの休みの時期は人が多い。それが合宿に行っているかだ。記憶ではこの時期に合宿はないはずだが、あそこに行かなくなっから久しい、今もあの頃のままということはないだろう。最悪誰もいないということになりかねない。まあ、大丈夫だろう。私の予感では十中八九あの人はいる。

「まあ、行って見てからだ行くぞ」

「レッツゴー!!!」

「はあ、お前らなあ」

うん？ なぜか秋月が呆れているがどうしたのだろうか。まあ、いつものことだな。さて、では、行くとしよう。我々の勝負の舞台へ。

第四十四話 中宮戦う

さて、私たち三人がやって来たのは彩皇町の中心街から少し外れた山の近くにある小さな道場である。そう、私と音葉がする勝負、その内容は剣道。まあ、それ以外でもよかったのだがな。この道場は全ての武術を習えるからな。数ある武術の中で私たちが剣道を選んだのは、これが私たちの勝負の始まりであるからだ。

始まりは12年ほど前だったかな。私はここに優秀な師範がいると聞き、この道場に来たんだ。噂どおりだったから中々にあの頃は楽しめたな。まあ、そんな時に会ったんだ。なぜかは知らないが、いきなり突っかかってきた。まあ、それ以来勝負しっぱなしだ。ふふ、楽しいからいいんだがな。

「たのもー!!」

音葉がそんなことを言いながら道場に入っていく。やれやれ、道場破りでもする気か？ しかし、どうやら心配だったこの主の不在はなかったようだ。タイミングもよく今日は門下生もないようだった。中々に良いタイミングだ。これがわかってたんじゃないだろうな。

「おい、風音それじゃ道場破りだろ」

秋月がツッコミを入れる。

「いいの!」

「いや、良くないだろ。はあ」

そんな二人の掛け合いを横目に見ながら私は道場の中に入った。

そこでこの師範が出てきた。

「おや？ 君たちか、ははっ久しぶりだね」

メガネをかけたやさしそうな雰囲気の男。彼がここの師範代の柳やなぎ谷ぎや竜りゅう治じさんだ。私が剣道などを習ったのも彼だ。三十路だというが未だに独身。良い人なのだが、ここで師範代をしているためか出会いがないとか。ふむ、まあ本人もまったく気にしていないようなので結婚できるのはまだ咲だろうな。

「お久しぶりです竜治さん」

「おひさー竜治！」

「おい、風音失礼すぎだろ。風里を見習えよ」

「ははは、みんな勢ぞろいかい？ それで今日も勝負なのかい？」

竜治さんに一連の出来事を説明する。まあ、説明することも何もないんだが。毎度のごとく勝負をすることになり、道場を使わせてくれということ伝える。

「いいよ。君たちなら大丈夫だろうし」

「ありがとうございます」

「はは、お礼を言われるのも久しぶりだね。あ、そうだ道場には一人先客がいるけど気にしなくていいよ。じゃあ、僕は少し用事があるからあとは勝手にしてくれて良いよ」

竜治さんはそう言って出かけていった。それまでに音葉と秋月の言いたいも終わったようで、三人で道場に向かう。ここの空気を吸うのは久しぶりだ。本当に久しぶりだ。懐かしい。っと、こんなことを感じている場合ではないな。

道場に入るとそこには見知った顔があった。

「沢村か」

「あ、中宮会長どうでもです。あれ、その二人は会長の友達ですか？」

「まあ、そんなところだ。秋月に音葉だ」

「どうも」

「よつろしっくー！」

「ボクは沢村真希よろしく」

そういえばこいつは強くなりたいたっていったな。理由は復讐だったか。あまり復讐は感心しないが己の納得が行くようにさせるのが一番良い。狩野も付いているんだ大丈夫だろう。悪いほうの道には入らないはずだ。もし、そうなら私が起してやるさ。

「さてと、準備をするぞ。沢村悪いが少し剣道で勝負をするから場所を借りるぞ」

「はい、どうぞ」

「おっしゃー！！ やったるぜい！」

「じゃあ、二人とも俺は審判やってやるから、さつさと着替えて来い」

うむ、では秋月の言葉に甘えるでしょう。道場にある更衣室へと向かう。もちろん防具とかなど持ってきているわけはないから借りる。竜治さんの手入れが良いからかかびなどもなく綺麗だ。音葉も来たな。サイズがある剣道着を探し着替えることにする。

少女二人着替え中。

・
・
・

さてと、着替えも終わり道場で面をつけ私と音葉は向き合ってい

る。既に試合も始まっている。だが、私たちはいまだに一歩も動いていない。互いに懐の探りあいをしている。この前の勝負の時よりも確実に音葉は腕を上げている。気を抜けばやられてしまうかも知れないほどに。ふふ、やはり勝負とはいいものだな。この緊張感確かに良い。

しばらくの手の読みあい後、音葉が動いた。

「やあああああ!!!」

音葉が振り上げた竹刀を振り下ろす。迷いのない素直な剣筋。しかし、鋭い。反射的に持っている竹刀で受ける。そのまま音葉は竹刀を袈裟懸けに振る。同じく竹刀で受ける。

重い。なるほど、やはりきちんと修練を欠かさなかったのだな。だが、それは私も同じだ。

「せい!!!」

両手に握った竹刀を面に振り下ろす。それを音葉は反射的に首を竹刀から逸らし有効打を防ぐ。しかし、それで休ませるわけがない。続けて胴に竹刀を振るう。それを音葉は竹刀で受け止める。

フツ、楽しいな。楽しいぞ音葉。

「楽しいな」

「そうね。でも、私が勝つ!!!」

音葉が竹刀を振り下ろす。それを受ける。

「私も負けるつもりはないぞ」

それを弾き竹刀を薙ぐ。それを後ろに下がり音葉がかわす。すか

さず追撃。息をつかせぬ真剣勝負。さあ、もっとだ。もっと私はもっと早く動ける。

「やあつ！！」

「遅い！」

音葉が振り下ろしてきた竹刀を弾き、そして……。

・

「うわああ、負けたー！！！」

「風音うるさい」

「むう、ケン、負けたー！」

「知ってるよ。審判やってたんだからね」

「何、そう落ち込むな音葉。お前は腕をあげていたよ」

落ち込む音葉に声をかける。勝者の私が言ってもあまり効果はないだろうがな。

「それに有意義な時間だった」

「むう、今度は勝つ！！ 行こうケン！！」

「はいはいつと、はあ、じゃな風里」

「ああ」

二人は帰って行った。さてと、私も帰るとしようか。

「ではな、沢村」

「はい」

竜治さんに挨拶をしてから帰路に着く。また来てくれとか誘いを

受けたが時間があればと答えた。今年を受験だからな。さて、帰ったら今日のノルマでも果たすとしようか。

第四十四話 中宮戦う（後書き）

残念な剣道の描写すみません。

なにぶん剣道なんてやったことのないので、某剣道マンガを参考に
して書きました。

次回はもろもろの事情により更新はお休みです。再来週にまた会い
ましょう。

第四十五話 栗原と三上ナニする？

さてと、今回は僕が主役かい？ いいよ。僕もやってみたかったからね。僕は栗原直哉。今回は僕が主役だよ。さてと、なにを話そうかな。殆ど僕は三上といいたからね。三上、家追い出されちゃったらしいから僕のところにかくまっているんだよ。ん？ ああ、この話は誰にもしてないね。何でも成績が悪すぎて追い出されたらしいよ。成績上がるまで帰ってくるなってさ。三上のお父さんも凄いとするとするよね。本当に。というわけで僕に泣きついてきたわけ。まあ、面白い暇つぶしになるからいいんだけどね。

8月6日、今日はいつものように屋敷で目を覚ます。目の前には三上の油断しきったバカ面。こうしてみると中々どうして可愛いと思えるね。まあ、寝顔だけね。いつもはそんなにないし。ああでも、昨日の夜は可愛かったなあ。

っと、それよりも起きないとね。三上はどうせもう少し寝るだろうし。起こすと機嫌悪くなるから起こさないようにしてベッドから出る。軽い私服に着替えてから部屋を出る。向かうのは食堂室かな。どうせ、父さんも母さんも帰ってないからね。メイドが食事を用意してくれてるから本当に楽だよ。

「直哉様おはようございます」

「やあ、加奈子さんおはよう」

メイドの加奈子さんと会った。この人一人でこの屋敷の掃除とか家事の全てをやってくれている、三上曰くスーパーメイドさんだよ。僕が子供の時から家でメイドしてるけど、まったく年齢を感じさせないんだよね。見た目もあまり僕と変わらないように見える。うん、若々しいね。僕のタイプだよ。女性の。

「食事のご用意が来ております」

「うん、ありがとう。じゃあ、僕は食べてくるよ。三上が起きたら三上も食堂に呼んでね」

「はい」

そう言っただけで食堂に行く。食堂でいつもどおりの朝食を食べていると三上が走ってやってきた。何をそんなに慌てているのやら。何かあったのかな？ まあ、あの慌てた顔を見たら何かあったことはモロわかりなただけだ。

「どうしたんだい三上。そんなに慌てて？」

「いいいい」

「はい？」

「妹が来る！？」

妹？ ああ、三上の妹の由香ちゃんね。三上と違って正反對のしっかり者。高校に入ってからには本当に綺麗になってきたてるんだよ。で、三上のあの慌てようは、苦手なんだよ由香ちゃんのこと。親からも期待されてるし才色兼備だし、自分とは真逆だから苦手なんだと思う。

「由香ちゃんですよ？ 問題ないじゃん」

「俺にとっては問題だらけだよ！！」

「何が？」

「せっかくここにきて自由を謳歌してんだぜ？ これで家に帰れとか言われたら俺は死ぬる！！」

はあ、やれやれ、まあ、僕も三上が居てくれたほうが嬉しいんだけどね。言わないけど。こんなこと三上に言ったら調子に乗るだろうしね。でも由香ちゃんが来るのか。彼女僕の家知ってるから迷う

ことはないだろうし、私設部隊で追い返すことも出来ない。結論から言えば追い返すことは出来ない。まあ、三上が会いたくない理由はここに居たいってことだから、彼女が納得すればいいわけだね。うん。これならいけそうだね。

「じゃあ、僕に任せてほしいな」

「おお！ 持つべきものは友達だぜ！」

「やれやれ、現金なんだから」

さてと、じゃあ由香ちゃんが来たときのために加奈子さんに行っておかないと。ふふ、楽しくなりそうだなあ。

・
・
・

一時間後三上の妹の由香ちゃんがやって来た。三上と違って本当に可愛い子だね。長くて綺麗な茶髪に整った顔立ち。本当に三上の妹とは思えないよ。どっかから攫って来たか、三上が別の親の子とすら思えるほどだよ。まあ、調べた限りそんなことはないから本当に遺憾って不思議だよね。

「やあ、由香ちゃんこんにちは」

「あ、そ、その、こんにちは栗原さん」

うん、可愛いね。なんだか気合が入った格好してるし。でも、少し顔が赤いな、暑いのかな？ 夏だし今日も気温は高いから当然かもしれないね。外で立つてもらうのも悪いし上がってもらおうかな。

「暑いでしょ上がって」

「は、はい」

「おーい、三上ー、由香ちゃんが来たよー！！」

「何で俺を呼ぶんだよ!？」

何だと聞かれても答えないけど。面白いからだよ。面白いに決まってるからだよ。大事なことから二回思ったよ。これは本当に大事なことなんだよ。面白いことは人間を豊かにすると思わないかい？ 笑いは人の心を豊かにして世界を平和にすると僕は思っているのだけれど、君たちはどう思う？

まあ、それは置いておいて、僕の部屋にそのまま来てもらう。他の場所だとくつろげないと思ってね。固くて苦しいのはみんな苦手だろうからね。まあ、あまりそんな部屋は少ないんだけど。ここに来た人はそうは思わないらしい。今度内装でも変えようかな。そうだな……内壁を全てショッキングピンクにしてみようか。うん、面白そう。あとで加奈子さんと相談してみようかな。

つとと、それよりも早く部屋に行かないのとね。三上を無視して由香ちゃんを僕の部屋に案内する。それにしても終始顔が赤いし、落ち着かないし由香ちゃんどうしたんだろうね。ここには何回か来た事があるはずだからそんなに緊張するとは思えないんだけどな？ どうしたんだろう？

まあ、いいか。それよりも何をしようかな。二人に聞いてみよう。

「それで三上に由香ちゃん何する？」

「いや、おい、本題忘れんなよ」

おつと、忘れてた。そうだったね。三上が帰りたくないから由香ちゃんもここに居候させてしまえって計画だったね。すっかり忘れてたよ。内装をショッキングピンクに変えることを考えてたら忘れてしまったよ。さてと、じゃあ、説得しようかな。

「えつと由香ちゃん今日は三上を連れ戻しに来たんだよね？」

「はい、そうです。お兄、父さんに言われたきり連絡もしないん

です。お兄、母さんがどれだけ心配してると思ってるの!」

「出てけたのはそっちじゃねえか!」

「あんな成績だったら誰でも言いたくなるわよ!」

「はいはい、兄妹喧嘩はやめようね」

ここで喧嘩しても無意味だし、いつまで続くかわかったもんじゃないからね。せっかくの夏休み何だから時間は有意義に使わないと。時間は有限なんだよ。いつまでもこんな生活が続くとは限らないから楽しめるうちに楽しんでおかないと。この世界もいつまで続くのかわからないしね。作者がどうなるかもわからないし。

さてと、どうやって説得しようかな。うん、ここは直球で行こう。

「えつとね、由香ちゃん、実はね提案があるんだよ」

「提案、ですか?」

「うん　とつても良い提案だよ。三上は帰りたくないだよ。でも、それじゃ三上がどんなことしてるか心配で問題は解決しなかったらこうすればいいと思ってね」

「何ですか?」

「由香ちゃん家に泊まっていけない?」

「……………はい?」

第四十六話 栗原、三上、由香住む？

由香ちゃんは、ぽかんとしたような表情のまま固まってしまった。でも、はいつて言ったから了承と取っていいのかな？ まあ、いいや。とりあえず了承したのならそれで話を進めないかね。

手を叩いて加奈子さんを呼ぶ。すぐに加奈子さんは来てくれた。

「何でしょうか？」

「うん、これから由香ちゃんもここに泊まることになったから部屋を用意しておいて」

「かしこまりました。しかし、良いのですか？ 先ほどから聞いておりましたが、直哉様。どうして、彼女も居候させるということになったのですか？ それでは本末転倒な気がいたします。モノローグを読んでいましたがそこら辺が説明されていないので少し話を整理してください」

うん？ あれ？ どういうことだっけ？ えっと？ 確か由香ちゃんが来たのは三上のお母さんが心配してるから三上を連れて帰るだったよね。うん、それがどうして由香ちゃんもここに泊まることになったかって言うと、あれだよ。由香ちゃんたちは知らないと思ってるみたいだけど、僕、三上のお母さんのこと知ってるんだよ。それで、三上が帰ってこないくらいで心配するようなお母さんじゃないんだよ。あの人は。どちらかと言うと喜びそうなんだよ。

だから、由香ちゃんが言っていることは嘘で、本当は由香ちゃんが三上と一緒に居たいだけなんじゃないかなって思ったんだよ。由香ちゃんはブラコンみたいだからね。今回も会いたくて来たんだよというわけ。なら、泊めてあげようかなって。

「だから、ここに泊めることにしたんだよ」

「……………はあ〜」

あれ？ 何で加奈子さんそんな深い溜め息ついてるんだろう。そして、小声でかわいそうとか呟いてるけど。なに言ってるの？

「とりあえず了承いたしました。あなたのその性格が治る事をお祈りしています」

「はい？」

加奈子さん変なこと言っ出て行っちゃったよ。なんかまずかったかな僕？

「まあ、いいか。とりあえず部屋は用意するから由香ちゃんは何の心配もいらぬよ」

「……………ねえ、お兄あれって素で言ってるの？ あのモノローグって」

「（ああ、本気だぞあいつは。俺でも、お前がかわいそうに思える）」

「（お兄の同情は正直ウザいからいらぬけど。私って魅力ないのかな？ 本気出して来たんだけど）」

「（それはないと俺が保障してやる）」

あれ、なんか三上と由香ちゃんが二人で密談を始めたぞ？ 何を話してるのかまったくわからないな。そこまで耳よくないからね。読唇術を使おうにも手で隠されてるし。まあ、いいか。久しぶりの再会なんだろうし、何か話すことでもあったんでしょ。

「さてと、それじゃ2人とも何する？」

「ちよ、ちよっと待ってください！ まだ、私泊まるなんて」

「あれ？ でも、はいつて言っただよね？」

「いや、だからあれは突然のことで啞然としてて」

うん？　ということ是由香ちゃんは泊まらないの？　うん、でももう準備しちゃってるしな。主に加奈子さんがだけど。どうしようかな。今更帰るって言ってもな。とりあえずもう1回意思確認しよう。

「由香ちゃんは泊まりたくないの？」

「あ、いや、そういうわけじゃ」

「ならいいよね」

「は、はい」

よし、じゃあこれで良いね。さてと、じゃあ本格的に何しようかな。みんなで遊べる何かがいいよね。この前のアレは駄目だし。なにしようかな。

「（ねえ、押し切られたけど良いのかな本当に？）」

「（いいんじゃないかね？　あいつが良いって言うてるから）」

また何か内緒話をしてるよ。一体なにを話してるのやら。少し気になるな。本当。まあ、兄妹の仲に割ってはいるほど僕はデリカシイのない男じゃないしね。そうだ、アレにしておこうかな。うん。

「2人ともアレをやるよ」

「「アレ」」

「うん、転落ゲーム」

転落ゲームとはスゴロクだよ。簡単に言えば。駒とルーレット使って転落人生を歩んでいくゲームさ。一番最初に金を使いきった人の勝ち。よくある人　ゲームの逆バージョンだね。斬新なコンセプト

トのせいであまり売れてないんだけどね。楽しいと思うんだけどね。作る時代を間違えたんだよきつと。たぶん100年後くらいには流ると僕は思ってるよ。

「あゝあれか。俺得意だぜ」

「お兄確かに転落人生得意そうだもんね」

「確かに三上にはお似合いだよ」

「おい喧嘩売ってんのかコラ」

「「違つよ精一杯ほめてるんだよ」」

あ、由香ちゃんとハモっちゃったよ。それを聞いた三上が泣いちやったようるさいな。とりあえずカメラで撮影して、今夜のアレに使わせてもらうとして、さつさと泣き止ませてゲームを開始しよう。

「ほら、三上始めるよ」

「お兄みつともないから早く泣きやんでほしいんだけど。というかさつさと泣き止め」

「うおおお、少しは慰めるー!!」

「早く始めましょう」

「そだね」

「無視するなー!!」

というわけで、三上を無視しつつ転落ゲーム開始。

・
・
・

結果発表、僕1位、由香ちゃん2位、三上最下位。なぜかルールトをひたすら回してお金を使っていくゲームだというのに、三上はルールトを回すと必ずお金が増えていくマスに止まったためだ。

いつもはお金に縁がなにのにこういうときだけは三上ってあるんだよね。お金に縁が。

で、これに負けた奴には勝った奴のいうことを何でも聞くということルールにしてたから。三上は聞いてなかったみたいだけど。由香ちゃんと2人で、三上にあれこれ無理難題言って楽しんだよ。いや、あの空中バク転三回捻りよく出来たよね三上。まあ、なんかグキリって嫌な音が腰からしてたんだけどね。

まあ、楽しかったよ。これから、こんな楽しい日々が続くと思うと本当、嬉しいよ。

・
・
・
そして、夜。

「行くよ三上」

「ちよ、ヤメ、アー！」

「ちょっと、お兄暴れないで。うまく貼れないじゃない」

三上の腰をマッサージすることになってしまった。

第四十七話 話をしようと思ったならなぜかデートに誘われた(前書き)

どうもお待たせしました。

第四十七話 話をしようと思ったならなぜかデートに誘われた

8月に入ったので、僕は小雪の病院に来ていた。色々あったから、話に来ないといけないと思ったからという理由でだ。最近は行けてなかったから行けるときに行かないと、次はいつ行けるかわからないからな。

見慣れた受付の人と少し話してから、目的の小雪の病室へ。今日のお土産はアイスだ。このところ暑いからな。喜ぶだろう。夏らしいし。佐藤とかを連れて来ればよかったのだが、まだ許可が取れないのだ。こればかりは仕方ないので話だけで満足してもらおう。コンコンとノックして小雪の病室に入る。

「入るぞ。ほら、お土産のアイスだ。今日も生きてるか？」

「あ、悠君、うん、今日も元気だよ」

「そうかそうか、それはよかった。ほら、アイス。なんか、新発売のやつでな、お前が好きそうだったから買ってきた」

「わあ、納豆アイス！へえ、こんなのあるんだ。うん、おいしそうだね」

それをおいしそうっていうお前だけは理解できないんだよな。昔からこういうの好きだったし。ゲテモノっていうかなんというか。俺はあまり好きじゃない。しかし、世の中は小雪の味覚に近いらしく、かなり納豆アイス人気だったんだよな。信じられない。他にもエビチリアイスとか、マーボードーフアイスとかあった。アイス付ければ何でも良いなんてものじゃないぞ。

「喜んでくれてよかったよ」

「悠君が持ってきたのだったら何でも嬉しいよ」

「そうか、嬉しいこと言ってくれるな」

「ねえねえ、食べて良い？」

「ああ、つて、しまったスプーンねえや。ちよつともらつてくる」

まさかスプーンが入ってないとはあの店員め。目が半分閉じてたけどマジで寝てたのかよ。どつりでおつりとか間違つてるわけだよ。病室を出て休憩室を探す。あそこなら確かスプーンがあつたはず。

「あら〜？ あらあらあら〜？」

スプーンを探していると白衣を着た11、2歳の子供に見える医者がそんなことを呟きながらやつて来た。本当、毎度見舞いに来るたびに思う。この女性は本当に成人した大人かと。

この女性はアリエス・ソワールさん。小雪の主治医。母方が外国人でハーフらしい。詳しいことは聞いたことがないからわからない。なんでも結構優秀なお医者様らしいんだ。それが何でこの町でこんな病院で医者やつてるんだろつかと思うよ。それでもこの人のおかげで小雪は結構よくなったみたいだから、感謝している。凄い医者なのもわかる。ちよつとおつとりしてるけど。

「狩野さん、お久しぶりですね〜。小雪ちゃんのお見舞いに来てるのは知ってましたけど、私にはまったく会いに来てくれませんでしたよね〜。さびしかつたんですよ〜」

これは本気で言っているのだろうか。この人の表情は本当にわかり難い。まあ、でも小雪には会いに来てたけど、アリエスさんにはまったく会わなかったからな。そう言われても仕方ないかもしれないけど。でも、進んで会うほど親しくないような気もする。まあ、小雪の主治医だから結構したしいんだけどね。

「それはすみません」

「いいですよ、今日は会えたからんですから。次はここに来たらきちんと挨拶してってくださいね。彼女のご両親は相変わらずあまり来てくれませんか」
「そうですか」

相変わらず小雪の両親は忙しいみたいだな。それでも何回かは来てるみたいだけど。小雪も僕なんか来るより親が来た方がいいに決まってるし。でも、こればかりはどうしようもないな。

「でも、狩野君が来てくれると嬉しいみたいで、いつも私に話してくれるんですよ。もう、その時の小雪ちゃんって可愛くて可愛くて、食べちゃいたいくらいよ」
「あははは」

頬に手を置いて言うアリエスさん。この人が言うとなんか冗談に聞こえないんだよな。本当にやりそうで怖い。誰得なんだよそれは。

「私得です」
「そんな　が飛びそうな笑顔でいわないでください。というかモノローグを読まないでください」
「そうですね、うふふ、どうしましょうか？」

いや、どうしましょうかって、普通にやめてください。でないと僕にも考えられませんから。というか、スプーン探しに來ただけでどうしてこんなに時間が掛かってるんだよ。絶対小雪待ってるよ。あとで怒られるの僕なんですけど。

「冗談ですよ　狩野君ってなんだかいじめたくなっちゃうんですよ。ふふ、慌てた様子は可愛いですね。そうだ今度お姉さんとデートしません？」

「遠慮させてください」

「あら残念　そうですね〜じゃあ、ショッピングに付き合ってください。もちろん2人つきりです」

「それを世間一般ではデートと言いますけど」

「というか僕とデートしたいって何でだよ。僕は別に年上が好きとかではないのだが。好きなのはあの九条だし。いまだ、なにもアプローチすら出来ていないという現状だけど。いや、ちゃんとやる気はあるんだよ。それなんだけど、なぜかいつもあんな風に喧嘩というか皮肉しか言えなくなると言うか。ああ、ヘタレですよこんちくしょう。」

「そうですか？　私はただ水着を選んでほしいだけですけど〜」
「完全にデートですね」

デート以外の何ものでもなかったよ。ショッピングで水着選ばれべとか彼氏に連れて行ってください。それを僕みたいなのを指定してやらないでください。いや、昔莉子に散々選ばされたけど、それはノーカウントだろう。僕みたいなセンスないのに選ばれても困るだろうし。丁重にお断りしなければ。

「ふふふ、いいじゃなですか。お姉さんとのデートですよ？　一度くらいは経験しておいて損はないと思いますけど？」

「いえ、僕がデートしていると他で被害が出るので」

三上とか三上とか三上とか、木山とか木山とか木山とか。この2人にバレたらもう僕学校生活送れなくなるよ。一撃で学校中に広まっちゃうよ。下手すればロリコンとか呼ばれちゃうよ。そしたら生きていけない。それに莉子にバレたときが一番怖い。昔、とある女の子と偶然町であって買い物してたとき莉子に見つかった危うく僕

が殺されるところだったんだから。

だから、デートだけは避けねば。って、アレ？ そうしたら僕デートできないんじゃない？ い、いや、そんなことはないはずだ。うん、莉子も大人しくなっただけだし。もうないはず。そう、多分うん、ないはず。はずだよな？ ない、うん、ないんだ。ないということにさせておいてくれ。

「大丈夫ですよ、私の車で隣町の隣町まで行きますから」大丈夫夫ですよ」

確かにそれなら見つからないかもしれない。って、おいしい！ やばいって、これ完全に退路防がれてないか？ あれ、このままデートする流れですか？ てか、何でデート！？

「大丈夫ですよ。デートではなくただのショッピングですから」

そうか、それなら大丈夫か。いや、もう、あまり大丈夫じゃない。

「じゃあ、明日9時に駅前に来てくださいね。迎えに行きますから。それじゃ」

アリエスさんはコーヒーを持ってそのままどこかへ行った。おいおい、急すぎるし、しかももう僕が行くことは決定事項ですか。はあ、頼むから明日は誰にもバレないように祈っておこう。はあ。その後、スプーンを見つけた戻ったらやっぱり小雪は怒っていた。僕のせいじゃないのに。でも、遅れた理由が言えるわけがなく、怒られた僕。くそう、明日は奢ってもらおう。うん、そうしよう。その後いつものようにいろんな話をして僕は帰った。

第四十七話 話をしようと思ったらなぜかデートに誘われた(後書き)

ようやく更新することが出来ました。

お待たせしました。

相変わらずリアルは忙しいので不定期更新となりそうですが、がんばって更新して行こうと思います。

第四十八話 ひよんなことから先生とデート（前書き）

お待たせしました!!。

ようやく更新です!!

いや、本当に申し訳ないです。リアルが忙しかったとは言えここま
で更新できないとはまったく思ってたませんでした。

クオリティは相変わらずですし、これから先の更新の予定も微妙な
ところですが、完結までやめる気はないので、これからもよろしく
お願いします。

第四十八話 ひよんなことから先生とデート

翌日、僕はアリエスさんとの約束を守るために9時の20分くらい前に駅に居た。あの後メールで念を押されてきちんとお洒落してきた。いつ僕のメアド教えたっけ。僕は教えた記憶がないのだが。そんな駅前で待っている僕なのだが、とりあえず誰にも見つかりなさそうなところで待っている。誰にも見浸かりたくないからだ。

そして、来てすぐにアリエスさんも来た。乗ってる車がまた凄かった。あまり車に詳しくはないけどたしか、フェラーリ・F430と呼ばれる車種だった気がする。なんというか、一見子供みたいな人が乗っているとどうにも違和感がある。もう半端ないほどに。

「あら〜早いですね〜」

「今来たところですよ」

「わかってますね〜さすが狩野君、だから大好きなんですよ〜。女心をわかってます」

いや、本当に今来たんですけど。つて、聞いてないや。はあ〜、まあいいか。今日は隣町の隣町に行くんだし。僕はあまりこの町から出てないから、結構楽しみなんだよ。もう、逃れられないなら楽しんでる勝ちつてね。誰か言っていたからな。

「じゃあ、乗ってください〜、あ、私の運転荒つばいですから、シートベルトはきちんとね〜」

「わかりました」

うわ〜隣に乗って見ると違和感がよくわかる。着ている服もいつもの白衣と違い大人っぽいものであるが、それも違和感を助長させるだけであった。いや、この人の性格で子供服とか着てもそれは

それで違和感はあるが、どうしようこの違和感。まあ、いいや、慣れるだろう。

とりあえずシートベルトだ。荒っぱいのレベルがどれだけかわからないからな。

「あ、あと、私は今日は1日悠君と呼びますから。苗字じゃ親しみがないですし」

「はい！？ いやいや、それは」

さすがに、アリエスさんにそんな呼ばれ方されたくない。というか、一見幼女にしか見えない人に、年上そつに君付けでが呼ばれたくない。

「だめ、ですか？」

「うぐっ！」

上目遣いで頬染めてそんなこと言わないでください。良心が痛いです。……………はあ。

「わかりました……………」

「はい、じゃあ、行きましょう」

何だろう。なんか体よく誘導されたような気がする。というか、この人は自分がどんな風に人に見えているかわかってるよなきつと中宮会長とは真逆だよな。あの人は自分のことはまったくみえてないみたいだったし。まあ、それは普通どんな人も同じなんだろうけど。自分の姿なんて自分で見えないからな。

そんなことを考えている間にゆっくりと車は発進した。この時はまだ普通の運転だ。うん、まあ、制限速度とかあるからな。

「高速に乗りますからね。覚悟してくださいね。あ、気持ち悪くなったら言って下さいね。きちんと看病してあげますよ」

「看病するなら、そうならないようにしてください」

「善処します。さて、行きますよ」

ついに高速に乗ってしまった。徐々にスピードが上がる。そしてその後はあまり覚えていない。なにやら、物凄いことがあったというだけわかっている。ただ、気が付いた時には隣の隣町、桜夕町に着いた。はつきり言って物凄い疲れた。

「さてと、目的地は新しく出来たシヨツピングモールです。あ、ここからは安全運転なので大丈夫ですからね。ふふふ、気を失っていた悠君も可愛かったですよ。あんなところや、そんなところも触り放題でしたし」

「なにやっただんですか!？」

「何も」

はああああ、この人は、もう……はあ。わかってたこととは言え、果てしなく精神的にきついなあ。今日僕、生きて帰れるのだろうか。帰りの車の意味でだが。

さてと、そんなことはさておいて、ここが隣の隣町桜夕町か。あまり変わらないな。いや、町1つ越えたくらいで変わるとかはないんだろうけどさ。まあ、学業特区とか、彩皇町みたく特化区画政策（だっけ？）がない分、結構学校とか商業施設が分散してるみたいだから、使い勝手とか悪そうだな。特に目の前の私立高校とか山の上だぞ。坂上がるの疲れそうだな。でも、あれ全部桜だよな。春は綺麗そう。しかし、のどかだ。田舎ってわけじゃないけど、なんだかのどかな気持ちになる。

「のどかな町ですね」

アリエさんも同じことを感じたのか言う。まあ、夏だからちょっと、というかなかなり暑いけど。

「そうですね」

「さてと、じゃあ早速ショッピングセンターへ向けてれっつご」

ゆる～くアリエさんが車を走らせる。中央駅の近くにあった大きく綺麗なショッピングセンターに到着した。オープンしたてだから人がとてつもなく多い。近くにいただけで酔いそうになる。こんな人ごみに来るとか自殺行為過ぎるだろう。それでも、アリエさんは行くみたいだ。

「凄いですね」

「そうですね。主に人が多いです」

「気分悪くなりそうですか」

「少しだけ」

「ふふ、気分悪くなったら言ってくださいね」

はいと、返事をしてショッピングセンターへ入る。その際アリエさんが腕を組んできたりしているのだが、もうツツコのやめたどうせ、言っても聞いてくれないし、そんな僕の様子を見て楽しんでいる風すらある。それなら素直に従っていたほうがマシだ。でも、素直でも言われるんだけどね。

ショッピングセンターの中に入ると、更に人が多かった。しかし、それでも何とか動けるようだ。ここがそれだけ広いつてことなんだろう。1日で回りきれるとは到底思えない。予定をこなせるかも怪しいな。これだけ広いところにこの人口密度だ、動くのも厳しい。

って、アリエさんいないし。考え込んでいる間に腕組むのやめ

て小さいからだを生かしてスイスイと進んでいく。おいおい、なんじゃそりゃ。それなら僕要らないじゃん。何で僕呼んだんですか？
てか、早いよ。

「こつちですよ　　おゝい、早く来てくださ〜い」

「わかりましたから、そんなに叫ばないでください」

「遅いのが悪いんですよ　　。あ、こつちです」

スイスイと進むアリエスさん。付いていくだけでやっつた。人ごみは本当に歩き難い。それにしても、一度地図見ただけで頭の中に入っているというのが凄いな。もう、僕は自分がどこにいるのかわかりません。ここはどこですかね。人が多すぎて本当にわからない。逸れたら終わりだな。よし、逸れないようにしよう。

しかし、本当に何でもあるみたいだな。人が多いが、人ごみの合間から見える商店は様々な種類がある。で、目的地は水着店なんだろうけど、果てしなく僕は入り難い。あのアリエスさんだ、きつと僕も入れられるんだろうな。

「はあ、まあ、いいか。あの人楽しそうだし」

第四十八話 ひよんなことから先生とデート（後書き）

低クオリティですみません。作者は相変わらずの紙メンタルなので、批評とかはなるべく厳しくないようお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1221/>

恋も幸せも彼女しだい

2011年10月9日14時34分発行